
Familiar Spirit

三國

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Familiar Spirit

【Nコード】

N2118S

【作者名】

三國

【あらすじ】

無難に家から一番近い高校を受け、あたりまえに受かると思っていた。主人公の橘彩。ほかの高校は受けていないはずが、フルプルフ学校と言う所から合格通知が届いた。悪戯だと思った彩はすぐに合格通知を捨てた。だが受けていた高校の合格発表に行ったら彩は落ちていた。絶望していたところに届いた物それは本だった。その後彩は思いもしないトラブルに巻き込まれていく

第一話 契約（前書き）

これがはじめて書くものなので、
変な表現わかり難い表現があるかもしれませんが
よろしかったら、みてください

第一話 契約

《Familiar Spirit》
ファミリアー

通称とは、主に本に封印された魔族のことである。なぜ封印されているのかは不明だが、魔力を持つ者は封印を解くことができ、封印されていたファミリアーを使役することが出来る。

しかし、魔力を持たない者が無理矢理封印を解く（本ならば燃やす）とファミリアーが暴走し逆に操られることもある。

ちなみにファミリアーを使役する者は《魔封術師》、ファミリアーに操られた者は《ドール》と呼ばれている。

ほとんどのドールは放って置くと魔術を使って悪事を働くので放って置くことは出来ない、しかしドールを止める為には再びファミリアーを封印しなければならない。でも、封印出来るのは魔封術師だけ。つまりドールに対抗出来るのは魔封術師だけと言うことだ。

そう言う訳で、対抗出来る魔封術師を増やす為に世界中から魔力を持つ者を集め秘密裏に設立された教育機関。その名は、

《フルブルーフ魔封術学校》

フルブルーフ学校設立から数十年が過ぎたが、未だにドールとの戦いは終わっていない。

そして、またドールに対抗するため魔力を持つ者にフルブルーフ魔封術学校合格通知が送られた。

「なんだ？合格通知？」

朝起きて一階に降りていたら、新聞を取って来てと言われたので新聞を取りに行ったら新聞だけではなく封筒もあった。自分宛だったのでその場で封を切って中身を出して見てみたら、でっかく《合格》と書いてありその下に、《貴殿が本校に合格したことを通知させていただきます。フルブルーフ学校―校長シルヴィ・フォーレ》と、書いてあった。

「俺はフルブルーフ学校なんて所は受けてないぞ」

彩は無難に家から一番近い高校を受けていた。当たり前にかかると思っていたので、滑り止めに私立なども受けてはいない。だから他の学校から合格通知などが来る訳がないと思って、これは悪戯かなんかだとこの時は判断し、新聞を親に渡してから合格通知をゴミ箱に捨てて、受けていた高校の合格発表に行く準備をした。

悪夢だった。当たり前にあると思っていた。しかし、彩の受験番号はなかった。彩の頭の中に不合格の三文字が浮かび、重くのし掛かった。

気づいたら自分の部屋のベッドの上に寝転がっていた。どうやって帰ってきたかなんて覚えていない。これからどうすればいいの色彩には、わからなかった。どうしよう、どうすればいい、そればかりを考えている内に思い出した。すっかり忘れていた。

思い出したものは、フルブルーフ学校の合格通知だ。悪戯だと思っていたがもしかしたらと、どんな学園なのかとパソコンで

フルブルーフ学校を調べてみた。調べた結果は最悪だった。なんとヒット件数が0件だった。フルブルーフ学校なんて存在しないやっぱり悪戯だったのだと打ちひしがれていたら、ノックの音が聞こえた。誰だよ。こんな時にと彩は思った。ガチャッとドアが開いた。

「彩宛に荷物が届いたわよ」

母さんだった。彩宛の荷物を持ってきてくれたらしい。

「あ、うん。ありがと……そこに置いて」

彩はなんだろう？ 思いながらそう返事をした。

母さんが出て行ってからすぐに彩は、荷物を開けた。

中身は本（もつとも本といってもラノベぐらいの大きさだ）だった。本の名前は《Cat Familiar Spirit》。何か不思議な感じのする本だと彩は思った。彩は本を手にとった。すると、本が勝手に開き、本から何かが出てきた。出て来たものは、「うわっ、な、なんだ。なんか本から出て来る」その姿は彩はよく知っていた。

「ね、猫？」

なんと猫だった。ちなみに黒猫だ。

彩は、何がなんだか分からなく、啞然としていた。

黒猫は彩の事をじーっと見てきた。

「な、何だよ」

思わず彩はそう言っていた。もちろん、返事が返ってくると思っ
つていなかった。しかし猫は、

「気にするな。……お前が、橘彩で間違たちはな・さいいないか？」

返事をした。しかも、普通に言葉を喋って。

「……………え？」

彩は、突然猫が喋ったのに吃驚して頭が真っ白になってしまった。

「だから、お前が橘彩で間違いないか、と訊いているんだ」

（この声ってやっぱりこの猫……………だよな）

「……………あの〜」

彩は恐る恐る声に話し掛けた。

「なんだ」

「貴方は、猫ですか？」

この声の主がこの自分の目の前にいる猫かを確かめるために。

「他になんに見える？俺がライオンにでも見えるか？」

猫は、人を小馬鹿にした言い方をしたが、今の彩にはそれを気にしている余裕はなかった。

「あ、いえ。そんなことないです。」

（ああ、どうしよう。俺、不合格があまりにショックで幻覚と幻聴が、

しかも、幻聴と会話が成立してしまったよ。病院に行ったほうがいいのか？）

彩は、しゃがみ込んで頭を抱えた。

「おい、そんなことはどうでもいいが。俺の質問に答える。」

お前は橘彩で間違いないのか？」

どうでもよくないだろう、と彩は思ったが幻聴につっこんでも仕方ないと心の中だけに留めて置いた。

「あ、はい。俺が橘彩で間違いないです。」

彩は答えてからなぜ、自分が幻聴相手に敬語を使っているんだらうと、不思議になってしまった。

「そうか、ではこの本の上に手を翳せ」

猫は自分が出て来た本を咥えて、彩の前に置いた。

「は、はい」

従う理由はないはずだが、この時彩はなぜか逆らってはいけない気がして大人しく従って、本の上に手を翳すと猫がいきなり彩の手を引っ搔いてきた。

「っ！！！」

彩の血が本に落ちた瞬間、本が光りだした。光の強さはたいした事はなかった。せいぜい豆電球程度だ。

「彩、俺が今から言う事復唱しろ。………Cat Familia

r Spirit ベニート」

「……………」

彩は本が突然光り出した事に吃驚して固まってしまっていた。

「はやくしろ！」

猫が怒鳴ってきた。それで、ようやく再起動をした。

「は、はい！えっと…………… Cat Familiar Spirit
t ベニート！」

彩が復唱し終えた途端に、光が強くなってすぐに何事もなかったかのようにおさまった。

「よし、契約完了…………… おっと自己紹介を忘れていたな

俺の名前は、ベニート。

フルフルーフ魔封術学校から送られた、お前専用のファミリア
ーだ」

「フルフルーフ魔封術学校？」

彩は、どこかで聞いた事のある名前だと思った。

「ああ、そうか。お前にはフルフルーフ学校って言った方が分かるか？」

「フルフルーフ学校…………… ああ！あの悪戯の？」

「悪戯じゃない。その証拠に今ここに俺がいるじゃないか。」

猫…ベニートは、苦笑い気味に反論した。

「悪戯じゃなかったのか？あ、そういえば魔封術って？」

「まあ、簡単に言くと俺みたいなファミリアーを使役する為の術だな」

「えっと、ファミリアーってなんですか？」

「ファミリアーっていうのは《Familiar Spirit》
の通称だ。

お前に分かり易く言くと使い魔だな」

「使い魔…………… あの、魔女とかが使役するやつのこと？」

分かり易いかどうかは、よく分からなかったが、少なくともFamiliar Spiritよりは理解できた。

「ああ、まあそんなところだ

で、だ、お前はその魔封術を学ぶ為にフルプルーフ魔封術学校に入学するんだ

ただ、フルプルーフ魔封術学校の存在は世間に知られるわけにはいかない

だから、フルプルーフには結界を張ってある。

その結界の中に入るには、ファミリアーと契約してる必要があるんだ

それで、俺が送られて来たと言う事だ。ちなみにさっきやったのが、契約だ」

ベニートの説明を訊いていて彩はひとつ不思議なことがあった。

「あのベニート？なんでその魔封術を俺が学ばなければいけないの？」

ベニートは一瞬キョトンとしたが、すぐに答えた。

「それは、お前が魔封術師になる為に必要な魔力も持っているからだ」

「魔力？そんな力を、俺が持っていたなんて。

あ、でも俺その学校受けてないけど、なんで合格しちゃっているの？」

「それは、鳥型のファミリアー達が魔力を持っているやつを探してそれで、持っているやつがいたらそいつに合格通知を送っていたっただけだ。

だから、別に試験とかは受ける必要はない

ちなみにお前の合格通知に《フルプルーフ学校》って

魔封術を抜いて書いてあったのは、お前が俺たちのことを知らないやつだったからだ」

「そう言う事だったのか。まったく、受けたことがない学校から合格通知が来たから

ただの悪戯かと思ったよ。あ、そういえば、学校ってどこにあるの？」

当然の疑問を彩はベニートにぶつけてみた。

「日本近海にある島だ。飛行機ではいけないから船で行くことになる
入学式は二週間後だから、その一日前にフルブルーフ魔封術学
校行きの船に乗る」

「え？島なの？じゃあ寮暮らしってこと？」

綾には学校が島にあるなんて予想外だった。ここから通えるだろ
うと思い込んでいた。

「ああ、そうだ」

「そっか……じゃあ、しばらくこっちには戻れないのか」

「長期休暇の時には戻ってこれるぞ」

ただし、学校で学んだことは口外したら駄目だけだな」

「そっか。ならいいかな」

じゃあ、母さん達に説明しなきゃいけないな」

「くれぐれも、魔封術のことは話すなよ」

ベニートが釘をさして来たが、もともとこんな話をしても信じて
もらえないどころか、頭がおかしくなったと思われて、病院に連れ
て行かれそうだから、話すつもりはなかった。

「わかってるよ。じゃあ説明してくる」

よく考えてみるとなぜ、幻覚だと思っていたベニートの話をここ
まで信じているのか彩自身も不思議ではあったが、今の話が全て本
当だったら辻褄が合うと思って、彩は無理やり納得することにした。

あれから、十三日

つまり船に乗ってフルブルーフ魔封術学校に行く日である。

実は今はもう、船に乗っている。家を出る時は母さんに「これを

肌身はなさず持つていなさい。絶対に落としちや駄目よ」とお守りまで渡された。心配しすぎだと、彩は思った。そんなことを考えていたら隣にいたベニートがいきなり毛を逆立てた。

「おい、彩！何か来るぞ！」

「え？な、何かって？」

「おそろく、敵だ」

「て、敵！？」

彩は辺りを見回してみたが、そんなの見る影もない……………と思っていたら、海の上を何かが飛んでこっちに向かって来ているのが見えた。

「確かに何かこっちに向かってきてる……………あれが、敵なの？」

「ああ」

話している内に敵（？）が船に辿り着いた。すぐに、乗務員がその敵を取り囲んだ。敵は金髪でロングヘアの女の子だった。歳はおそらく彩と同じくらいだろう。女の子は船内を見回している。何かを探しているように見えるそして、彩を見た。

「……見つけた」

ニヤツと笑い、彩に右手を向けた。

「エクスプロージョン」

彩の立っている場所で、突然爆発が起きた。

「がはっ！」

彩が血を吐いて倒れた。

「彩！大丈夫か！」

とても大丈夫とは思えない状態だが、ベニートは思わずそう叫んでいた。

「ちつ。彩がこんな状態だと魔術が使えない」

ベニートは、彩を攻撃したやつを振り返って睨み付けようとした。そうあくまでそうしようとしただ。実際には、睨み付ける事はできなかった。ベニートが振り返ったときには既に女の子は乗務員達の包囲網から逃げ延びていた。

ベニートが彩の方に振り返ると、彩から光が発せられていた。光はだんだん強くなっていつて、目も開けられなくなった。

第二話 性転換

光がおさまって彩のいた場所を見たら、そこには見た感じ外傷はなく彩と思われる者が横たわっていた。彩だと断定しないのは確かに歳は、彩と同じくらいだろう。どことなく、彩に似ている気がする。髪の色も彩と同じ茶髪だ。服も彩が着ていたものと同じものだ。だが、決定的に彩と違うことがある。彩は男だ。しかし今、目の前にいる彩(?)はどう見ても女の子だった。

「ん……あ、れ、ここは？」

彩が目を覚まして、部屋を見回し、今の状況を把握しようとした。どうやらまだ船に乗っているようだ。部屋を見た感じ医務室だろうと考えているとドアが開いた。

「目を覚ましたか、気分はどうだ？………彩」

ベニートだった。ベニートは彩が目を覚ましたのに気づいて話し掛けてきた。

「あ、うん………悪くは………ない……よ。あ、れ？」

彩は自分の声がおかしい事に気が付いた。声が高くなっている。まるで、女の子のような声だ。ふとある考えが頭をよぎる。彩は恐る恐る自分の体を調べてみた。

「う、そ。まじで？なんで？」

あるべき物がなく、ある筈のない二つのふくらみがあった。

「あの襲撃者の女の仕業………としか今は考えられないな。」

まあ、なんだ、その、お前が今女だと言っるのは紛れもない事実だ。大人しく、その事実を受け止める。今はどうすることも出来ないからな」

ベニートの言っていることは正しいと分かる。だけど、だからと言ってすぐ納得することは、彩には出来なかった。

「そんなの嫌だー!!」

彩の叫びは船内中に響き渡った。

「失礼します」

学校のある島に着いた彩は、すぐに学校に呼び出され学校に着いたら校長室に案内された。ちなみに、ベニート、というよりファミリアーは船に降りたら案内という役目を終えたので本に戻った。

「急にごめんなさいね。」

私は、校長のシルヴィ・フォーレです。

私の事は、校長先生じゃなくて、シルヴィって呼んでね、彩さん「は、はい」

シルヴィは校長とは思えないほど若い。まだ二十代なのではないだろうか。それにすごく美人である。これほど美人と話をした事がないので彩は、緊張してしまった。

「緊張しなくていいのよ。リラックスしてリラックス」

シルヴィが、微笑みながら彩に近づいて来ていきなり胸を鷺掴みにしてきた。

「い、いきなりなにをするんですか!」

彩は、シルヴィから距離をとって、抗議した。

「ホントに女の子になっちゃったのか確かめただけじゃない。そんなに怒らないでよ」

シルヴィはシヨンボリとしてしまった。その姿に彩はなんだか罪悪感を感じてしまった。

「うっ、お、怒ってないですよ？」

ちよっと吃驚しちやっただけですよ。だから、気にしないでください」

その罪悪感のせいで気が付いたら、彩はシルヴィを慰めていた。

「うう、ホントに怒ってない？」

シルヴィが上目遣いに聞いてきた。これは反則だと、彩は思った。「ホントですよ」

彩は努めて優しい声で言った。

「なぐんだ、怒ってないんだ。ならよかったわ。じゃあ、本題に入るわね」

シルヴィは、何事もなかったかのように話し始めた。彩はからかわれたのだと気が付いたが、文句を言っても敵わない気がして、彩は大人しく聞く事にした。

「あなたは、本当は男の子だけど襲撃者の攻撃を受けて、

何らかの理由で女の子になった。これで、間違いないわね？」

「はい、間違いないです」

本当は認めたくはなかったが、認めても認めなくても自分が女の子になっちゃったのは変わらないので、彩は諦めて渋々認めた。

「ん……ま、いいわよね」

シルヴィは少し悩んだが、すぐに考えはまとまったみたいだ。

「橘彩さん、あなたの今後の処遇を伝えます。

あなたは、男子生徒としてではなく女子生徒として入学してください

あと、この事は誰にも話してはいけません。

幸い見ていた生徒は少なかったらしいですからね。たしか、三人でしたっけ？

その三人の生徒には、既に緘口令を敷いてあります。
あ、もちろん、寮も女子寮に住んでもらいます。

あ、あと名前も橘彩^{サイ}ではなく橘彩^{アヤ}としてくださいね。
字も同じで、ちょうどいいですから。いいですね？」

彩は、シルヴィと話をしているうちにこんな事になるじゃないかと予想していた。

「まあ、そうするしかないでしょうからね。

仕方なくですけど、そうします」

彩は、また渋々そう答えた。

「よろしい」あ、そうでした。ちゃんと言葉遣いも気を付けてくださいね。

一人称も俺じゃなくて、わたしとか、あたしとか、とにかく女の子らしい一人称だね」

シルヴィさんはなんだか楽しそうだなと彩は思った。実際シルヴィは、この状況を結構楽しんでた。

「それにしても、正直言って美少女だしスタイルいいし、あなたこのままずっと女の子でもいいんじゃない？

きつと、モテるわよ」

シルヴィが恐ろしいことを言ってくる。

「じよ、冗談じゃないですよ。俺は普通に女の子が好きなんです。男にモテたって、少しも嬉しくくないですよ」

彩は、男にモテる自分を想像してしまい鳥肌が立ってしまった。

「俺じゃなくて、わ・た・た・しでしょ

それに、今のあなたが女の子が好きだって言うത്私はレズですって言うてるように聞こえるわよ」

「ぐっ……………はあ」

言い返すことができません。彩は思わず溜め息を吐いてしまった。

「まあ、深く気にしないでね。

アヤさんの荷物は女子寮に送ってあるから

取り敢えず今日のところは、寮に戻って休みなさい

制服は……まあ、明日までに用意するわ

明日の朝、またここに来てね。じゃあ、頑張つてね」

「はい、じゃあこれで失礼させていただきます」

彩は、一度礼をしてから校長室を後にし、女子寮に向かった。
外に出たら、もう空は茜色に染まっていた。

女子寮に着いた彩は、自分の部屋がどこなのか知らないことに気が付いた。

「……あなたが、橘彩さん？」

どうしようかと、辺りを見回しているとポニーテールの女の子が近づいて来て話し掛けてきた。

「あ、はい」

「あたしは、八柳紗枝。はちやなぎさへ」

よろしくね。あ、あたしの事は紗枝でいいよ」

「う、うん、よろしく。お…私の事はまあ好きに呼んで、

………そういえばなんで私の事を知っているの？」

「ああ、それはね。あたしがアヤのルームメイトなの

なんかね学校側のミスで、アヤの名前を書き忘れたみたい

だから、その事を教える為にあたしはここでアヤが来るのを待ってたの」

どうやら、呼び方はアヤにしたらしい。アヤだとすぐに反応できるか分からないから、できれば苗字で呼んで欲しかったが、こっちは下の名前で呼んでいいと言われているのに、さすがに苗字で呼んで欲しいと言いは難かった。

「そうだったんだ。待たせちゃってごめんね」

「ううん、気にしないで、じゃあ部屋に行こっか」

「うん、そうだね」

先に歩き出した紗枝に彩はついて行つた。

この後、難題が待ち受けているとも知らずに

部屋に着いた後、紗枝はいきなり服を脱ぎだした。

「ちょ、ちよつといきなり何してるの！」

いきなりの事だったので、彩はすごく慌ててしまった。

「何って。着替えだけど？どうしたのそんなに慌てて」

紗枝は首を傾げて不思議そうに、訊いてきた。

「い、いや、だって急に私の目の前で服を脱ぐから」

顔を真っ赤にして、説明する彩に紗枝はまた不思議そうに、首を傾げた。

「え？服を脱がなきゃ着替えられないよ

それに、アヤは男の人って訳じゃないんだから、気にしないよ。てか同性なんだから普通は気にしないでしょ」

紗枝の言葉に彩はドキツとした。

「あ、うん、そうだね。普通気にしないよね。ごめんね。変なこと言っちゃって。あはは」

乾いた笑いが思わずこぼれた。すると、紗枝が彩を見てきた。

「な、なに？」

「いや、さっきから気になってただけ。なんで、アヤは男子の制服を着ているの？」

また、ドキツつとしてしまった。

「え、えつと。船が襲撃されたの知ってる？」

私、その船に乗っていてその時に制服が駄目になっちゃって

それで、制服を用意してもらったんだけど、女子の制服がなかったらしくて

しかたなく、男子の制服を着ているんだよ。

女子の制服は明日までに用意してくれるって言ってた」

彩は早口で一氣に説明した。まあ、本当の事は半分ぐらいだけど、全部正直に話すことはできないからしかたがない。

「そうだったんだ。あたしは、他の船だったから無事だったけど。

アヤは災難だったね」

「う、うん」

どうやら、紗枝は信じてくれたらしい。紗枝は中断していた着替えを再開した。

実は紗枝は下着姿で話を聞いていたので、彩はすぐ目のやり場に困っていた。彩も着替えをすることにした。彩は紗枝が信じてくれた事と、着替えを再開してくれた事に、密かにホッとしていた。着替えが終わった後、寮の規則などを紗枝と確認をしていたら、隣でくうくと可愛らしい音がなった。

「あはは、お腹空いちやった。そろそろ食堂に行かない？」

顔を真つ赤にして紗枝はちらつと時計を見てそう提案してきた。ちなみに七時だった。

「そうだね。私もお腹空いてきちゃった。行こうか、食堂」

別に断る理由もないので、その提案に賛成し、彩は立ち上がり紗枝に何気なく手を差し伸べた。

「……………ありがとう」

紗枝はちよつと吃驚した顔をしたが、すぐに彩の手を掴んで立ち上がった。

彩と紗枝は、部屋を出て食堂に向かった。

食堂は、女子寮と男子寮の間にあった。

彩と紗枝は、頼んだ料理を持って近くの空いてる席に座った。そして、お喋りをしながら食べていると、二人組みの女の子が話し掛けてきた。

「あの、ここ座ってもいいですか？」

「いいですよ」

と、言ったのは彩。

「あっ」

後ろに居た女の子が、ちよつと驚いた顔で彩の顔を見た。

「ん？どうしたの？シャル」

シャルと呼ばれた女の子は、ちよつと焦った感じで「なんでもない」と言った。

その答えに「変なの」と呟き、もう一人の女の子は座ってからこ
つちに顔を向けてきた。

「あなた達も新入生でしょ？ 私達もなの。私は、セレナ・トリシエ。
よろしくね」

「あ、うん。私は橘彩。よろしく」

「あたしは、八柳紗枝です。よろしくね」

「……………」

必然的に、残ったシャルと呼ばれた女の子に、みんなの視線が集
まる。

「……………え？なに？なんでみんな私の事を見るの？」

「いや、なにつて事はないでしょ。次普通に考えてシャルが自己紹
介する番でしょ」

セレナは、呆れた声を隠そうともせず、そう指摘した。

「あ、すいません。シャルロット・エルメスです。よろしくお願
いします」

シャルロットは、ペコリとお辞儀をした。

それにつられて、彩もお辞儀をしまっていた。それを、紗枝
とセレナが微笑ましく見ていた。

「そういえば、なんであたし達が新入生って分かったの？」

紗枝の質問に、そういえばそうだなと彩は思っ、うんうんと同
意した。

「それはね、私達の部屋があなた達の部屋の隣で、
偶々あなた達が部屋に入るところ見たからよ」

「ああ、そう言う事ね」

セレナの説明に紗枝は納得したようだった。もちろん彩も納得し
ていた。

その後は、セレナとシャルロットを加えてお喋りしながら、食べ
た。

食べ終わって、部屋に戻り休んでいたら、廊下の方から話し声が

した。どうも彩達の部屋の前で話しているようだ。彩は紗枝の方を見た。そしたら、紗枝と目があつた。どうやら紗枝も気づいたらしい。彩と紗枝はお互いになんだらうと、首を傾げた。

彩の方がドアに近かつたので、彩は立ち上がりドアを開けて廊下の様子を見た。

「あつ」

話をしていたのは、セレナとシャルロットだった。二人がドアが開いたのに気づいて彩を見た。

「ほら、出て来ちゃったよ。もう大人しく、諦めなさいシャル」

「うう、だつて」

「二人ともどうしたの？」

なにがなんだか分からず、彩は訊いてみた。

「それがね。これからお風呂行こうと思つて、どうせだからアヤ達も誘つて行こうと思つたの。それをシャルに話したら、何故か嫌がるんだよ。理由を訊いても教えてくれないし、それでシャルを説得していたところに、アヤが出て来たの」

セレナの説明はよく分かつたが、シャルロットに嫌われているんだろうかと言ふ疑問が出てきた。嫌われることは何もしないはずなんだけどなあつと彩は思った。

「そう言う事か。………私はシャルロットに嫌われちゃったのかな？」

「そう言う訳じゃないですけど………」

「じゃあ、何故嫌がるの？」

「だつてお風呂なんですよ？アヤさんそれをちゃんと分かっていますか？」

シャルロットが近付いて来て、彩だけに聞こえる声で言った。

「分かつてるよ。お風呂でしょ………ん？お風呂！？」

すっかり、お風呂の事を彩は忘れていた。

（やばい、お風呂はやばいって。自分の裸も今はやばいって言うのにその上みんなと一緒に入るなんて、それに他にもいっぱい人がい

るだろうし、うう、どうしよう。男湯に入る訳にも行かないしかと
いって、女湯に入るのもやばい……………」

「やっぱり、気づいてなかったんですね」

「二人とも何をコソコソやってるの？」

「なんでもないよ」

まだ彩が考え込んでいたので、シャルロットが答えた。

「そう。ならいいんだけど……………紗枝ー、一緒にお風呂行かない？
いきなり紗枝に声を掛けた。すると、紗枝が出て来た。

「え？お風呂？いいよ。ちょっと待っててね。準備するから」

と言つて、また部屋に戻って行った。

「ほら、アヤも早く準備して来て」

と言いながらセレナは、まだ考え込んでいた彩の背中を押した。

「え？ちょ、ちょっと待って、私は今お風呂つて気分じゃないから
後で入るよ」

「だゝめ、一緒に入るの。もうこれは決定事項だから。早く準備し
て来なさい」

彩の反論はむなしくも、拒否された。

「ええゝ、そんなゝ」

「セレナ、無理言っちゃ駄目だよ。アヤさんは、今気分じゃないつ
て言ってるんだから」

「シャル、聞こえなかったの？これはもう決定事項なの！いい加減
諦めなさい」

シャルロットが助け舟を出してくれたが、それも無駄だった。

「どうしたの？こんなところで騒いで」

突然シルヴィが現れた。

「シルヴィさん！助けてください。ちょっとやばいんです。今から
お風呂に入ろうと誘われているんです」

「あら、そうなの？じゃあ、丁度よかったわね。今アヤさんのため
に着替えを持って来てあげたのよ。アヤさん着替え持っていない事に
さつき気づいちゃったから。はい、これ。じゃあ確かに渡したから

ね」

「あ、シルヴィさん！待ってください」

「ん？どうしたの？」

「だから、お風呂なんですよ？お風呂。俺、体はともかく心は…なんですよ？」

男と言う部分は聞かれたらやばいので濁した。

「なに？そんな事？大丈夫よ。女の子なんだから。じゃあね。私これでも忙しいのよ」

シルヴィはそう言って去って行った。

「そんな事って……はあ」

彩は思わず溜め息を吐いていた。

「アヤ、今の人って誰？すごく綺麗な人だったけど」

「ここの校長だよ」

「そうなんだ。若いね。で、それは？」

セレナが彩手に持っている紙袋を見て、訊いてきた。

「えっと、私の着替え」

「着替え？なんで校長先生がアヤの着替えを持って来るの？」

「それは……まあいろいろあるんだよ」

「ふ〜ん。いろいろね〜。まあいいわ。丁度よかつたじゃない」

セレナは納得してないみたいだが、深くは訊いてこなかった。

「丁度いいって、何が？」

「だって今からお風呂に行くんだから」

ドアがガチャツと開いた。

「おまたせ〜」

紗枝が出て来た。

「グットタイミングね。じゃあ、行くわよ。アヤ」

セレナが彩を引きずって歩き出した。その後ろでシャルロットが「もう好きにすれば」的な感じで溜め息を吐いていた。紗枝はそれを見て、不思議そうにしていた。

この後、彩が鼻血を出して、倒れたのは言うまでもないことだろ

う。

ちなみに、シャルロットはしっかりとタオルで隠していた。

第二話 性転換（後書き）

サイとアヤの区別がなくなるので、台詞の所だけカタカナでアヤにしました。彩のほうはサイと読んでください。

あと、書き忘れていたんですけど、これは不定期です。なるべく最新話から一週間以内に投稿したいと思うので、ご了承ください。

第三話 入学式

気づくと彩は、逃げていた。

「はぁ、はぁ、はぁ」

走りながら後ろを振り向くと、そこにはセレナと紗枝、シャルロットが何故か裸で……いや、シャルロットだけはタオルを巻いて追いかけて来ていた。

「な、何でみんな裸なんだよー」

思わず叫びながら、前を見た瞬間、彩は立ち止まってしまった。なんと、前から女の子達が裸でこっちに、向かって来たのである。慌てて左右を確認したが、左右両方からも、女の子達が向かって来ていた。

彩が立ち止まっている間に、セレナ達がすぐ近くまで迫っていた。絶体絶命、万事休すの文字が頭に浮かんた。

「うわあああああああああ！」

「きゃっ」

目を覚ますと、紗枝が彩のベットの横で、尻餅をついていた。どうやら、彩を起こそうとしてくれた時に叫んでしまい、紗枝を吃驚させてしまったようだ。

「ご、ごめん。大丈夫？」

慌てて、紗枝に手を差し伸べて立たせる。

「う、うん。ちょっと吃驚しちゃっただけだから。気にしないで。それより、アヤこそ大丈夫？すぐくうなされてたみたいけど」

逆に紗枝に心配されてしまった。

「う、うん。大丈夫だよ。ちょっと変な夢見ただけだから」

「どんな夢だったの？」

「え、と、うゝん、忘れちゃった。まあ夢なんてすぐに忘れるものだからね。気にしないで」

本当は覚えていたが、本当の事を話すほど、彩は正直者じゃなか

った。

「そんなことより、セレナ達誘って、朝食を食べに行こうよ」

この話はもう終わりにしたかったので、彩は話をそらした。

「うん、でもその前にアヤは、寝てる間にすごい汗かいたみたいだから、汗を流してきた方がいいんじゃない？」

紗枝に言われて、ネグリジエが汗でグツシヨリしているのに、初めて気付いた。

（ん？ネグリジエ？）

「あ、あの。紗枝？」

「なに？」

「なんで、私は今ネグリジエを着ているの？私、ネグリジエなんて着た覚えはないよ？」

「あ、それはね。アヤ昨日、お風呂でのぼせて倒れたでしょ？それで、彩の持ってた紙袋に着替えが入ってるっていうから、見てみたら、普段着と下着、あとネグリジエが入ってたから、どうせだからネグリジエにしようって三人で決めて、着せたの」

「三人って、紗枝とセレナとシャルロットのこと？」

いくら体は女の子だとはいえ、女の子に裸を見られるの恥ずかしいし、抵抗がある。

「うん、そうだよ。そういえば何故かシャルロットがちよっと恨めしそうにアヤの裸を見てたよ」

「そ、そうだったんだ……」

（そんな事言われても、どんな反応したらいいのか分からないよ！）

「じゃ、じゃあ、大浴場に行つて来るね」

「あ、うん。隣で待つてるから、戻ってきたら食堂に行こうね」

「うん、じゃあ、急いで行つて来るよ」

彩は紙袋に入っていた、服と下着を持って、大急ぎで大浴場に向かった。

汗を流し終わって、セレナ達の部屋に行き合流し、食堂に行つて

朝食をみんなで取り終えた後、彩はセレナ達と別れ、シルヴィに言われた通りに、制服を受け取りに校長室に向かった。

「失礼します」

コン、コン、コンとドアを三回ノックをし、「どうぞ」と言う声が聞こえたので、彩は校長室に入った。

「おはよう、彩さん。まってたわよ」

校長室に入ると、すぐに声を掛けられた。

「おはようございます」

「早速だけど、はい、これ」

渡されたのは、白いマントだった

「シルヴィさん……………何故、今マント渡すのですか？」

「えっとね。そのマントを羽織って、女子の制服を頭の中でイメージしてみて」

シルヴィはニコニコしながら、そう答えた。

彩はとりあえず言う通りにすることにした。

羽織ってみると、マントは地面擦れ擦れの長さがあった。

（えっと……………たしか……………）

彩は部屋にあった、紗枝の制服を思い浮かべた。

すると、マントが光を発し、形状が変わってきた。

その形はだんだんと、フルブルー魔封術学校の女子の制服の形になっているようだ。

そして、光がおさまった時には、彩はフルブルーの女子の制服に身を包んでいた。

「……………成功ね」

「……………ここ、これはどういうことですか？」

彩は自分の格好を見て吃驚していた。

「うふふ。これはね、イメージマントって言う魔具なのよ。魔力を持つ者が羽織った時に、頭の中でイメージした服装に形を変えるマントよ。羽織った人の魔力が高いほどイメージした服装の再現度が高いのよ。ホントは私が今日デモンストレーションに使おうと思っ

て、魔具技師に注文していた物だったけど、それを制服の代わりにあげるわ。高級品なんだから大切に使ってよね」

（そういえば、この子の制服…本物と見分けがつかないくらいクオリティーが高いわ。魔力もすごく高いけど、イメージ力と記憶力もすごいわね。魔具技師に向いているわね）

「あ、はい。でもいいんですか？その高級品を私なんかにくれちゃって」

「え？あ、いいのよ、別に。それに、彩さんは女の子の服私が昨日持って行った物しかないでしょ？でも、それが一つあれば他の服なんてなくても大丈夫なのよ。だから今それは私よりも、彩さんが使った方が丁度いいのよ」

「そうですか。じゃあ、ありがたく貰っておきます」

「それじゃあ、そろそろ戻りなさい。早く戻らないと、入学式に遅れちゃわよ」

「はい、ありがとうございます」

彩はシルヴィに一礼して、校長室を後にした。

「遅いよ」

部屋に入ったら早々にセレナに文句を言われた。

「セレナ、そんなこと言ってもしょうがないでしょ。アヤさんは、制服を取りに行っていたんだから」

シャルロットが、庇ってくれた。

「そんなこと分かってるわよ。でもね、入学式まであと十分しかないのよ？みんなはもう講堂に集まってるわよ！」

が、意味がなかった。

「だったら、先に講堂に行ってくれてもよかったのに」

「あゝ。そういう事言っただゝ。せつかく、私達が待っててあげたのに」

それどころか、彩自身が火に油を注いってしまった。

「たしかに、待っててくれたのは有難いけど、不快にさせてまで待

つててほしくない」

「あゝもう、二人とも！喧嘩はやめてよね。セレナ自分で言ってたでしょ？もう喧嘩してる時間なんてないの！」

シャルロットがいきなり大きな声で、言った。

「……………」

「……………ねえ」

彩がセレナにだけ聞こえる声でセレナに話し掛けた。

「…なに？」

「シャルロットって怒るとすごく恐いね」

セレナは口には出さず、頷いて肯定した。

「何をこそそやってるの？早く講堂に行くよ」

シャルロットがジロリと、睨んできてそう言った。

「…は、はい」

セレナと彩、二人の声が重なった。

ちなみに紗枝は終始オロオロしていた。

講堂に着くと、予想通りみんな集まっており席も大分埋まっていた。
た。

席は、クラス発表がまだなので、今日は自由席ということになっている。

「あ！あそこ、ほら。丁度四人で座れるよ」

運良くいい席が見つかったみたいで、紗枝が指をさして教えてくれた。

「ホントだね。じゃあ、あそこに座ろうか」

他にも空いていなかった訳じゃないが、どこも一席二席空いてるぐらいで、四人で座ることはできなかった。で、紗枝が見つけた所に座ることにした。

彩達が座って、間もなく入学式が始まった。

入学式は問題無く進行し、新入生代表の女の子が、ステージに立った。

彩は、その女の子を見て驚いた。

その新人生代表は彩のよく知っている女の子だったからだ。

「由紀……………」

「…新人生代表、ましろ・ゆき真白由紀」

彩が驚いてるうちに、由紀の答辞が終わった。

真白由紀は、彩の幼馴染だ。小学生の頃、彩の家の隣に引っ越して来たのである。そして偶然彩のお母さんと、由紀のお母さんが学生時代の親友だった。必然的に由紀の家と家族ぐるみの付き合いと言っやつになったのである。さらに、由紀は彩と同じクラスだった。それから、今までずっと同じクラスだった。

「……………アヤ！」

突然大きな声でセレナが、呼び掛けてきた。

「な、なに？どうしたの？そんな急に大声出して」

「急にじゃないわよ。何度も何度も呼んだのよ。それなのにアヤは無反応だったんじゃない。もう、入学式終わったわよ」

どうやら、由紀の事を考えていたらいつの間にか、入学式が終わっていたらしい。

「あ、うん。ごめん」

「まったく。クラス発表掲示板でしてるみたいだから、見に行きましょ」

断る理由などないので、彩はセレナ達に大人しくついて行った。

「えっと、私は……………C組だわ」

「あたしは……………あ、あたしもC組」

「私もC組…みたい」

「え、みんなもC組？私もなんだけど……………」

順にセレナ、紗枝、シャルロット、彩である。

「じゃあ、みんな一緒だね。よかった」

紗枝はほっとした様子で、そう言った。

（まあ、たしかに知ってる人がいる方が気が少しは楽かな）

他のみんなを見ると、紗枝の言ったことにみんな同意しているようだ。

彩がまた、掲示板を見てみると、女の子がぶつかってきた。

「あ、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

ぶつかってきたのは、由紀だった。

「あ、うん。大丈夫だよ」

彩はちよつと、焦ったがなんとか言葉を絞り出した。

「あれ？……どこかで、あったことありましたっけ？」

由紀が彩の顔をジーっと見てくる。

「いいいいや、あああああったことは、ないと思いますよ」

彩は思いつきり動揺しまくってしまった。

「？大丈夫ですか？やっぱどこか怪我でもしましたか？」

「いや、ホントに大丈夫です。どこも怪我なんてしてません」

「アヤ？どうしたの？」

紗枝が、話し掛けてきた。

「え？あ、え、と。なんでもないよ。ちよつとこの人とぶつかっちゃって」

「ふーん。あ、新人生代表の人じゃないですか？」

紗枝が由紀を見て由紀に話し掛けた。

「はい、そうですよ。なんで私が代表なのか分からないんですけどね」

「そうなんですか？適当に決められたのかな？」

「まあ、そのところは憶測でしか言えないですからね。考えても無駄だと思いますよ」

「そうですね。あ、あたしは八柳紗枝です。えと、C組です」

「え？そうなんですか？私もC組なんですよ。私は言わなくても分かっているかもしれませんが、真白由紀です」

「なになに、真白さんもC組なの？じゃあ、よろしくね。私もC組なの名前はセレナ・トリシエ、セレナって呼んでね」

「私はシャルロット・エルメスです。私もC組です。よろしくお願

います」

紗枝の後ろで話を聞いていたのか、セレナとシャルロットも自己紹介をした。

「よろしくお願いします。じゃあ、私の事も由紀と呼んでください」
「あれ？アヤはどこに行ったの？」

紗枝が不思議そうに訊いてきた。

「え？アヤ？アヤなら紗枝が由紀と話してる間に、走ってどっかに行ったわよ」

セレナが質問に答えてくれた。

「どうしたんだろう…アヤ」

「アヤ…さん…と言うのですか？あの人は」

由紀が訊いてきた。

「うん。そうだよ。橘アヤっていうの。あたしのルームメイトだよ。アヤもC組なんだよ」

紗枝がそう答えた。

「橘………？」

「どうしたの？アヤがどうかしたの？」

「い、いえ。なんでもないんです。ただ…いえ、やっぱり気のせいですね」

「？そうですか？」

「それにしても、ホントにアヤどうしたんだろう」

紗枝は心配そうに呟いた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、ふう〜」

彩は、紗枝と由紀が話しているうちに、逃げて部屋に戻っていた（まったく、なんて運が悪いんだ。あんなところで、由紀と会うなんて。由紀は気づきそうだからなあ。実際に危なかったし。今度から気を付けよう。きっとクラスも違うだろうし大丈夫だよ。きつと、もう会うことはあまりないよね）

実際は、同じクラスなのだが、彩は確認する前に逃げて来たから

その事実を知るはずもなく。その事実を知るのは紗枝が、部屋に戻って来てからであった。

第四話 自己紹介

「ねえ、早く行かないと遅刻しちゃうよ」

紗枝が急かしてくる。だが、そんなことは、言われなくても彩は分かっていた、分かっていたが行き辛い理由があった。

その理由とは、もちろん由紀の事である。由紀とはクラスが違うと思っていたが、いやそうであって欲しいと思っていたが、事實は紗枝によって彩に教えられた。

由紀は彩と同じ組だった。聞いた時はショックのあまり、気が遠くなった。

別に由紀が嫌いと言うわけじゃない、むしろどちらかと訊かれれば、好きだと即答するだろう。だが、好きだからこそ自分がこんな状態になっているなんて、知られたくはないのだ。

念の為に付け加えておくが、彩は由紀に恋愛感情を持っているわけではない。彩は友人として由紀の事を好き、という事である。

「ちょっと、と、トイレに行つて来るよ」

彩はそう言つて、トイレに向かおうとしたが、紗枝に止められた。「アヤ……… いったい何回トイレに行くの？」

ちなみに、これで十回目だ。

「え、と。ちょっと緊張しちゃつて……」

彩は言い訳をするが、もちろんそんなのは、最早意味をなさない。「だからって、トイレに何回行つても同じだよ。廊下にセレナ達待たせているんだから、早く行かないと、また喧嘩になっちゃうよ」「うっ」

紗枝の言う事はもつともだった。

彩は紗枝に言い返すことなどできる訳がなかった。

「…… 分かつたよ……… 行こうか」

彩は肩を落として、鞆を持って部屋を出た。

その後に、ホッとした顔で紗枝はついて行った。

「遅い！」

予想通りというかなんというか、やはりセレナに文句を言われた。
「うっ。ごめん」

だが、前回と違って今回は明らかに彩が悪い。彩はそれを自覚しているので、今回は素直に謝った。

彩の殊勝な反応にセレナはちよつと驚いたが、彩が明らかに元気がないのでどうしていいかわく分からなくなり「いくわよ」と言つて歩き出した。その後彩達も続いた。

とうとう教室の前まで来た。彩は、ジタバタするのをやめることにした。いくらジタバタしたって、無駄だということによつやく気が付いたのだ。だから、彩は自分でドアを開けた。ドアを開けると由紀が仁王立ち……なんてことは、もちろんなかった。

教室の中を彩は見回した。由紀は、窓際から一番目の列の一番後ろに座つて外を眺めていた。

黒板を見たら、「座席は自由」と書いてあつた。彩は、心の中で神様に感謝した。

（よし、由紀から離れた所に座ればとりあえず、大丈夫だな）

と、彩は考えていたのだが、セレナの次の一言に耳を疑った。

「あ……あそこに由紀がいるわよ。席は自由で、由紀の周りも丁度空いているみたいだし、由紀の所に行かない？」

（え？）

「……………」

彩は、思わず声に出しそうだったがなんとか堪えた。

「うん。あたしもそれが良いと思う」

「私も別にそれでいいよ」

紗枝とシャルロットはセレナの言つた事に賛成した。

必然的に彩に三人が視線を向ける。

「え、と。私はちよつとそれは遠慮したいかな……」

（いくら、ジタバタするのを諦めたからって、わざわざ自分から危険をおかすようなまねはできないよ）

「なんでよ」

セレナから当然の質問が返ってきた。

「それは……え、と。なんとなくな……」

彩は正直に話すことはできず、かといって咄嗟に適当な理由も思いつかず、曖昧に答えることしかできなかった。

「なんとなく？ そんな理由は却下ね。さあ、行くわよ」

そう言って彩の背後にまわり、背中を押してきた。

「うう、やっぱり駄目？」

「うん。駄目よ。なんでそんなに嫌がるのかは分からないけど、諦めなさい」

セレナがニコツとして言った。

「アヤさん…諦めた方がいいですよ。セレナは一度言い出したらもう聞かないですから」

と、シャルロットが言ってきた。

「分かったよ……行くよ……行けばいいんでしょ」

彩は投げやりに答えて、由紀の方に顔を向けた。

「あっ」

彩達が騒がしくしていたから、気になったのか由紀がこっちを見ていて、彩と目があつた。

彩は仕方なく、由紀の方へ歩いて行って、由紀に話し掛けた。

「お、おはよう……き、昨日はどうも……え、と。ここ座ってもいい？」

彩は由紀の隣をちらつと見て由紀に訊いた。

「……おはようございます。いいですよ。でも、私に許可を取る必要は、ないんじゃないかと思うんですけど」

「あ、うん。そうなんだけど、なんとなくな……」

「由紀おはよう」

彩は、これからどうしたらいいか分からなくなったが、タイミング良くセレナが出て来てくれた。セレナは挨拶しながら、由紀の前の席に座った。

「おはよう。由紀」

「おっはよう。由紀」

続いて、シャルロットと、紗枝が来た。シャルロットは由紀の斜め前、つまり彩の前に、紗枝は彩の隣に座った。

（あ……自分から由紀の隣になつてしまった……）

まだ座っていなかった彩は、仕方なく由紀の隣に座った。

「おはようございます」

由紀は丁寧にお辞儀をしながら言った。

これからどうしようかと彩が悩んでいると、由紀が話し掛けてきた。

「昨日は大丈夫でしたか？いつの間にかいなくなっていましたけど」
言い忘れていたが、この由紀の丁寧語は誰に対してもこうだ。なんでも、由紀のお父さんが常に丁寧語で、それが由紀にも移ってしまつたらしい。

「あ、うん。大丈夫……ごめんね。昨日は急にいなくなつて」
「気にしないでください。急がなければいけない理由があつたんですよね？」

「う、うん。ちょっとトイレに行きたくなつちやつて……あはは」
「そうでしたか。ちゃんと間に合いましたか？」

「うん。それはもちろん大丈夫」

ゴンゴン

「あ、鐘が鳴りましたね……先生はまだみたいですけど」

この鐘の音は授業開始などの音らしい。

「うん。先生遅いね」

ガラッ

ドアが開いた。

入って来たのは、三十代ぐらいの若い男だった。

「俺が、このクラスの担任になった仙道カイ（せんどう・かい）だ。これからよろしく」

仙道は、入って来てすぐに自己紹介をした。

「あー、なんだ。今ココには、最初っからココの事を知っていた奴、知らなかった奴と、二種類の間がいるわけで、最初のうちはお互い何かと戸惑う事もあるだろうが、きつとすぐに慣れるだろう。ほとんどの奴が毎年一ヶ月ぐらいでほとんど慣れていくからな。お前らも対して変わらんだろ。」

で、今日は今から一人一人自己紹介をしてもらう。まずは……お前からだ」

仙道は、廊下側から一番目の列の一番前に座っている男子を見て言った。

その男子は、ちょっと嫌そうな顔をしながらも、返事をして立ち上がり前に出て自己紹介を始めた。

「えっと。矢光森やこう・しんです。よろしく」

森は、簡潔に自己紹介をして、自分の席に戻っていった。

森を見て彩は、昨日に引き続き驚かせられた。

彩が驚いた理由は、矢光森が彩の中学の時の親友……いや、悪友だった。

当然、由紀とも知り合いである。というかよく三人でつるんでいた。

ちなみに森は、由紀に惚れている。もともと、由紀には今のところ森に対してそういう気はないみたいだが。むしろ、由紀は彩の事が好きらしく微妙に三角関係になりかけている（なっている？）。

彩はその事実には全く気付いていない。

「アヤ、次アヤの番だよ」

いつの間にか、順番が彩まで回ってきていた。

それに、気付いてなかった彩に、紗枝が親切に教えてくれた。

「あ、うん。ありがと。紗枝」

「どういたしまして」

紗枝にお礼を言つて、彩は前に出た。

「橘アヤです。よろしく願います。私はココの事を最近知ったので、分からない事が多いですが、知ってる人は教えてくれたら嬉

しいです」

彩は、当たり障りのないことを言っただつもりであつたが、彩が言い終わると同時に、男子達が騒がしくなった。

（ん？ なにか変なことを言っただろうか）

と、疑問に思っていると一人の男子が突然立ち上がり――

「はいはい。俺が教えてあげるよ。アヤちゃん」と言つた。

「え？ あ、あり――」

彩が「ありがとう」言う前に、他の男子が立ち上がった。

「橘さんには、俺が教えてあげるんだからお前は引込め！ だいたい、お前いきなり”アヤちゃん”だなんて、慣れ慣れしいんだよねえ、橘さん」

「へっ？ え、えつと。ま、まあそうかな？」

（い、いったい何が起こつてるのこれ！）

ふと、一昨日のシルヴィの言葉が脳裏によみがえる。『それにしても、正直言つて美少女だしスタイルいいし、きっとモテるわよ』

（ま、まさか。こ、これはそういうことか？）

彩はぞつとしながら、男子達を見た。まだ、言い争いを続けている。

セレナ達の方を見ると、セレナはニヤニヤして、シャルロットは何故か必死で笑いを堪えている、紗枝はオロオロして、由紀は、驚いて固まっていた。

（と、取り敢えず、この状況をなんとかしないと）

「え、えつとみんな落ち――」

「おい！ お前らしい加減にしろ！ 他のクラスに迷惑だろうが。まったく橘、お前も悪いぞ」

「え！ お、いや、私がですか？ 私とくに何かした記憶がないんですけど」

「自覚なしか、こりやまた似たような事が起こりそうだな」

仙道は、呆れたような口調でそう言つた。

「そんなことは、ない……と思います」

（というか、ないと願いたい！）

「はいはい。もうお前は席に戻れ」

「は、はい」

彩が言われたとおりに席に戻ると、すぐにセレナが話し掛けてきた。

「アヤってすごいモテるんだね」

「……なんで、そんなにニヤニヤしながら言うの？」

「え？ニヤニヤなんてしてないよ？」

と、言いつつもあきらかに、ニヤニヤしながらセレナは言った。

「……はあ」

彩は思わず、溜め息を吐いてしまった。

「そんな溜め息吐くような事じゃないじゃん」

「いや、十分溜め息吐くような事だって」

「そうかな？私は羨ましいけどなあモテモテで」

（モテモテって……）

「はあ」

彩はまた盛大に溜め息を吐いた。

「あ、私の番だ。じゃあ行って来るね」

「はいはい。行ってらっしゃい」

彩は、投げやりに答えた。

「えっと。アヤ？あんまり気にしちゃ駄目だよ」

紗枝が慰めてくれた。彩はこの紗枝の対応に感動してしまった。

「ありがとう。紗枝、そう言ってくれるのは紗枝だけだよ」

そう言いながら、彩は思はず紗枝に抱きついていった。

「も、もうアヤ。苦しいよ」

（何故でしょう。アヤさんが紗枝さんに抱きついていっているのを見ると、ムカついてきます）

その光景を見て由紀は何故かイライラしていた。もしかしたら、本能の部分でアヤが彩であることを、気付いたのかもしれない。

由紀がこの気持ちの正体に気付く、つまり彩の正体を知るのは割とすぐに訪れる……

第四話 自己紹介（後書き）

ちよつと遅れてしまいました。
申し訳ありません。

あと、もしこれを面白いと感じた方がいましたら
私のモチベーションをあげるために、感想などを書いてくれたら嬉
しいです。

第五話 知らされた真実

彩の時にちよつと騒ぎになったが、それ以外特に問題なく自己紹介は終わった。

今は、仙道が注意事項やその他諸々を、話している。

今のところ、特に普通の学校と変わったところがなさそうなので、彩は仙道の話に適当に聞き流していた。最初の内は窓の外を眺めていたが、外のポカポカした陽気に当てられたのか、だんだんと眠くなってきた。彩は特に抵抗することなく、寝るために机に突っ伏した。

…

……

……

「……サイ……サイ、目を開ける」

声が聞こえる。どこかで聞いたことのある声だ。なんだかとても懐かしい声だ。この声はそう、たしか――

（親父……？）

目をゆっくりと開ける。光が、彩の目に入ってくる。それと同時に、自分が何もなかった真つ白な空間に立っているのに気が付いた。視界がはつきりしてくると、目の前に一人の男が立っているのにも気が付いた。その姿はやはり見覚えのあった。とても懐かしい人だった。この人を最後に見たのが、どのくらい前の事だったかすら、彩は覚えていない。

「サイ、お前に話すことがある」

「話す……こと？」

「ああ、そうだ。まず、今お前の身に起こっていることを話そう。今お前は女の子の体になっているな？」

彩はコクリと頷く。

親父は、彩が頷いたのを確認すると、すぐにまた話し始めた。

「それは、お前が船で襲撃にあつた時に大怪我をしたのが一つ目の原因だ。その時お前には再生の魔術が掛けられた。だがお前の怪我はかなりひどい物だった。でも本来なら、普通に再生の魔術を掛ければ、魔術を掛けたファミリアの契約者、つまり魔封術師の魔力がかなり消費するだけで、特に問題なくお前は再生されるはずだった。しかし、実際には問題が起きた。お前は女の子の体になってしまった。その理由に二つ目の原因がある。魔術を掛けたファミリアと魔封術師が、魔力の供給が安定しないほど離れていたからだ。それなのに無理やり魔力をかなり消費する魔術を行使したから、今までに例がないイレギュラーな事、つまり体の性別が変わってしまった、という事が起こったのだ」

「その、俺に再生の魔術つてやつを掛けてくれた、ファミリアの契約者である魔封術師の人つて誰？俺の知っている人？その人はそんな事して無事なの？そういうえば、俺は元に戻る事はできるの？」いきなり、知らされた事実に混乱してしまった彩は、矢継ぎ早に父親に質問した。

「……その質問のほとんどは、今はまだ教えることはできない。今教えられるのは、お前が元に戻る事ができるかは、今はまだまったく分からないという事だけだ」

親父は言いくそくに、そう答えた。

「……次の話をするぞ。単刀直入に言うと、お前は今何者かに狙われている」

「何者かって、なんだよ」

「それは、父さんにも分からない。今は何者かとか言いようがない」

「……それで？なんで俺が狙われてるの？」

「それは、恐らくお前の力が目当てなのだろう」

（力？力って何のことだ？）

これといって彩には、狙われるような特別な力はないはずだ。魔力は他にもたくさんの人が持っている、他に想像ができるものはな

かった。

「今はそれしか言えない。だが、いつかお前はその力を解放するだろう。お前はこれから身を守るために、その力だけじゃなくいろいろな力を身に付ける。もし、また危機的な状況になった時は”Bird Familiar Spirit ボイニクス”と唱える」
それってたしか――

「ファミリアーとの――」

突然地面が大きく揺れだした。あまりの揺れに彩は、膝をついた。
「……時間か」

親父が彩に聞こえるか聞こえないかの声で呟く。だが、彩にはしつかり聞こえていた。

「時間ってなんだよ！待てよ！親父、俺はまだ訊きたいことがあるんだよ！」

彩が必死でそう叫んだ。

「いいか。忘れるなよ。必ず力をつけるんだ。自分の身を守るために……」

親父はそう言うのと、徐々に体が薄くなっていき、とうとう姿が見えなくなった。親父の姿が見えなくなるのとほぼ同時に、彩の視界が黒で塗りつぶされていった。

そして、微かに声が聞こえてきた。

「……………ア……………アヤ……………おき……………よ……………」

聞き覚えのある声だ。

（シャルロット……………？）

彩は、自分が目を閉じている事に気付き、ゆっくりと目を開けた。
「あ、起きましたか？もうHRホームルーム終わりましたよ。いつまでそうやって寝てるつもりなんですか？」

「あ、うん。ごめん」

彩は伸びをしながら、隠そうともせず大きな欠伸をした。それを見たシャルロットが何故か溜め息を吐いていた。

「アヤさん……………少しは自分が男ではなく、女の子になっているとい

う事を自覚した方がいいんじゃないですか？」

「え？あ、そういえばシャルロットって知ってるの？その……私がホントは……え、と、その」

もし知らなかったら問題なので、肝心な「男」というところはとてもじゃないが言えなかった。

「男って事なら知ってますよ」

「……！」

次は教室を移動するはずで、シャルロットは寝てる彩を起こす為（何故シャルロットなのか彩には分からないが）に残っているだけで、他には誰もいないはずだったが、彩はシャルロットの「男」という言葉に慌てて、教室内を見回した。すると、彩はドアの所に立ってこつちを見ている人と目があつた。彩はその姿を見た瞬間、固まってしまった。彩の様子が急に変わったので、シャルロットは不思議に思つて、彩の視線の先を見た。

「……………」

そこに立っていたのは、由紀だった。

「アヤさん、あなた本当は男なの？」

「え！？そ、そんなはずないじゃん！な、なんでそう思の？」

もちろん由紀がそんなことを言ってきた理由は、彩にも容易に想像できたが、それを認めたくはなかった。

「今、アヤさんとシャルロットさんが話をしているのを聞いてしまったからです。別に盗み聞きするつもりはなかったんですが………違つたら申し訳ないんですが、アヤさんってもしかして、サイ……ですか？」

疑問形で訊いているが、由紀は何故かアヤがサイであることに確信を持っていた。

由紀は、今までの彩に対しての違和感が、今この瞬間なくなつた気がした。

「……！」

「ふん。アヤさんってホントの名前は、サイって言う名前だった

んですか」

シャルロットはもう誤魔化せないと思ったのか、彩に追い打ちをかけてきた。

「シャ、シャルロット！」

彩は思わず、責めるようにシャルロットを怒鳴りつけていた。

「アヤさん……いえサイさんと呼んだ方がいいですか？ 多分、もう由紀さんに隠すことは無理だと思いますよ。どうやら、由紀さんとサイさんは知り合いたいですし、それほど問題でもないんじゃないですか」

「いや、知り合いだからこそその問題もあるでしょ！」

「今の言葉はあなたがサイだという事を認めた、という事でいいですか？」

彩の迂闊な言葉に由紀は容赦なく、指摘してきた。

「うっ」

「どうなんですか？」

「ああ、もう。そうだよ。俺がサイで間違いないよ」

彩はやケクソ気味に答えた。

「そ、そんないい方しなくてもいいじゃないですか。別に、サイをどうにかしようなんて私は考えていませんよ？ 私はただ、あなたがサイならサイと知っておきたかっただけで……」

由紀にとって、彩に不快に感じられるのは不本意なので、慌てて弁解した。

「あのさ、一応ここではサイじゃなくて、アヤって呼んでくれる？ 他の人に聞かれたれちよっと、面倒くさい事になりそうだし」

彩はとりあえず、これ以上他の人にばれたくないので、由紀にそう言った。

「あ、はい。分かりました。……アヤ」

由紀はそれに大人しくいう事を聞いてくれた。

「あ、分かっているとと思うけど、シャルロットもだからね」

「分かってますよ。そんな事」

「そういえば、サ…アヤ。なんで女装なんてしてるんですか？」

由紀が、ふと思い出したように訊いてきた。

「え！？え、えーと……」

（由紀、俺が女装してると思ってるのか。これは、好都合な気もしなくもないけど、そんな誤解されるのもちよつと、いや、かなり嫌だな。ここは正直に話すか）

「由紀、これは女装じゃないんだ。俺は実際に女の体になってしまったんだ」

「そうだったんですか。女装じゃなくて、本物の女の子になったんですか……え、ええええええええ」

いきなり、由紀が大きな声を出した。彩は「あ、やっぱり？」というような顔で、由紀を見た。

「え、え？そ、そそそ——」

由紀はかなりテンパってしまっている。

「由紀、落ち着いて。ほら、深呼吸して」

シャルロットが、由紀に優しく言った。由紀は「は、はい」と言つて、シャルロットに言われた通りに深呼吸をした。すると、落ち着いたのか、由紀が彩の方に顔を向けた。

「えつと。すみませんでした。ちよつと驚いてしまつて」

ちよつとどころではなかったと思うが、敢えて彩もシャルロットも何も言わなかった。

「その…アヤはどうして、おん…そんな体になってしまったの？」

由紀はなんだか、言いくそうに訊いてきた。

「それは、え、と。たしか………なんでだっけ？」

「私に訊かれても困ります。訊いているのは、私の方なんですからそれはもつともだ、と彩は思った。

「たしか、教えてもらったような気がするんだけど、何故か思い出せない……」

彩は、父親に教えてもらったことをすっかり忘れてしまっていた。「そうですか…ならいいです。思い出したら、教えてください」

「うん。わかった」

「二人とも……早く行かないとやばいよ。もう授業開始から五分経ってる……」

「「え!?!」」

彩と由紀の声が重なった。

「もつと、早く教えてよ。シャルロット」

「そんなこと言っても、私だって今気づいたんですから」

「アヤ、シャルロットさん。言い合いは後にして、急ぎましょう」

由紀のその言葉に、彩とシャルロットは頷いて急いで、次の教室に向かった。

第六話 封印と解印

彩、由紀、シャルロットの三人が教室（というより演習室）に着くと、予想通りと言うべきなのか、仙道に怒られてしまった。まあ十分近くも遅ければ、怒られるのは当たり前だろう。しかし、彩達が素直に謝ったので、いつまでも怒られることはなく——初犯だからという事もあったかもしれないが——「今度からは気を付けるように」と言われて、すぐに説教タイムは終了した。説教が終わったので、彩達はセレナと紗枝に合流した。

「では、授業を始める」

どうやら、彩達が来るのを待って授業をまだ始めていなかったらしい。なかなか良い先生だ、と彩は思った。

「えー、今日は最初なので、基本であるファミリアーの封印と、封印の解除方法を覚えてもらう。まあ、もう出来る奴もいると思う。だから出来る奴は復習だと思ってやってくれ」

（そっか。そういえば、もうある程度出来る人もいるんだよね）

「んー。別に俺が実演して見せても良いんだが、ここは……そうだなあ。丁度、新入生代表もいる事だし——真白。お前がやってくれ。もちろん出来るだろ？」

（いや、由紀がそんなの出来る訳ないだろ。いったい何を——）

「はい。分かりました。実演するだけでいいんですね」

彩の考えとは裏腹に、由紀は返事をしてみんなの前に出て一礼した。

（え！？）

彩は何とか、驚きを声に出すのを抑えた。

「ああ。解説など詳しい事は、後で俺がやる」

由紀はウエストポーチ（ファミリアーの本を常に持ち歩くために、学校から支給された物）から一冊の本を取り出した。由紀が本を持つていない方の手を前に出し、手のひらを上に向けた。みんなが、

手のひらを見る。すると、由紀の手のひらの上から何かが形作られていった。最終的に、それは銀色に輝く鍵となった。

「……では、まずは封印の解除から——アレクシア。アンロック」
由紀が作り出した鍵を本に向けて、鍵を開けるような動作をしなから呪文？を唱えると、本がひとりでに開いて本の中から、犬が出てきた。その犬には彩も見覚えがあった。由紀の飼っていた、アレクという犬だった。

（アレクってファミリアーだったんだ。お利口な犬だと思ったらそういう事だったのか）

「次は、封印をします——」

由紀はそう言って、再び鍵をアレクの出て来た本に向けた。

「アレクシア、ロック」

そして、今度は鍵を閉めるような動作をした。すると、アレクは本に吸い込まれていった。由紀の作り出した鍵は、アレクが吸い込まれて本に戻るとすぐに、砕け散った。由紀は出て来たとき同様に一礼した。その一礼に反応して、一様に拍手をした。由紀は拍手を受け、少し照れくさそうに彩達の所に戻って来た。

「ありがとう真白。さすがだな——えー。では、今真白が実演してくれた事の解説をする。まず真白が最初にやったのは、鍵の生成だ。鍵とは、ファミリアーの封印と封印の解除の時に使う物だ。見ていて分かっただろうが、鍵は封印の解除と封印の一回ずつしか使えない。だから、毎回鍵の生成をする必要があるという事だ。鍵の生成の仕方は、鍵の形を頭の中で思い浮かべながら、魔力を手のひらに集中させるんだが、鍵の形を思い浮かべるのも、魔力を手のひらに集中させるのもまずは教える前に自力で、やってみるのが一番だ。ここまでで何か質問はあるか？」

仙道の問いに答える者はいない。みんな特に質問はないようだ。
「ないようだな。では、次だ。真白が鍵の生成の次にやったのは、封印の解除だ。封印の解除の事は解印という。解印とは、物に封印されて、自由に出て来れなくなったファミリアーの封印を解除して、

ファミリアーを自由に出て来れるようにする事だ。ここまでで質問はあるか？」

「物、というのは具体的に言うとな本の他になにがあるんですか？」
意外にもセレナが拳手をして質問をした。セレナは意外と真面目なんだなと彩は思った。

「まあ、殆どの場合が本なんだが。それ以外は指輪、腕輪、ブレスレット、ネックレス、ピアスの装飾品だな。これらは、かなり強力なファミリアーの場合になるな。だから、ファミリアーが成長していくと本から装飾品になる場合もある。かなり稀だがな。他に質問はあるか？」

今度は、誰も質問をしなかった。

「じゃあ、最後だな。最後は封印だ。封印する理由は特にないんだが、ずっとファミリアーが出ていると何かと邪魔だろ？それにファミリアーも外に出しておくとお腹が空くからな。ちゃんと封印しておけば、ファミリアーも腹が空くこともないから、食費も浮くから封印しておいた方がいいってだけだ。だから封印しないでずっとファミリアーを外に出しておく奴もいる。まあ、あんまりいないがな。

最後だが質問はあるか？……ないみたいだな。じゃあ、実際にまず鍵の生成からみんなやってみる。もう出来る奴はまだ出来ない奴のサポートをできたら頼む——じゃあ、みんな始めろ」

仙道の掛け声でまだ出来ない者は分からないなりに、鍵の生成に取り組みだした。出来る者は、とりあえずそれを眺める事にしたようだ。

「アヤ、私達も鍵の生成やろうよ」

彩が周りを眺めているとセレナが声を掛けてきた。

「あ、うん——じゃあ、由紀にでも教えてもらおうか」

そう言つて彩は、由紀の方を見た。

「え？私ですか？別にいいですけど、まずは仙道先生の言った通りに教えてもらう前に自力でやった方がいいですよ」

「あ、そっか。うん、じゃあ、まずは自力でやってみるよ」

彩は由紀に言われた通りに、自力で鍵の生成に取り掛かった。セ
レナとシャルロットと紗枝も、それに続いた。

第六話 封印と解印（後書き）

ゴールデンウィークと、後初投稿から一ヶ月という事で、文字数が少ないながらも、早くも続きを更新させていただきました。かなり急いだので、いつもにまして荒い部分があったでしょうが、そのところは許していただけると幸いです。

第六 五話 灰色の鍵

「ん？」

「どうしたの？アヤ」

「いや、鍵の生成に成功したんだけど、由紀の作ったやつと色が違くてさ……ほら」

そう言つて、彩は紗枝に自分の生成した鍵を見せた。

「あ、ホントだ。由紀の作った鍵は銀色だったけど、彩のは灰色だね」

「そんなの当たり前ですよ。鍵にもレベルというものがあつて……え？灰色！？」

由紀の突然の大きな声に周囲から視線を集めたが、由紀はおかまなしに、彩の生成した鍵を彩からひつたり、鍵を凝視した。

「……………おかしいです」

彩の鍵を凝視してたかと思つたら、由紀がやけに真剣な顔で呟いた。

「由紀、どうしたの？」

「普通、鍵というのは、金、銀、銅の三色なんです。だから、灰色なんて色は生成されるはずがないんです。こんな事は、今までに……少なくとも私は聞いた事ありません」

「どうしたんだ？何か問題でも起きたのか？」

仙道が様子がおかしいのに気付いたのか、近づいて来た。

「……………仙道先生……………これ、見てください。彩が生成したんです」

「っ！……………それは本当か？それが本当だとしたら、俺が判断することは出来ない。まず校長にこの事を話すしかないな——みんなはここで引き続き鍵の生成をやっていてくれ。それから、橘。お前は俺について来い」

「は、はい」

彩は何が何だかよく分からなかったが、ついて行つた方が良さそ

うだったので大人しくついて行つた。

「失礼します」

「し、失礼します」

「仙道先生。どうしたんですか？まだ授業中のはずじゃないですか。アヤさんまで連れて来て」

「それが、取り敢えずこれを見てください」

仙道が鍵を見せた途端に、シルヴィの顔付きが変わった。

「これを……アヤさんが生成したんですか？」

シルヴィは彩の方をちらつと見て、仙道に訊ねた。

「はい、そうです」

「仙道先生。至急、第四演習場に特級魔封術師全員を招集、魔具技師にアブソーバーを第四演習場にあるだけ届けさせてください」

「ぜ、全員ですか？」

「はい。全員です」

仙道が少し狼狽しているのを見ると、どうやら特級魔封術師とはかなりすごい人達みたいだ。彩は急いで校長室を出ていく仙道の姿を見ながら、そんなすごい人達を集めていったいシルヴィは何をするつもりなのかだろうかと考えていた。

「さて、アヤさん。今から話す事は誰にも話しては駄目よ」

仙道いなくなった途端、シルヴィの口調が変わった。

「は、はい！」

「実は私、この灰色の鍵の事を知っているの」

「あ、そうなんですか。それはなんなんですか？由紀：新入生代表の人も先生もすごく驚いていたから、普通とは違うんですよね？」

「ええ、違うわ……これは一部の人間しか知らない言い伝えなんだけどね。灰色の鍵を生成する者が現れた時、それは新たな戦いの前触れなのだそうよ。つまり、それがどういう事か分かる？」

「…戦争が起こるってことですか？」

「そうよ。まず間違いなくあなたはその戦争の中心になると思うわ。まあそうなると思然的にこの学校も戦争に巻き込まれてしまうでしょうね。後もう一つ、これは私達にとって希望になるかもしれない事だけど、その逆の場合もあるの」

「そ、それはなんですか？」

「灰色の鍵の生成者は、かなり強大な力を持つてるそうよ。でも問題はそこじゃないの。問題は、その力をあなたが暴走させずに使いこなせるか、という事なの。もし使いこなせないで、暴走させたらどうなるかは私にも分からないわ。でも逆に使いこなすことが出来ればそれは、戦争を終わらせる力になる。つまり、これから起こる戦争はあなた次第という事」

自分に強大な力があって、それを使いこなさなければ暴走させてしまえば、どうなってしまうか分からない、だが使いこなせばこれから起こると思われる戦争を終わらせる力になるかもしれないという事実は、彩にかなりのプレッシャーを与えた。

「……もし、俺が使いこなせず力を暴走させてしまったら、俺は殺されたりとかするんですか？」

「殺す事が出来れば、ね。最悪の場合は殺せもしないで、世界が滅ぶ……かしら」

（いったい、どれだけ強大なんだ俺の力は……）

「この、灰色の鍵で解印をしたらどうなるかはまだ未知数。だから今から一番対処のしやすい第四演習場に行つてそこで解印を試してもらうわ。念の為に、私と特級魔封術師全員が立ち会います。後、魔力を吸収する魔具、アブソーバーを準備させてるわ。まあ使わないに越したことはないけどね」

現在、彩は第四演習場に来ている。そこには、シルヴィ他、十人

の特級魔封術師がいて、魔力を吸い取る事ができるらしいアブソーバーという魔具も、八個ほど彩を囲んで設置してある。アブソーバーは彩が思っていたより大きくて、普通車くらいの大きさだった。しかし、準備も出来たことだし、早速始めよう——という風にはならなかった。

「何かと思ったら、この嬢ちゃんが解印するのに立ち会えた？ ちよつとふざけてるんじゃないかねえか？ 俺達は特級魔封術師だぞ？ そういうのは下級魔封術師に——」

「おだまりなさい。フォマー。シルヴィにはちゃんと私達全員を呼んだ理由があるはずです。そんな事もわからないのですか」

「そんなの分かっている！ だが俺達全員を呼んだとなれば、それなりの理由じゃなきゃ納得できねえだろ。アブソーバーも八個も設置してやがるし」

「まあ、それは一理ありますわね——そこところ説明してもらえるのですわよね。シルヴィ？」

フォマーという特級魔封術師の男の人を制していた同じく特級魔封術師の女の人がシルヴィに視線を向けて言った。シルヴィは怯むことなくしっかりとその視線を受け止めた。

「ええ、ちゃんと説明しますよ——まずは、この子の紹介から今回このフルプルフに入学した新入生の橘アヤさんです」

彩はシルヴィのアヤという部分にちよつと抵抗があったが、取り敢えずお辞儀をした。

「それで？ その子がどうしたと言うの？」

「あんまり急かさないうでください。今日アヤさんが灰色の鍵を生成しました。この意味は皆さんにはお伝えしましたよね？」

シルヴィのこの言葉に特級魔封術師の全員が息を飲んだ。

「これで、もう説明はいらないですよね？」

全員が頷く。シルヴィが彩の方を向く。

「アヤさん。解印の仕方は分かりますか？」

「多分、一度見たので……出来るかは分かりませんが」

彩は解印を試す前に校長室に連れて行かれたので、まだ出来るかは分かるはずもなかった。やってみないと、わからないという事だ。もつとも、それはシルヴィにとっては好都合だったが。もし暴走などして、他の生徒に怪我を、いや死亡でもさせたらかなり大変だったからだ。

「そうですか。それなら今、やってみてください」

彩は頷いて、先ほど彩が生成した鍵を受け取った。

「では、始めます」

彩がウエストポーチからベニートの本を取り出す。それを見てまた、皆が息を飲んだ。

「——ベニート、アンロック」

第六 五話 灰色の鍵（後書き）

今回から、活動報告を書くことにしたので、よかったらみてくださ
い。

第七話 融合！？

『サイ、これはいったいどういう事だ』

「べ、ベニート？」

解印をしたら、突然頭の中でベニートの声がした。

『ああ、そうだ。それよりこれはどういう事なんだ』

「ん？何の事？」

『気付いてないのか……サイ、自分の頭と尻を触ってみろ』

「は？頭とお尻？……」

言われた通りに自分の頭とお尻を触ってみる。そこには何かがくつついていた。普通は無い物がくつついている。いや、くつついているというよりも、頭とお尻から直接生えていると言った方が正しいのかもしれない。

「これ、本物……？」

頭とお尻から生えている物、それは恐らく猫耳と尻尾だった。

『ああ、恐らくな………いったいお前は何をしたんだ』

「何をしたって。ただ解——な、なに！？」

『解印をただけ』と言おうとしたら、誰かが突然抱きついて来た。一体誰なんだと見てみると、シルヴィだった。

「アヤさん。すごく可愛いわ。猫耳と尻尾なんてやばいわよ。それは反則だわ。思わず、抱きしめてしまったじゃないの」

シルヴィはそう言いながらも、彩にすりすりしている。

「シ、シルヴィさん。や、やめてください。そして離れてください」と、彩は抗議したが。

「嫌よ。アヤさんが可愛いのが悪いんじゃないの。だから離れないわ」

シルヴィは理不尽な事を言って、彩から離れようとしなかった。困った彩は、ふと前を見ると先ほどの女がシルヴィの後ろに立っていた。そしてその女の人はわざとらしく、咳払いした。

「シルヴィ。橘さんが可愛いという事は認めます、抱きしめたい気持ちも分かりますが、今はそれよりも優先すべき重要な事があるのではないですか？」

（いや、そこ認めちゃうんだ。ていうかそんな気持ち分からないですよ！）

「うう、それもそうですね。ごめんなさい」

シルヴィはそう言つて、名残惜しそうに彩から離れた。

「アヤさん。何か変わった事あるかな？見たところ暴走はしてないみたいだけど……」

「そういえば、体がやけに軽いです。他は特に何も無いと思いますけど——」

彩は試しに軽くジャンプを試してみた。

「うわっ！——いったあ」

彩は自分で思っていたよりも、高く飛んだので吃驚して空中でバランス崩し、お尻から落下してしまった。彩が、お尻をさすりながら立ち上がって周りを見ると、みんなが驚いた顔をしていた。だがそれは無理もない事だった。何故なら、彩がジャンプした高さは、約十メートルぐらいだったからだ。

「……………すげえジャンプ力だな」

この場にいた全員が、フオマーと呼ばれていた男の言葉に同意した。

「というか、どうなってるんだ？なんで解印をしたら猫耳と尻尾が生えるんだよ」

「人体解印という風には見えないな。あれは姿形が変わる物ではないし……………もしかしたら、ファミリアーと融合した、という事なのかもしれないな」

今まで黙っていた、赤い髪をした男が答えた。

「ファミリアーとの融合？そんな事が有り得るのですか」

「有り得ないとは言いきれないんじゃないか。そうじゃなきゃ、この嬢ちゃんの状態をどう説明するってんだ？」

「そ、それは……たしかにそうですね。でもそうすると、灰色の鍵の生成者の力はファミリアーとの融合という事になるのかしら？」

「それが力の全てと決めるのは早計だろう。もしかしたら、ファミリアーとの融合は力のほんの一部という事もあるかもしれない」

「そうですね。一理ありますわ」

「そん——」

フォマーの言葉はシルヴィのパンパンパンと手を叩く音に遮られた。

「皆さん。そういう議論は後にしてください。今はアヤさんがこの力をちゃんとコントロール出来るかの方が重要です。今のところ暴走はしていないようですけど、暴走してないからといってそれがちゃんとコントロール出来ているという事にはなりません。偶々安定しているだけにすぎないのかもしれない。そのところを今、しっかりと確かめる必要があります——アヤさん。その状態で、魔術を使う事は出来る？」

「魔術……ですか？……多分出来ます」

もちろん彩は魔術の使い方を誰かに教わったなんて事はない。なので普通なら出来るかどうかすら分からないだろう。しかし、何故かは分からないが魔術が今この状態で使う事が出来ると彩は思った。「じゃあ、やってみてくれる？」

「分かりました」

そう答えて彩は目を瞑った。

（ベニート、聞こえる？）

（ああ、聞こえるぞ）

（今の話聞こえてたでしょ？ベニートの魔術ってどんなの？）

（炎を操る魔術だ）

（分かった。ありがとう）

ベニートにお礼を言って、彩は火の玉を自分の手の平の上にイメージした。すると、彩のイメージした通りに彩の手の平の上に火の

玉が出現した。

「今度は詠唱破棄かよ……………出鱈目だな」

しかし、その火の玉は見る見るうちに小さくなっていき、最後には完全に消えてしまった。

「え？なんで？」

また火の玉を作ってみるが、結果は同じでだんだんと小さくなっていつて、消えてしまった。

「どうやら完璧にはコントロール出来ていないみたいですね」

シルヴィがそれを見てちょっと渋い顔をした。

「これって、やばいですか」

「そんな事はないと思うわ。でもいつまでもその状態にいるのはあまり良くないので、もっとコントロール出来るように練習してね」

「は、はい。分かりました」

「じゃあ、特に問題もなく解印も出来たみたいだし、もう封印していいわよ。いつまでもその恰好じや恥ずかしいでしょ？私としてはそっちの方がいいけど……………やっぱりそのまま置いてほしいなあ」

「嫌ですよ。ちゃんと封印して戻りますよ——ベニート、ロック」

封印をやったが、何故か元に戻らない。というか何の変化もない。恐らく失敗したのだろう。彩は氣を取り直してもう一回試してみるのが、先ほどと同じでまったく変化なし。

「……………なんで封印できないの？」

「やっぱりちゃんとコントロール出来てないからかしら」

彩の絶望の呟きにシルヴィが答えた。

「コントロールが出来てないから……………？」

「ええ、推測でしかないのだけれど」

「じゃあ、お…私はどうすればいいんですか？」

『俺』と言おうとして、ここにいるのはシルヴィだけじゃないと思いついて、彩は言い直した。

「ちゃんとコントロール出来るようになるまでそのままにいるしかないわね」

「そ、そんなあ」

落ち込んでいる彩をここにいる全員が同情の眼差しで見ていた。

第八話 全焼

彩^{サイ}はあれからもいろいろと試行錯誤したが、その日のうちに元の姿に戻る事は結局叶わず、そのままの姿で女子寮に戻った。そして運の悪い事に、彩（と紗枝）の部屋には紗枝はいいとして、何故かセレナ、シャルロット、由紀がいた。

「な、なんで、みんなこの部屋にいるの？」

「そんなの彩が心配だからに決まってるじゃない。先生に連れて行かれた後、演習室に戻って来なかったし……何かあったのかと思うじゃない」

セレナが、そこまで自分の事を心配してくれるなんて彩は思ってもみなかった。思わぬセレナのこの言葉に彩は感動していると、セレナが不思議そうに彩の頭の方を見てきた。

「そういえば、アヤはなんで帽子かぶってるの？」

実は、そのまま戻るのがすごく嫌だったので、女子寮に戻る前にシヨップングエリアに行つて、帽子を買ってきたのである。

この島の大きく分けて四つに分かれている。シヨップングエリアはそのエリアの一つである。他のエリアは、学校エリア、学生寮エリア、教職員居住エリアである。

「え、えっと。それは、なんていいいますか。その……」

歯切れの悪い彩に、セレナはしびれを切らしたのか、彩に近付いて来た。

「もしかして、アヤ何か隠してるの？」

「そ、そそそんな事ないよ。なんでそんな風にセレナが思うか私には分からないけど、きつと気のせいだよ」

「ふん。そつかあ。私の気のせいなあ。ふん——えいつ！」

セレナがさつと、彩のかぶっている帽子を取った。そして、猫耳がみんなの前に晒されてしまった。

「あっ！」

「…………え、と。その彩の頭に付いている物って、猫耳……かな？」
「そ、そんな訳ないじゃん。これは……そう！ちよつと髪の毛が跳ねちゃってるだけだよ」

「えー。それは違うと思うな。触った感じが髪の毛と全然違ふもん。それにし——」

いつの間にか彩の背後に回り込んでいた紗枝が、彩の猫耳を触りながら言った。彩は突然背後から声を掛けられたのと、耳を触られたのに吃驚して、思わず紗枝から飛び退いた。

「にやつ！——ぐえ」

しかし、今の彩は身体能力がかなり向上しているので、かなりの距離を飛んでしまい、そのまま壁にぶつかってしまった。

「…………にやつて、言ったよね今。にやつて……」

「うん、確かに言ったよ。にやつて」

セレナと紗枝がお互いを見ながら確かめ合った。

（壁にぶつかった事はスルーなの！？）

後の二人の方を見ると、どちらとも頷いていた。

「そんなに、何回も言わなくてもいいじゃん。確かにちよつと吃驚したのと壁にぶつかつたので変な声が出してしまったかもしれないけどさ」

彩はそう言いながら、俯いてしまった。

「そんなにいじけないでよ——でも、なんで猫耳なんか付けてるの？しかも態々帽子をがぶつて隠してるし、隠すなら猫耳なんて付けなければいいじゃない」

セレナがそう言うのと、みんなもうんうんと頷いていた。

「それは、仕方ないの！この猫耳は付けている訳じゃなくて直接頭から生えて来てるんだから」

「え、生えてる？どういう事？」

「えつと。それは——」

（ねえ、ベニート）

彩は話していいかよく分からなかったので、取り敢えずベニート

に相談する事にした。

『なんだ？』

（話聞こえてたよね？）

『ああ、聞きたくなくても勝手に聞こえてくるからな』

（じゃあ、話の内容は分かっているね。それで、さ、なんでこの状態になっているのか話してもいいと思う？）

『別にいいと思うが。灰色の鍵がどういう意味を持つかは口止めされたが、灰色の鍵を使うとどうなるかのなんて事は口止めされてないからな』

（んー。確かにそれはそうなんだけど……当たり前の事だから、言う必要がないと思ったのかもしれないし……）

『確かにそういう考えがあつたかもしれないが、実際にはフォーレはそんな事言わなかったから、いいんじゃないか』

（それもそうか。ありがと。ベニート）

『お礼を言われるような事を言つた覚えはないな』

ベニートは照れ隠しなのかそう答えた。

「アヤ？どうしたの？はやくどういう事なのか説明してよ」

ベニートとの会話が終わるとまるで会話を聞いていたかの思うくらい丁度良く、セレナが声を掛けてきた。

「ああ、ごめん。ちよつと話してもいい事なのか悩んだ」

「悩むような事なの？まあ、いいわ。で、話してくれるの？」

「うん。口止めもされてないし、話す事にするよ。じゃあ、話すね。」

——みんな、私が灰色の鍵を生成したのは知ってるよね」

そう言いながら彩が、みんなの方を見ると、みんなが頷くことで、彩の質問に肯定した。

「それでシルヴィさんに、その鍵で解印してみてと言われたから、解印してみたらこの状態になったという事。話によると、どうやらファミリアーと融合したみたいなんだ。まあ、ここまではいいんだけど、もう封印をしてもいいと言われたから、封印してみたんだけど、封印出来なかったの。私が力をコントロール出来ないのが

理由とシルヴィさんは言ってた。まあそういう訳で、今もこの状態という事なのです。ちなみに言うと、猫耳だけじゃなくて尻尾も生えてきてるよ——以上、何故猫耳が生えているのかの説明でした」

説明が終わって、改めてみんなの方を確認すると、みんなポカンとしていた。そして、いちはやく立ち直った。由紀が、彩の後ろに回ってスカートを捲ってじろじろと見てきた。

「本当に尻尾も生えているんですね」

「な、なにするんだよ！」

その様子を見て他の三人もようやく、ショック（？）から立ち直り、三人同時に彩の後ろに回りスカートを捲り本当に尻尾があるのかと確認してきた。そして、同時に「ホントだ」と呟いた。ちなみに尻尾は、スカートからちよつと出ているのでスカートを捲る必要もなく確認は出来きたはずなのだが——結果は見ての通りである。

「なんで、みんなして態々スカートを捲って確かめるんだよ——ていうかさ、紗枝はさつき私の後ろにいたんだから尻尾見えてたんじやないの？」

「え、えと。それは……そう！猫耳だけを見てて、尻尾の方は見てなかったんだよ」

と紗枝は言い訳がましくそんな事を言った。何故言い訳をする必要があるのかと、彩は不思議に思ったが、すぐに思い至り、彩の顔が引きつった。

（ノリなのか？ノリでやったのか！？）

彩の顔が引きつったのを見て、紗枝が後ずさりした。

「ど、どうしたの？アヤ」

「どうしたのじゃないよ！——ノリだよ。ノリでやったんだね」

「あ、あはは。そ、そんな事ないよ。ホントに尻尾には気付かなかったんだよ」

紗枝がまた言い訳がましく言うが、最早そんな言葉は彩には意味がなかった。まあ、最初からだったという気もしなくもないが。

「さゝえ。ホントの事言わないと怒るよ。さつき紗枝、何か言おう

としてたよね。それ尻尾の事を言おうとしてたんじゃないの？」

「そ、それはきつ——」と、ごめんなさい。アヤさんの言う通りです。はい。ノリでやりました。ホントにすいませんでした。許してください」

「きつとそれはアヤの気のせいだよ」と言おうとしたが、彩から怒りのあまり炎が立ち上っているような気がして、紗枝は慌てて謝ったのだが

「ね、ねえ。アヤさんからホントに炎が立ち上っているように思えるんだけど、私の気のせいかな？この部屋、なんだか暑い気もするし」

シャルロットのその言葉に、由紀が廊下に出てすぐに戻って来た。

「確かにこの部屋、暑いですね」

みんなが、彩から立ち上っている炎に注目した。

「アヤ。その炎は本物なの？」

そして、セレナが質問してきた。

「えと、そうみたい」

「もしかして、その炎って魔術なの？」

「そうだと思う。多分、力が暴走しているのかも」

「暴走って…大丈夫なの」

「多分、今のところは大丈夫だと、思う」

（ベニート、大丈夫だよな？）

『それを俺に聞くのか。俺だってこんな事初めてだから、何とも言えないが、このぐらいなら大丈夫じゃないか？』

（そうだよな。でもこれ、どうすればいいんだろう）

『そんなの俺が分かる訳ないだろ。まあ取り敢えず、深呼吸して落ち着いてみたらどうだ？』

彩は、他にいい方法が思い付かなかったので、取り敢えずベニートの言った通りに、深呼吸を試してみた。しかし、炎はおさまるどころか、逆に勢いが増してしまった。

「ちょ、ちよっと、何で勢いが増してるの？」

「わ、分からないよ。でも、もしかしたら力が暴走しちゃってるから、うまくコントロール出来なくて、簡単にはおさまらないのかも」
「それじゃあ、どうするのよ。おさまるまで、待つしかないわけ？」
「うん。それしかないと思う」

「だとしたらその炎で他の物に移って燃えないように、どこかに移した方がいいんじゃないですか？」

由紀の指摘にみんな頷いて、辺りにある燃えそうな物取り敢えず、隣のセレナ達の部屋に移した。当たり前だが、炎のその物みたいな彩は手伝う事も出来ずにただ、みんなが移しているのをボーっと見ていた。

「そ、そうだ。私、教職員工リアに行って先生達呼んでくるね」

「う、うん。よろしくね。セレナ」

彩の返事を聞くと、セレナは部屋を飛び出して行った。

「……………」

部屋にセレナと、シルヴィ他が来た時には、彩の暴走はおさまっていたが、時すでに遅しというか、なんというか、とにかく部屋が全焼していた。ただ、燃えたのは彩達の部屋だけだったのと、何故か猫耳は残ったが尻尾が消えてくれたのが、不幸中の幸いというやつだった。

そして、この状況になった。原因の彩は、全焼した部屋で座り込んでいた。他の三人は、その彩を気遣うような視線を向けながら、座り込んだ彩の脇に立っていた。

「これは、二人にこの部屋が直るまでの他の部屋を急ぎ手配しないといけないわね。空き部屋なんてあったかしら」

溜め息交じりにシルヴィが呟いた。

部屋はその日の内に手配された。だが問題があった。なんと彩に手配された部屋は、男子寮の方だった。その理由が空き部屋がなく、一人で部屋を使ってる人の所に入れてもらおうとしたのだが、女子寮の方は部屋を一人で使ってる人が一人しかいなかった。彩は一応男なので、その部屋は正真正銘の女の子である紗枝が入れてもらう事になった。そういう訳で、女子寮に他に入れてもらえる部屋がないので、一応男だし男子寮でも大丈夫かな、というシルヴィの判断で、男子寮の一人で部屋を使ってる人の所に入れてもらう事となったのだ。普通に考えたらかなりの問題があるだろうが、そこは気にしちやいけないと彩は自分に言い聞かせた。

そして、現在その手配された部屋の前に、来る途中に男子から好奇の目で見られながら、彩は辿り着いた。

（ここか、今日からしばらくお世話になる部屋は）

彩は取り敢えず、ノックをした。すると、中から「開いてるよ」という声がしたので、ガチャッとドアを開けた。彩は部屋の中に「失礼しまゝす」と言って入った。パツと見た感じ内装は女子寮とさほど変わらなかった。そして、ベットには見知った顔の男子と目があつた。

「あ、橘さんだったのか。どうも、初めまして矢光森やみつ・しんです。確か俺達同じクラスだったよね。ここは何かと不便もあるかもしれないけど、しばらくの間よろしくな」

（そういえば、いたんだったなこいつ……いろいろあつてすっかり忘れてた）

「えっと。私のこと知ってると思うけど一応自己紹介しとくね。橘アヤです。部屋が直るまでの間よろしくお願いします……矢光さん」

「あ、えっと。森でいいよ。その変わり、俺もアヤって呼んでいいかな？」

「え、あ、うん。別にいいよ。じゃあ、改めてよろしくお願いします。森さん」

「おう。よろしくな、アヤ」

第八話 全焼（後書き）

更新が遅くなつてすいませんでした。

第九話 二人目のAKC

「おい、アヤ。起きろよ」

揺さぶれる感覚に彩は夢の世界から目を覚ました。

しかし、しっかりと目を覚ましたわけではなく、まだボンヤリと目を覚ましただけである。所謂寝惚けている、という状態である。

「んー？あれ？森？何で俺の部屋にいるの？」

だから、一人称を「私」に変えるという事が頭になく「俺」という風になってしまった。

「ほら、寝惚けてないで早く学校行く準備しろよ。遅刻するぞ」

幸いな事に、森はただ寝惚けているだけだと、勘違いしてくれたみたいだ。

「……………」

（遅刻？……あー、そっか。そういえば力が暴走して、そのせいで部屋が全焼しちゃって、森の部屋に移ったんだっけ）

「ほら、早く準備しないと、マジで遅刻するぞ」

「あ、うん。今準備するよ」

彩はそう言つて、服を脱いだ。普通にイメージマントを使って、制服に変換すればいいのでは？と思うかもしれないが、イメージマントも万能ではないのだ。

イメージマントは、羽織った者の着ている服に同化して、それで魔力を利用してその服を、羽織った者のイメージした服に変える魔具なのである。

当たり前だが着ていると服は汚れる。そして、それはイメージマントで変換した服も同様なのだ。

よって、イメージマントがあつたとしても、着替える必要がある、という事なのである。

だから、彩は着替えたために服を脱いだのだが、一つだけ問題がある事に、彩は気付いていなかった。

「ちょ、なんでいきなり脱ぎだすんだよ」

森がすぐ近くにいますという事に。

「え？……あつ！ご、ごめん！」

心は一応男だが何となく恥ずかしくなって、彩は慌てて、今脱いだばかりのパジャマで、体を隠した。

森の方を見ると、森は頬を少し赤く染めていた。彩はウブだなど思いながらも、森が自分に対して頬を赤く染めているという事に、少し気色悪くなり、鳥肌がたった。

「あ、あの、後ろ向いてくれる？」

森は「ご、ごめん！」と言って、慌てて彩に背を向けた。

彩は、急いで服を着てイメージマントで、制服に変換した。そして猫耳を隠すため、忘れずにニット帽をかぶった。

彩が準備を終わった後、彩と森はお隣さんである、森の友達のアレと朝食を食べるために食堂に向かうと、食堂の入り口にセレナ達がいた。

「あ、みんなおはよう。どうしたの？こんなところにいるの」

「アヤ、それが同じ部屋になった奴なの？男子と同じ部屋なんて……何かされなかった？」

彩の質問には答えずに、セレナが詰め寄ってきた。セレナの言葉を聞いて、フレイは苦笑いしていたが、森の方はムツとしていた。

「セレナさん。大丈夫ですよ、森は甲斐性なしですから、そんな大それたことできませんよ」

彩が答える前に、由紀が先に答えた。その事がよほど以外だったのか、セレナはキョトンとした。

「由紀は、その人の事知ってるの？」

キョトンとしているセレナに代わって、紗枝が由紀に訊いた。

「はい、知ってますよ。前の学校が同じだったの」

「そうなんだ。由紀は森さん、だっけ？と仲良いの？」

「特別仲は良いということも悪いということもないですね」

「そんな事ないだろ、由紀。俺達、前の学校ではよく一緒につるんでたじゃないか」

由紀の言葉を聞いて、森が講義をした。しかし由紀は冷たく言い返した。

「あれは、サイに誘われたから仕方なく、一緒に行動してただけで、別に私は森がいてもいなくてもどっちでもよかったんですよ」

「そ、そんな……」

森は、ガックリと地面に両手両膝をついて、ブツブツと何かを言い始めた。

「ゆ、由紀。そろそろ冗談だということを、教えてあげた方がいいんじゃないかな」

森があまりにも惨めに見えたので、彩は由紀に近付いて、由紀にだけ聞こえる声で言った。

「そうですね」

そう答えて、由紀は森に近付き、両膝をついた。

「森、そう落ち込まないでください。さっき言ったことは冗談ですから」

「冗談？ホントに冗談なの？俺がいてもいなくてもどっちでもいいって言ったのも冗談？」

「はい、冗談です」

由紀はニツコリとして答えた。

「じゃあ、俺がいてよかった？」

「それは……ご想像にお任せします」

由紀はまた、ニツコリとして答えた。その様子を見ていた全員が由紀に対して、同じ感想を持った。

「そ、それはどういう意——」

「取り敢えず、中に入りませんか？いつまでもここにいたら、他の人達の邪魔になりますし、それに森が、地面に両手両膝をつけて落ち込んでいるから、さっきから何事か、と注目を集めていますよ」

フレイに言われて、周りを見てみると、確かに十人ぐらいが立ち止まって、彩達の方を見ていた。

「そうですね。こんな所でこんな事してたら邪魔になるし、目立ちますよね。じゃあ、中に移動しましょうか」

とその元凶である、由紀が答えた。『原因はお前だろ！』と誰もが心の中で思っていたが、移動する事には異論はないので、取り敢えず誰もその事を口に出すことはなく、みんなで食堂の中に移動した。ただ森は、また何かブツブツと言って動こうとしなかったので、フレイが引きずって中に移動させた。

食堂の中に移動した彩一行は、運良く人数分並んでいる、空いている席を見つけたので、そこに座った。

「では、改めまして。俺の名前はフレイ・フォーレ。森とは、クラスが同じのと部屋が隣ということで、話をしてみたら気があったので、友達やっています。みんなとも、同じクラスだから仲良くしてね」

フレイの後に続いて、みんなが名乗った。彩はここにいる全員が、彩の事を知っているので、特に改めて名乗ることはなかった。まだ名乗っていないのが森だけなのだが、森はブツブツと何かを言うのは止まったのだが、未だに落ち込んでいて、話を全く聞いていないようだ。

（そこまで落ち込むような事だったか？）

「おい、最後お前だぞ、森」

なかなか森が名乗ろうとしないので、フレイはしびれを切らしたようだ。

「え？最後って？」

「だから、今みんなが名乗ったでろ？で、お前だけがまだ名乗っていないの。だから、早く名乗れ」

「あ、ああ。うん、わかった。え、と。矢光森です。よろしくお願

いします」

「……………あ！思い出した」

突然紗枝が、大きな声を出した。それを聞いて、森がびくつとした。

「な、なんだよ」

「あ、えつと。ごめんなさい、森さんじゃなくて、フレイさんなんだけど、フォーレっていうのどこかで聞いたことあるなと思ってたら、たしか校長先生と同じ家名だよな。もしかして、校長先生と関係あったりする？」

「ああ、その事か。まあ、うん。校長は、俺の姉だよ」

「へー、校長先生がお姉さんねえ——身内が校長だと、何かと大変なんじゃないの？」

「そうなんだよ。姉貴は校長になる前から、能力が高くてそれで何かと比べられてさ。そのせいで、色々苦労したよ。だから、ココでもそうなるつてのは避けたいから、この事はなるべく内緒にしてくれると、ありがたいな」

セレナの質問にフレイは、微妙な顔をして答えた。

「わかってるわよ。べらべらと人の家族の事を話す趣味もないし——みんなもそうよね？」

セレナの言葉に、みんなが頷いた。相変わらず落ち込んでいる森を除いてだが。

「ありがとう。助かるよ」

この後は何事もなく、普通に朝食を食べ終え、一旦部屋の戻ってからまた合流し、みんなで教室に向かった。教室に着いた頃には、森も立ち直っていた。

「昨日は、アクセシデントがあつたが、今日は大丈夫だろう。取り敢えず、昨日やった鍵の生成の復習をしようと思う。昨日鍵を生成することができた者は気付いただろうが、真白が生成した鍵の色と、自分が生成した鍵の色が違ったと思う。恐らく、みんなの生成した

鍵の色は銅だったんじゃないか？鍵というのは、三色あって生成者のレベルによって、鍵の色が変わるんだ。みんなの生成したと思われる銅は初級者レベルで、その生成者の事をブロンズキークリエーターの略でBKCという。真白の生成した、銀は中級者レベルで、その生成者の事はシルバーキークリエーターの略でSKCという。そして最後に、金で上級者レベルだ。生成者の事は、ゴールドキークリエーターの略でGKCという。殆どの物が、卒業するまでにGKCを生成するレベルまで達することになる。ここまでで、何か質問がある者はいるか？」

「先生三色って言いましたけど、昨日アヤが銅、銀、金のどの色でもない、灰色の鍵の生成してましたよね？灰色の鍵の生成者はなんて言っんですか？」

意外にも、紗枝が手を挙げて質問した。

「橘の灰色の鍵は、例外だからな……まだ、呼び名はないが、恐らくアーシェンキークリエーターでAKCになると思う。グレーだとゴールドとかぶってしまうからな」

「え？例外なんですか？あたしも、灰色だったんですけど……」

「……悪い、八柳^{はちやなぎ}今なんて言ったか先生よく聞き取れなかった。もう一回言ってくれ」

「あ、はい。あたしも、灰色だったんですけど」

「……灰色だった……俺の聞き間違いじゃなかったのか……何故なんだ。何故俺の受け持ちだけこんな厄介なのが二人も……」

第十話 行動開始

紗枝の爆弾発言の後、昨日と同じく授業は自習となり、紗枝と彩と仙道は校長室に来ていた。シルヴィは仙道から紗枝の事を聞き、難しい顔をした。まあ、それも仕方のない事なのだろう。何故なら、一人でも戦争が起こる前触れとされているのに、それが一人どころか二人も現れたのだからだ。シルヴィがこれをどのように捉えているのか、彩は考えてみたが結局分からなかった。

「あの……校長？昨日と同様に特級魔封術師とアブソーバーの手配をしますか？」

「その必要はありません。ですが、今回は第三演習場を使うので、その手配をしてください」

「わかりました。では、失礼しました」

仙道はそう答えて、すぐに校長室を出て行った。

「……まさか、二人目が出てくるなんて思いもしなかったわ」

仙道が出て行ってすぐに、シルヴィが溜め息まじりに呟いた。

「そうですね。まさか。私以外にもAKCが現れるなんて、思いもしませんでしたよ。しかもそれが、紗枝だとは……」

「AKC？」

AKCという単語に聞き覚えがなかったのか、シルヴィは首を傾げて訊き返してきた。

「あつ、え、と。AKCっていうのは、普通の鍵の生成者達の事をBKC、SKC、GKCと呼びますよね。それで、紗枝が灰色の鍵の生成者の事はなんて呼ぶのかって仙道先生に訊いたんです。それでその解答がアーシエンキークリエーターでAKCということだった訳です」

「そういうことですか。まあ、グレーだとゴールドとかぶってしまうから、確かにそうなるわね。説明ありがとう、アヤさん」

シルヴィは納得といった感じで、彩にお礼を言った。

「じゃあ、そろそろ第三演習場に移動するわよ」

第四演習場は殺風景で何もなかったが、第三演習場は森になっていた。恐らく第四演習場が威力の大きい魔術を訓練する場所で、この第三演習場は、森で戦闘になった場合を想定した戦闘訓練をやる場所なのだろう。何故シルヴィが、この第三演習場にいたのか彩には見当もつかなかった。彩が、周りを見回している内に紗枝は鍵を生成し終わっていた。そしてシルヴィが紗枝に、今度は解印をするように言った。紗枝が言われた通りに解印をすると、紗枝の背中から漆黒の翼が生えてきていた。その漆黒の翼は、彩にカラスを連想させた。

「え？カミラ？どうなっているのって訊かれても、なんのことを言ってるのか、あたし分かんないよ」

紗枝が、急に誰かと話をしているかのように喋りだした。彩は先ほども紗枝と同じ事を体験したばかりなので、ということなのかすぐに理解できた。

「そういえば、アヤさんも解印した時に、丁度今の紗枝さんみたいに急に喋りだしたけど、誰かと会話でもしてたのかしら？」

しかし、シルヴィがそれを理解している訳もなく、彩に訊ねてきた。

「はい、ファミリアーと会話していたんです。解印したら、急に頭の中にファミリアーの声が聞こえてきたんです。いったいこれはどうなってるんだって。今の紗枝もきつとそんな感じなんだと思いますよ」

「そういうことだったのね、納得したわ——それって、今もファミリアーの声って聞こえるのかしら」

「あ、はい。ファミリアーの方が話し掛けてくれば、ちゃんと聞こえますよ。後、どうやらファミリアーも周りの状況を把握することができるといいます。今この会話もきつとファミリアーは聞いてい

ると——ん？」

シルヴィに説明していると、上空からバサバサと羽ばたくような音が聞こえたので、上を見上げてみるとそこには、漆黒の翼を羽ばたかせ、空を自由自在に飛んでいる紗枝がいた。紗枝は彩と目が合うと少し興奮気味に、彩達のいる所に降り立った。

「アヤ、あたし空を飛べるようになったよ」

「あ、うん。見てたよ」

「空を飛べるなんていいわね。私も飛んでみたいわ——まあ、それはどうでもいいとして、紗枝さん次は、魔術を使ってみてくれるかな」

「はい、分かりました」

元気よく答えた紗枝は、ゆっくりと目を閉じた。そして、そのまます数秒経過した時に、紗枝を中心に冷氣が漂いだした。数十秒が経過すると、紗枝の周りの草木は全て凍りついた。

「すごいわね。これだけの範囲を全て凍りつかせるなんて。それに、力をしっかりとコントロールできてるように見えるわ——じゃあ、もう封印してもいいわよ」

シルヴィは、最後に小さな声で「できるか分からないけど」と付け加えた。しかし、幸いなことに紗枝の封印はちゃんと成功し、漆黒の翼と鍵は消えた。

「——よかったわ、これで今回は一安心ね」

そう言ってシルヴィは緊張が解けたのか、深く息を吐き出した。

「なんか、暗に私がシルヴィさんを不安にさせてるって言ってます？」

「そんな事ないわよ。まあ、不安じゃないって言うって嘘になっしまうけど……」

「やっぱり、不安なんですか」

彩は溜め息を吐いた。

「だ、大丈夫だよ。きっとアヤもすぐにコントロールできるようになるよ」

すぐに、紗枝がフォローしてくれたが、彩にはちゃんとコントロールできる自身は、少しもなかった。

この時、彩達のやりとりを遠くの木の上から、見ている者がいることに誰も気付かなかった。彩がふと、視線を感じて辺りを見回した時には、すでに木の上にその者の姿はなく、辺りにもその姿はなかった。

とある豪邸の一室に彩達を見ていた者と、その仲間と思しき男とその男の脇に控えている女の子の三人がいた。

「そうか、報告ありがとう——遂に三人目が力を覚醒させたか。生命を創造する者、時を跳ぶ者、そして運命を操作する者が揃ったのだな」

フルルプルフ魔封術学校に潜入している仲間から報告を受け、男は薄く笑った。報告をした者は、すでに部屋にはいなかった。ドアを開けて出て行ったのではなく、魔術を使い空間と空間を繋ぎ、跳んだのである。

「でも、まだ二人は本当の力を覚醒してないじゃない。今はまだ、その力を覚醒させる可能性があるってだけでしょ？」

男の脇に控えていた女の子が、男の言葉に反論した。

「そうだな。だからそれを確実に覚醒させるために、私がこれから動くのだよ」

「『動く』って、すでもう動いたじゃない」

「あれは、私の悪戯にすぎない。覚醒とは無関係だよ。それに、確かに私が指示をしたが、あれは私が実行したのではなく、エリが実

行したのではないか。つまり私はまだ、動いてはいないよ。動いたのは、あくまでエリ、君だよ」

男は、笑って答えた。その答えにエリと呼ばれた少女は、溜め息を吐いて「そんなの屁理屈じゃない」と呟いた。エリのその反応に男は、苦笑いをした。

「それに、あれは悪戯じゃ済まないんじゃないの？大怪我させたし」「死なないってことは、視て知っていたから、いいのだよ。それに、ああした方が面白いではないか」

エリが「悪趣味……」と呟いた。

「私がやつといてなんだけど、生命の創造者には同情するわ」
男はまた、苦笑いをした。

「ただいま。——あれ？」

あの後、紗枝と別れて彩が部屋に戻ると、森はすでにベットに横になり寝ていた。

「なんだ、寝てるのか」

「ん？アヤ帰って来たのか」

そつとドアを閉めたのだが、森は起きてしまった。

「あ、と。ごめん、起こしちゃったね」

「謝らなくても大丈夫。気にすんな」

「うん。ありがと」

「それにしても、八柳まで灰色の鍵を生成するなんてな、吃驚したよ。結局灰色の鍵ってなんなんだろうな。アヤは何か知ってるのか？」

「さあ、それは私にも分からないよ」

知っていたが、これはシルヴィに口止めされているので、森には悪いが話す訳にはいかないのである。

「そっか。そうだな——ふわぁああぁ」

森はそう言つて、大きな欠伸をした。

「んじゃ。もう俺は寝るわ。おやすみ」

「あ、うん。おやすみ」

（ん〜じゃあ俺も今日はもう寝ようかな）

彩は服を——森の前で着るのに、ネグリジエは不適切と彩は判断しているのに、ネグリジエではなく、普通の自分で持ってきていた、パジャマに——着替えて、ベットに横になった。

第十一話 風紀

「ふあああああ」

彩は大きく欠伸をした。それを見てシャルロットが溜め息を吐いた。他のみんな―セレナ、紗枝、由紀、森、フレイの事である。もうこのメンバーで定着しようとしている―は特に反応なし。現在時刻13:10。昼食を食べ終え、特にやることもないので、そのまま学食で適当にみんなで雑談をしている最中である。しかし、彩はその雑談に加わることなく、テーブルに突っ伏し一人でまったりとしていた。

（今日は何事もなく、落ち着くなあ……）

ここ最近で一気にいろいろな事が起こり、彩はなかなか落ち着くことができなかった。今のところ何も起こってなくて、特に何もすることがないというこの時間が彩にとっては、すごく嬉しいことだった。しかし、そんな時間は長く続くことはなかった。

「あ、副会長。どうしたんですか、私に何か用ですか」

由紀の言葉に、みんなで由紀の視線を追った。すると、小学生と見間違えてしまいそうなほど、身長が低い女の子がいた。何故小学生ではないと分かったかというと、フルブルーの制服を着ていたからである。

（……副会長？もしかしてこの女子、先輩？）

「あ、ごめん、違うんだ。えっと、橘アヤさんと八柳紗枝さんほどの子かな」

副会長と由紀に呼ばれた女の子は、ちらつと彩達の方を見た。

「アヤは、ニット帽かぶっているの、紗枝さんはその右隣に座ってる子です」

「ありがとう、由紀ちゃん」

「あ、あの。その由紀ちゃんというのは、やめてもらえませんか」
「そんな小さなことを気にしちゃ駄目だよ。由紀ちゃん」

それは、自分に言ってるのだろうか、と彩は思った。由紀は、その返答に溜め息を吐いた。副会長は、気にせずに彩と紗枝の方に顔を向けた。

「私は、副会長の蓮見琳。はすみ・りん 橘さんと八柳さんにはお願いがあるの」

「お願い、ですか？」

彩は姿勢を正して、訊き返した。

「うん。二人に生徒会に入ってほしいの」

「生徒会、何で私達なんですか」

「あなた達は、灰色の鍵を生成したんだよね。それで、その事を知った孔先生に聞いたんだけど、灰色の鍵の生成者は、GKCよりも強い力を秘めているって。だから、二人には一年生からの風紀として、生徒会に入ってほしいの。もちろん強制ではないけど」

「孔先生って誰ですか？風紀って具体的に何をやるんですか」

彩は二つの質問を一気にした。

「孔先生っていうのは、生徒会の顧問の先生だよ。あと何をやるかだね。んーと、二、三年の風紀の人と校舎を分担して見回って、それでもし校則違反者がいたら、まず注意する。それでいうことを聞いてくれなかったら、力づくで生徒会室に連行して反省文を書かせる、かな。まあ他にも細かいことはあるだろうけど、それは二、三年の風紀の人に訊いてね」

琳は、慌てることなく彩の質問にしっかりと答えた。彩は、さすが副会長をやっているだけのことはあるな、と思った。

「んー、めんどくさそうですね」

「それに、あたし注意とか多分できないよ」

「じゃあ、試しに一回だけでいいからやってくれないかな。決めるのはそれからということで、ね」

「はあ、まあじゃあ私はそれでいいです」

彩の答えに、紗枝はちよつと驚いたが「じゃあ、あたしもそれでいいです」と答えた。

「ありがとう。じゃあ、今日の放課後に生徒会室に来てね。場所は

由紀ちゃんに、というか由紀ちゃんと一緒に来た方がいいかな。じや、そういうことで、また放課後にね」

琳はそう言うと、すぐに学食から出て行った。琳の姿が見えなくなると、紗枝が口を開いた。

「……何で、あれでいいって言ったの？」

「んー、特に理由はないけど、強いて言うならあのままだと粘られそうな気がしたから、かな」

「そっか。まあいつか。やってみて無理そうだったら、引き受けなければいいだけの話だもんね」

「……そう、うまくいくかどうかは分からないけどね。ま、引き受ける、引き受けない、どっちにするにしても、取り敢えずは、放課後に生徒会室に行かないとだね——由紀、よろしく」

「あ、はい。分かりました」

「そういえば、由紀ってなんで副会長と知り合いなの？」

今まで彩達のやりとりを黙って聞いていたセレナが、由紀に訊ねた。

「それは、私が新入生代表だからです」

由紀の答えに、セレナは首を傾げた。

「えつとですね。新入生代表は、最低一年間は生徒会に在籍する義務があるんです。だから、副会長と知り合いだったんです」

「そういうことだったの。由紀も大変なのね」

「由紀も一緒なら安心できるよ」

紗枝が、ほっとした様子で呟いた。

「紗枝、それって、私が一緒でも安心できないってこと？」

彩は、少し意地の悪そうな笑みを浮かべ、紗枝に訊いた。

「え！？そんな事ないよ。ただ、由紀も一緒にいてくれた方が、より安心できるっただけだよ」

紗枝は、彩の質問に慌てて答えた。

「そんなに、慌てて答えなくてもよかったのに」

彩は、笑いを堪えて紗枝に言った。紗枝は、その反応を見て、少

し頬を膨らました。

放課後になったので、彩達三人は生徒会室の前まで来ていた。彩と紗枝が入るのを少し躊躇っていたが、由紀が躊躇うことなくドアを開けて生徒会室の中に入ったので、二人もそれに続いて中に入った。

「あつ、来た来た——ユリちゃん、この二人が例の二人だよ」

生徒会室の中には、琳と男子、あと教師と思しき、男がいた。

「だから、ユリちゃんはやめてくださいと何度言ったら、いうことを聞いてくれるのですか。副会長」

「会長。もはや諦めた方が賢明なのではないのかと、私は思うのだが」

「孔先生……そうですね。孔先生の言う通りですね——あ、すみません。申し遅れました。僕は会長のユーリ・ベクマン・シチエルビナです」

「私は、孔子^{こうし}雷^{らい}だ。生徒会の顧問をやっている」

「え、と。橘アヤです」

彩の後に、紗枝もすぐ「八柳紗枝です」と名乗った。

「で、私達はとうすればいいんですか」

早く済ませたかったので、彩は自分から話を切り出した。

「んー、二、三年の風紀の人達はもう出てますし、どうしましょう」

「では、今日は私が見回りに付き合うことにしよう。それでいいかな？会長、副会長」

「あ、はい。僕は孔先生が行ってくれるというならそれで構いませんよ」

「私も、それでいいですよ」

「じゃあ孔先生、二人をよろしく願います」

「ああ——では二人とも、私が先導してあげるから、付いて来てくれたまえ」

「はい」

彩と紗枝は二人同時に返事をした。

彩達が学食を通りかかると、なんだか中の方が騒がしかった。実は学食は放課後にも開放され、ケーキなどスイーツ類を安価で販売していて、女子に人気なのである。

彩達が学食の中に入ると、何かを囲むように人が集まっていた。

彩達は何事かと、その集団へと、近づいた。

「グスタフ、アンロック」

「アドルフ、アンロック」

すると、男子生徒二人のファミリーを使った喧嘩が始まろうとしていた。

「橘さん、八柳さん。出番ですよ」

それを見た子雷が彩達に耳打ちした。彩は早速かよ、と心の中で呟き、集団の中心地点を目指して、人をかき分けながら進んだ。紗枝も少しおろおろしながら、彩の後に続いた。

彩達が中心に辿り着くと、二人のファミリーから魔術が発動するところだった。彩は慌てて間に入った。しかし、ファミリー達の魔術の発動は止まることなく、間に入った彩に襲い掛かってきた（やば。何も考えずに間に入っちゃったよ。このままだと魔術が俺に間違いなく当たるなあ）

『お前も魔術使って、相殺すればいいんじゃないか？』

（あ、ベニート。いや、俺の魔術は安定していないから多分無理だと思う——盾か、他に何か盾の代わりになるような物があればいいんだけど）

『そんな物はないな』

ベニートと話をしている内にも、魔術は彩に向かってきている。

彩はもう覚悟を決めて、衝撃に備えながら、こんな盾が二つほどあればなあ、と盾を思い浮かべていた。そして、とうとう放たれた魔

術が彩に当たり、彩は全身に強い衝撃を感じた。

「——って、あれ、痛くない？」

「アヤ！大丈夫？——アヤ、そんな物どこに持ってたの？」

紗枝が、すぐに駆け寄って来て心配してくれたが、彩が両手に持っている物を見て、首を傾げた。彩は紗枝の言葉に、両手に持っている物を見た。

「？何の——えっ」

それは衝撃が来る前に彩が、思い浮かべていた物とまったく同じ形、模様をした盾だった。

「なんで——あ、れ。何かすごく眠く……」

彩は突然、強烈な睡魔に襲われ、抵抗することもできずに瞼が徐々に閉じていく、完全に閉じようとしている中、彩は視界の端に満足そうに微笑み、自分の事を見ている子雷の姿を捉えていた。

「アヤ！？どうしたの——って、もしかして寝てるだけ？」

「きつと何らかの理由で、魔力を使い果たしてしまい、疲れて眠っているのだろう」

紗枝が振り返ると、そこにはいつの間にか子雷が立っていた。子雷は紗枝に向かって、微笑むと、野次馬の生徒達の方を向き、手を叩きながら追い払った。生徒達は渋々といった感じで、学食から出て行った。野次馬の生徒達が全員いなくなったのを確認すると、子雷は紗枝の方に向き直った。

「では、次にこの者達と、橘くんをどうにかしないとかな」

子雷は、彩と問題を起こした男子生徒二人を交互に見て言った。

教職員居住エリアにある家に、あの豪邸にいた、エリと呼ばれた女の子と男がいた。

「それで、どうだったの。何か成果はあったの？」

今日一日、この家で留守番をしていたエリが男に訊ねた。

「ああ、あったよ。生命の創造者が、物を創造する力に覚醒した」

「時の跳躍者の方は？」

「そっちは、まだだ。だが、すぐに覚醒するさ。時を支配する力に、ね」

エリは「そう」と言って、もう興味を失ったのか部屋を出て行った。

第十二話 不明

「ん…………え、と…ここは寮？」

彩は目を覚ますと、まず部屋を眺め、自分が今どこにいるのかを確かめた。

「…………いつの間に俺は寮に戻って来たんだろう、そして何故寝てるんだろう。ていうか、今何時だ？」

部屋に置いてある、デジタル時計で時間を確認すると6：27、と表記されていた。隣のベットを見てみると、森が布団を蹴散らしお腹を出していびきをかいている、なんて事は無く、しっかりと布団をかぶりすやすやと眠っていた。

「…………朝？」

（あの、ベニート起きてるかな？何がどうなっているのか分かる？）
彩は、取り敢えず状況の把握をしようと、ベニートに話し掛けてみた。

「……………」

しかし、ベニートからの返事は無い。彩は寝てるのかなと思いつつ、頭を掻いた。

「…………あれ？」

頭を掻き、彩は今まであった物が無いことに気が付いた。その物とは、解印してから今まで、無くしたくても無くせなかった、あの猫耳である。

「どうなってるんだ？猫耳が無くなってるなんて。封印した覚えはないんだけどなあ。まあ、封印したところで、成功しなかっただろうけどさ」

彩がブツブツと独り言を言っていると、隣のベッドで森がもそもそと起き出した。起きた森は、まだぼんやりとした目で彩の方を見た。

「…………起きたのか」

「ん？あ、ごめん。起こしちゃったね。——まだ早いし二度寝しても大丈夫だよ」

いつもは七時くらいに起きているので、後三十分は寝ていても大丈夫なのである。

「いや、今日はもう起きるよ。そういえば大丈夫なのか？」

そう言っ、森は体を起こした。そして、彩にとっては意味の分からない質問をしてきた。

「大丈夫って、何が？」

「何がって、昨日アヤがここに運ばれて来た時は、吃驚したんだぞ。まあ、すぐに魔力を使い果たして疲れて寝てるだけだって説明されたから、心配はしなかったけどさ」

（運ばれて来た？それに魔力を使い果たしたって、えっと、昨日何があったんだっけ……）

「説明されたって、誰が説明したの？」

「え？ああ、孔とか言ったかなあの先生。生徒会の顧問だって言ってたけど」

（孔……生徒会の顧問……）

「あっ！思い出した。……でも、なんで魔力を使い果たしたのかが分からない」

「んー俺に何があったか教えてくれないか？もしかしたら、何かアヤには気付けなかったことが、あるかもしれないし」

「あ、うん。えっと昨日——」

彩は森に昨日の事を簡単に説明した。森は途中で口を挟むということとはせず、大人しく彩の話を聞いていた。

「——喧嘩の方は今は置いておくとして、気が付いたら両手に盾を持っていたって……もしかして、その盾か？」

話が終わると、すぐに森は彩の使っているベットの脇を見て訊ねてきた。彩は森の視線を辿って、自分のベットの脇を見ると、そこには昨日彩が両手に持っていた二つの盾が立て掛けてあった。

「…あ、うん。この盾」

「んーもしかしたらだけどさ、その盾アヤのファミリアーが魔術で作り出したってことじゃないか？」

「魔術？」

「ああ、俺もアヤと同じでここに来てから、ファミリアーとか魔術だとか知ったから、そういう魔術が実際にあるかどうかは分からないけど、魔力を使い果たしたってことは、その盾が魔術で作り出された物というのは、有り得ないことじゃないと俺は思ったんだ」

森の言っていることは彩にも理解できた。その通りだとも思った。だが、一つだけその説明に納得できないところがあった。それは、彩のファミリアーであるベニートは、火の魔術魔を使うのである。火を出すことはできるが、物を作り出すことはできないのである。だから森の今の説明では、まだ納得するには何かが足りないのである。

「アヤ、何か納得できないって顔してるけど、何がそんなに納得できないんだ？」

彩が黙って考え込んでいると、森が今の彩の心情を言い当てた。森は昔から、こういうところがあるのである。彩が悩んでいると、すぐに気付いて相談に乗ってくれていたりしていたのだ。

（変わらないなあ、森は）

「……その、ね。私のファミリアーの魔術って、火を出したり操ったりする魔術なんだ。だから、盾を作るなんてことできないと思う」「そういうことかあ。んーファミリアーって種類の魔術しか使えないんだっけ？」

「うーん。私には分からないなあ。さっき森が言った通りここに来てから、ファミリアーとかの事を知ったから、ファミリアーの事に詳しくないし」

「だよなあ。……あ、じゃあさファミリアー自身に訊いてみればいいんじゃないか？」

「んーそれはちょっと避けたいな。私、解印したらちょっと厄介な

事になるんだよ。だったら訊いたらすぐに封印すればいいじゃんって思うでしょ？」

森が頷いて肯定した。

「実は私、封印ができないの。学園長の話だと、力を制御できてないみたいな事を言ってた。だから、ファミリアーに訊くつてのはちよつとパスね」

「そういうことなら、仕方ないな。別にファミリアーに訊かなくても、先生とかに訊けば分かることだし、ただ単にファミリアーに直接そういう魔術が使えるかって訊いた方が手っ取り早いっただけだしな。あ、一種類の魔術しか使えないのかって質問なら、俺のファミリアーに訊くつて手もあるな。どうする？訊いてみるか？」

「うん。じゃあ、お願いする」

森は彩の返事を聞くと、すぐに森のベットの脇に置いてあった、ウエストポーチからファミリアーの本を取り出した。そして、森が鍵を生成し「ヴァギト、アンロック」と唱え、持っていた本から一匹の蛇が出てきた。

「あのさ、ヴァギト。ちよつと訊きたいことがあるんだ」

「なんだ」

ヴァギトと呼ばれた蛇が、かなり低い声で答えた。その声を聞いて彩は少しうつとなった。しかし、森は気にした様子はまったくなかった。

「ファミリアーってさ、数種類の魔術を使えたりする？」

「そんな事か。答えはノーだ。俺達ファミリアーは一種類の魔術しか使えん。まあ、例外はあるかな」

「例外？それってどんなの？」

「コピーを使うファミリアーだ。そのファミリアーは魔術を一度みると、その魔術をコピーすることが出来る。つまりその魔術を自分で使えるようになるということだ。そして次の魔術をコピーするまで、その魔術を使い続けることができる、という奴だ。まあ、俺もかなり昔に噂で聞いた話だから、真実かどうかは分からん」

「そっか、ありがと。——じゃあ、封印するぞ」

「好きにしる」

森は返事を聞くとすぐにヴァギトを封印した。そして彩の方に向き直った。

「んーヴァギトの話を聞く限り、彩のはコピーを使うファミリアーって訳じゃなさそうだな」

「うん。……振出しに戻ったね」

「そうだな。——ま、もうこれ以上は俺達で考えても仕方ないことだから、取り敢えず朝飯でも食いに行こうぜ。時間も丁度いいしさ」森がちらつと時計の方見たのにつられて、彩も時計を見てみると7:10と表記されていた。どうやら彩達は四十分ぐらい話していたようだ。その時彩のお腹がタイミングよく、空腹を知らせた。

「あーそつえば、アヤは昨日寝てたから晩飯食ってないからな。

まあ、お腹が空くのも当然だな。丁度良かったな。食堂に行くとこで」

「う、うん」

彩は恥ずかしくて、赤面してしまった。以前の彩なら、この程度の事で赤面などしなかったはずなのだが。とにかく、今彩が赤面している事実は変わらない。

（もしかして、俺心まで——そんなの嫌だー）

当然この心の叫びは森には聞こえなかった。

第十二話 不明（後書き）

次話投稿が遅れてしまい、大変申し訳ございませんでした。

見捨てないで、お気に入り登録を解除しないでくださった、皆様ありがとうございます。

最近お気に入り登録を解除する人がいましたので、つまらなくなっているのだろうか、と心配になっていましたが、解除しないでくださっている皆様もいらっしゃるので、気にしてはいけないと思うことに致しました。

もし、なにかここをこうした方がいいなどのご意見がございましたら、教えてくださると、大変助かりますので、よろしくお願いします。

感想の方も、制限なしにしてありますので、ユーザー登録していらっしゃる方でも、できると思うので、よろしく願います。

第十三話 人間の魔術

「——と、言うことです」

彩が放課後になつて、取り敢えず風紀の仕事の事で生徒会室に行こうと、紗枝と一緒に教室をでたところで、校内放送でシルヴィに校長室に呼び出されてしまった。仕方なしに生徒会室には向かわず、校長室に向かった。呼び出されたのは彩だけだったが、紗枝が一人で生徒会室に行く訳もなく、彩に付いて来た。

そして、校長室に着くとシルヴィは紗枝が一緒な事に「丁度いいわね」と言つて、昨日何があつたのかと彩達二人に訊いてきた。彩達は特に言わない理由もないので、昨日の事を森に話した時より詳しく、シルヴィに話した。

「そう。ありがとう……孔先生の報告と対して変わらないわね」

「えつ。すでに報告受けてたんですか？ だったら、わざわざ私達がここに來て説明する必要なかったじゃないですか」

彩は少し拗ねた感じで言った。

「アヤさん。そう拗ねないの。私は必要のないことはしないわ。ちゃんと必要があつたから、二人に説明してもらつたのよ」

「なんで必要なんですか？」

「一人の報告だけを信用することはできないということよ」

彩も紗枝もよく分からない、といった感じで首を傾げた。

「ちよつと分かり難かつたみたいね……例えばの話なんだけどね。孔先生が、もし今回の事で何か嘘を吐いていたとしたら、私がその事を知るのはずっと先になつてしまふかもしれない。もしかしたら、ずっと知ることができないかもしれないわ。だから、それを防ぐためにアヤさんにも、どんな事が起こつたのかを訊く必要があつた、という事なのよ。まあ、二人して嘘を吐かれていたら、どうしようもないけどね——分かつてもらえた？」

「まあ、一応は。要するにシルヴィさんは、孔先生の事を信用して

ないって事ですよね」

シルヴィは彩の返答に、苦笑いをした。

「信用してない訳ではないわ。ただ、孔先生の報告だけを信用するということができないの——私はそういう人間なの」

最後の方は声が小さくて、彩達には聞こえなかった。

言い終わった後すぐにシルヴィは、自嘲的な笑みを浮かべたが、すぐにいつもの顔に戻ったので、彩達がそれに気付くことはなかった。

「……………」

確かに孔先生が嘘を吐いていないという証拠はなかったし、シルヴィの立場上、そう考えるのも仕方がないのかな、と彩は思った。

「そういえば、昨日の話をしていて思い出したんだけど、その盾って結局どこから出てきたの？」

「あ、それは私もよく分かってないんだ。森という話してみたんだけど、もしかしたら魔術で作り出したのかもしれないって話になったんだけど、私のファミリアーはそんな魔術使えないから、やっぱり違うのかなって……シルヴィさんはどう思いますか？」

「……私はアヤさんの持っていた盾というのが、魔術によるものだという可能性は高いと思うわ」

「なんでそう思うんですか？ さっきも言いましたが、私のファミリアーはそんな魔術使えませんよ。それはシルヴィさんも知っているじゃないですか」

「ええ、確かにあなたのファミリアーはそうでしょうね」

シルヴィはファミリアーの部分を少し大きな声で言った。彩には全く何を言いたいのか理解できなかったが、紗枝はシルヴィが何を言いたいのか理解できたのか、「あっ」と声を出した。

「私が何を言いたいのかアヤさんには分からなかったみたいだけど、紗枝さんは分かったようね——じゃあ、紗枝さん。アヤさんに説明してもらってもいい？」

ちゃんと理解してもらえたのが嬉しいのか、シルヴィはとても愉

しそうにしている。

「あ、はい。分かりました」

紗枝は軽く咳払いし、説明を始めた。

「多分だけどね。シルヴィさんが言いたいののは、盾を出したのはアヤのファミリアーの魔術じゃなくて、アヤ自身の魔術なんじゃないかって事だと思う」

シルヴィは紗枝の説明を聞いて、「その通り！」という感じで頷いていた。

彩の方は、思いもしなかったことを言われ、キョトンとしていた。

「……魔術はファミリアーじゃなくても、使えるんですか？」

「見方によっては人が使つてるように見える場合もあるけど、厳密には違うわ。だからそう考えると普通は使えないわ……あくまで普通は、だけどね」

愉しそうに言うシルヴィに、今度は彩にもちゃんとシルヴィが何を言いたいのか理解することができた。普通の人とは違う特別な鍵を生成するということ、これは普通ではないと言える。そしてこの普通ではない能力は、他にどのような能力があるのかまだ分かっていない。

つまり、あの盾が彩の魔術による物だということも、有り得ない話ではないということだ。むしろ、その可能性の方が限りなく高いと言えるだろう。そうでなければ、他に説明がつかないのだから。

「……もしアヤの魔術だったら、あたしも魔術使えるのかな」

紗枝は自分も魔術を使える可能性があるというのが、よほど嬉しいのか目を輝かせている。

「そうね。その可能性も高いと思うわ。でも……そうだとすると、気を付けないといけないわ。紗枝さんの魔術が、アヤさんの魔術と同じだとは限らないし、もしかしたらとても危険な魔術かもしれないわ」

「そうですか。でも、どんな魔術か楽しみだなあ」

「楽しみにするのはいいけど、気を付けてね。紗枝さん」

「はい」

紗枝の返事を聞くと、シルヴィは彩の事をじっと見た。

「な、なんですか」

彩が訊ねると、シルヴィは彩から視線を外し、考え込み始めた。そして、待つこと数十秒。シルヴィが視線を彩に戻した。

「……アヤさん。今あの盾と同じ物を出してみてくれない？」

「へっ？」

彩は何を言っているのか、一瞬理解できなかった。理解した後、
「無理だろ！」と思った。

「……そんな事できないと思います」

「やってみないと分からないわ。もし、今ここでできれば、アヤさんの魔術を使うことができるということになるわ。だから、試しにやってみてくれない？」

彩は仕方ないな、という顔をした。

「……分かりました。できるか分からないですけど、やってみます」

彩はそう言って目を閉じ、昨日と同じ様に盾を思い浮かべた。すると、彩の手から淡い光が発せられ、そこから盾のような物が形成されていった。そして十秒と経たずに、彩の手には盾があった。

「嘘……」

彩自分の手の中で形成された盾を見て、信じられないというような顔をした。シルヴィはちよつと驚いた顔をしていたが、紗枝は驚くことなく再び目を輝かせていた。

「まじかよ」

「これで、アヤさんが魔術を使えるということに決まりね」

「……ちよつと信じられないが、それが事実、か」

「ていうことは、あたしにも魔術が使えるんだね。やっ——」

紗枝の言葉は、いきなり入って来た仙道に遮られた。入って来た仙道は、息を乱している。

「何事ですか。そんなに息を乱して」

「と、突然、申し訳ありません……」

仙堂は大きく一回深呼吸をした。そして、報告した。
「ドールが、校内に侵入しました」

第十三話 人間の魔術（後書き）

ここで、ようやくドールの登場です。

「ドールってなんだっけ？」という方は第一話を参照してください。

第十四話 襲撃者

仙堂から詳細を聞くと、シルヴィは彩達にすぐに寮に戻るようと言って、彩達の返事を聞く前に、仙道と共にドールが侵入したという場所に向かった。

校長室に残された彩達は、本当はこの後生徒会室に行こうと思っていたのだが、どうやら、緊急事態みたいなのでシルヴィに言われた通り、生徒会室には向かわずに寮に帰ることにした。

そして寮に帰ろうとドアを開けると、そこには男がいた。男は何故か俯いていて、顔は見る事ができなかった。どうしたんだろうと、彩達が顔を見合わせ、彩が声を掛けようとしたところで、その男が顔をあげた。

顔をあげた男の目が、彩を視界に入れた途端に大きく開かれた。その男の顔は青白く、やせ細っていて、今にも倒れてしまうのではないだろうか、と彩達は思った。

「……見つけたぞ………生命の泉！」

男が以外にも力強い声で喋った。彩達にその声は聞こえたが、男の言っている意味は分からなかった。

「生命の泉？………っ！」

突然彩の顎に向かって男の拳が、下からえぐるように繰り出された。彩は咄嗟の判断で後ろに下がったが、後ろには紗枝がいてぶつかってしまった。しかし、運良く男の拳は彩の顔面をすれすれで通過していった。

「あ、危なかったあ——いきなりなにするんだよ！」

「……生命の泉、お前には俺と一緒に来てもらう」

「は？ 生命の泉ってなんの事。もしかしてお——」

彩は一瞬自分が今女であることを忘れて『俺』と言いそうになったが、途中で気付き言葉を止め、彩は紗枝の方をちらっと見たが、特に怪しんでいる様子がなかったので、言葉が続けた。

「——私の事？」

「ああ、そうだ。大人しくついて来れば、危害を加えるつもりはない」

彩は男を睨みつけた。

「私があんたの言うことを信じると思う？」

「お前には利用価値がある。だから、危害など加える訳がない。死なれでもしたら大事だからな」

「いきなり殴り掛かって来て、よく言うよ」

吐き捨てる様に言った彩の言葉に、男は表情を変えずに言う。

「無理に信じてもらう必要はない。お前は大人しく俺について来ればいいんだ」

「……もし、嫌だと言ったら？」

「力尽くで、連れて行くまでだ」

彩が後ろにいる紗枝を見ると、紗枝は男に見て怯えた顔をしていた。彩は再び男の方を見た。男は先ほど変わらず青白い顔をしているが、先ほどにはなかった何か希望を見つけたような輝きを、瞳に宿しているように彩は感じた。

「——ああ、そうだ。これだけは言っておく、さっきのはわざと外したんだ。今度は避けられると思うなよ」

「さ——っっ！」

紗枝に声を掛けようとした瞬間、男の拳が彩のみぞおちにヒットした。男はその外見とは裏腹にその拳はかなりの威力があり、彩はあまりの激痛に一瞬気を失いそうになった。

「っ！」

それを見て紗枝の顔が強張った。しかし、今の彩に紗枝を気にしている余裕はなかった。

なんとか激痛を堪えた彩は、ウエストポーチからベニートの本を取り出し、すぐさま解印をした。また封印できなくなってしまう可能性があったが、今はそれどころではないと彩は判断したのである。

『大変な事になっているな』

（そうなんだよ。だから、力を貸してベニート）

『ああ、分かった。と言つても俺にできることは特にないな』

「――今度はこっちの番だよ！」

彩は不安定だと思われる魔術は使わずに、解印で得る人並み外れた脚力を使い、男の背後に回り込んだ。そして、すぐに男の脇腹を狙つて蹴りを繰り出した。だがその蹴りは、簡単に男の腕で受け止められた。

「ほお、なかなか威力のある蹴りだ――だが、そんな素人丸出しの蹴りに俺がやられる訳がない！」

男はそう言つと、未だ蹴りを受け止められた状態の彩に回し蹴りを食らわせた。回し蹴りを食らつた彩は、数メートル飛ばされて壁に激突し、床に倒れこんだ。

「ぐはっ」

壁がひび割れるほどの衝撃だったが、解印をしている状態のおかげなのか、それほど彩にダメージはなかった。彩はすぐに起き上がり手で銃の形を作り、突き出した人差し指の先にピンポン玉くらいのサイズの炎の球体を作り出した。

（上手く行くか、分からないけど。やってみるしかない！）

そして彩は作り出した炎の球体を、男に向けて発射した。発射された炎の球体は、彩の狙い通りに男に当たった。

しかし、威力が足りなくて男にダメージを与えることはできなかったようだ。

「何をするのかと思つたら、こんなちんけな攻撃だとはな。まださっきの蹴りの方が良かったぞ」

「くっ」

魔術も効かないのでは、彩にもう成す術はなかった。

『サイ！ 銃を創れ！』

（え？ 銃？）

『ああ、そうだ。あの時の盾みたいにやればきつとできる』

（わ、分かった）

彩は、目を瞑り以前お巡りさんに見せてもらったことのある拳銃を思い浮かべた。次の瞬間、彩の手には思い浮かべた通りの拳銃が握られていた。

その拳銃は『ニューナンプM60』というリボルバーである。三十八口径で、装弾数は五発。重量六百八十六グラムで、有効射程距離は五十メートル。

彩はニューナンプを両手で握り、男に銃口を向けた。それを見た男の表情が少しだけ変わったが、すぐに元の表情に戻った。

「……まさか、銃を持っているとはな。だが、それも当たらなければ意味がない。果たしてお前にそれだけの銃の腕があるのか？」

「それは、やってみなきゃ分かんないよ！」

バン！

彩の持っているニューナンプから弾丸が発射され、その弾丸が男の頬をすれすれで通過していった後、男の頬にすつと傷が入った。

「っ！」

男は驚いた顔で、彩を見た。その様子を見て、彩は男に微笑んだ。

「私、射撃は得意なんだ」

実は彩は銃が昔から好きで、エアガンなどで遊んでいる内に射撃の腕がどんどん上がって行ったのである。しかしさすがの彩も本物の銃を撃ったのは、今が初めてである。それでも思い通りに撃てたのは、それだけ彩の射撃の腕がすごいということである。

（ベニート、ありがとう。助かったよ。俺、銃を創り出すなんて思い付かなかったよ）

『サイの銃の腕がここまでとは知らなかったがな。ちょっとした賭けだったのだが。どうやら上手く行ったようだな』

（そうだね。本物は初めてだけど、これなら何とかかなりそうだし――）

彩はもう一回、男に向けて発砲した。今度は、男の右腕に命中した。

「くっ」

続けて、もう一発。しかし、これは避けられてしまった。そして、すぐに男が彩に向かって来ようとした時、廊下の方からこつち向かって走ってくる複数の足音が聞こえてきた。

男はその音を聞いて、立ち止まり舌打ちをした。

「さすがに分が悪くなるな——生命の泉！ 今日のところは見逃してやる」

男はそう言うのと、彩に撃たれた右腕を抑えながら校長室から逃げて行った。入れ違いで、シルヴィ筆頭の教師陣が入って来た。シルヴィは部屋の惨状を見てから、彩に近付いて来て彩の手に握られているニューナンプを見た。

「アヤさん。さっきの銃声はあなた？」

「は、はい」

「一体何があったの？」

「えっと、シルヴィさん達が出——あ、れ……………」

彩は、昨日と同じ様に突然の睡魔に襲われ、その睡魔に抗うこともできずに床に倒れこみ、眠ってしまった。

「あ、アヤさん！？」

急に倒れた彩にシルヴィは驚いてしまった。

「大丈夫だと思いますよ。昨日も同じ感じだったですもん」

腰を抜かして床に座り込んでいる紗枝が、ほっとした様子でシルヴィに話し掛けた。

「そ、そうなの。なら良かったわ」

第十五話 ドール

仙堂に頼み突然眠ってしまった彩を、校長室にあるソファの上に運んでもらい、それをしっかりと確認した後、シルヴィは紗枝の方を向いた。

「紗枝さん。何があつたのか説明してもらえる？」

「あ、はい」

ソファの上で眠っている彩を見ていた紗枝は、慌ててシルヴィの方に向いた。

「えっと。知らない男の人が急に彩に襲い掛かって来たんです」

「男の人？ ココに侵入して来たって事なの？」

シルヴィは険しい顔つきになった。

実はこれはシルヴィしか知らない事なのだが、この校長室や他にも重要とされるあらゆる場所には、シルヴィのファミリアーの魔術でシルヴィの許可が無いと入れないようにする結界を張っているのである。当然この島全土を囲むように同じ結界が張られていた。

だから、今回のように紗枝の言った男や、ドールが侵入するなんて事はないはずだった。まして学校になんて有り得ないはずだったのである。しかし、現実には男とドールは学校に侵入して来た。ドールの方は教師陣で無事に暴走していたファミリアーを再封印するこゝとができてはいたのだが、そもそも男とドールがどのようにしてこの学校に入り込んだのが、分かっている。

このフルプルーフ魔封術学校に侵入する方法は、三つある。一つ目はシルヴィの結界を、結界の防御力を上回る力で破壊する。二つ目は結界を破壊するのではなく、解除する。そして三つ目は空間跳躍の魔術を使い、直接結界内に跳躍する、である。

だが、結界は破壊されていないし、解除もされていない。どちらが実行されても、シルヴィがすぐに気が付く。残された方法は空間跳躍なのだが、これは一度訪れた場所にしか跳躍することはできな

い。この島にいる人間が、手引きしたとも考えられなくもないのだが、今現在空間跳躍を使えるファミリアーと契約している者は、教師や生徒、その他の関係者を含めてもいないのである。

だからシルヴィは、紗枝が言っている男というのが校長室に入り込んだというのならば、その男がドールを手引きした犯人なのではないだろうか、考えた。

「んー、侵入して来たってわけじゃなくて、ドアを開けたらいたんです」

「ドアを開けたらいた………それなら、結界内にも入れてしまうわね」

シルヴィが張っていた結界は、ドアなどがある場合許可の無い物は開けることができず、中に入ることができないという結界である。この結界はドアなどが無い場合は問題ないのだが、ドアなどがある場合はドアなどが開いている間、結界の効力が切れてしまうのである。

「え？ 聞き取れなかったから、もう一度言ってもらえないですか？」

「あ、え、と。なんでもないので。気にしないでね」

紗枝はシルヴィの反応に首を傾げた。

「そんな事よりも、その男はどこに行ったの？」

「……先生達がここに走って向かってくる廊下の方から音が聞こえて、そしたら逃げて行きました」

シルヴィは仙道達教師達に目で男を探してくるように指示した。

その目を向けてきた意図をしっかりと理解した教師達は、すぐに校長室を出て行った。それを見届けて、シルヴィは紗枝に質問をした。「男の外見はどんな感じだったの？ 何か特徴とかはあった？」

「えと、顔がすごく青白くやつれていて、いつ倒れてもおかしくなさそうだなあと思いました」

再びシルヴィは、険しい顔つきをした。

顔が青白い、これはドールの特徴の一つである。さらにやつれて

いるというのは、ドールとなつてしまつた者の死ぬ直前の状態なのである。

ドールとは魔力を持たない者が無理矢理封印を解き、ファミリアが暴走してしまい、ファミリアに支配されてしまつた者の事である。そしてドールは魔術を使う際に魔力の代わりに、生命いのちを消費してしまう。その結果生命がなくなつていき、最後には死に至つてしまうのである。

ドールが侵入したという状況とこの事から、彩を襲つた男というのはドールである可能性が非常に高いと、シルヴィは考えた。

「『生命の泉』」

シルヴィが考え込んでいると、ソファの方から突然声がした。シルヴィは声のした方に顔を向けた。眠っていたはずの彩が目覚まし、ソファに腰掛けていた。

「え？」

「その男が言つたんですよ。私に向かつて『見つけたぞ、生命の泉』つて」

「あ、そういえば言つてたね。何の事なんだろうね」

「……………もしかしてその男と会話したの？」

「え？ はい。そうですけど。それがどうかしたんですか？」

「私の考えではアヤさんを襲つたのはドールよ。ドールは暴走したファミリアーに操られているつていうのはもう授業でやったわよね？」

彩は頷いた。

「暴走しているつて事はね、理性を失つてしまつているはずなの。だけど強力なファミリアーの場合、稀に理性を失わないファミリアーもいるの。性格が変わつてしまつて、結果は同じなのだけれどね。ただ、元々強力な上に普通のドールと違って頭を使ってくるから、それだけ厄介なドールとなるわ」

「……………それつて、つまりあの男は厄介なドールということですか？」
「そうということよ。あのまま戦つていたら、いくらアヤさんでも死

んでいたかもしれないわ。上級魔封術師でも一人で相手をするのは無理なほどのよ。生きていたのが不思議なくらいよ」

彩はシルヴィの話聞いて、自分がどれだけ恐ろしい相手と戦っていたのか理解した。だが、彩は恐れることはなかった。

「死ぬことはなかったと思います。男は、私には利用価値があると
言っていましたから」

「利用価値…… ドールにとってアヤさんにどのような利用価値があるのかは私には分からないけど、もしかしたら今回の事は大きな戦いの始まりだったかもしれないわ」

彩と紗枝は二人とも息を飲んだ。

「戦いに備えて、明日からアヤさんと紗枝さんには特別講師をつけて、あなた達はまだ解印と封印ぐらいしかできないだろうから、その講師から魔封術戦闘のイロハを教わってもらわね。放課後からだから、放課後は空けときなさい。いいわね」

「は、はい」

「はい」

「じゃあ、今日は疲れただろうから寮に戻って休みなさい」

彩と紗枝は返事をしてシルヴィに言われた通りに、今度こそ寮に向かった。

「———そうですか。ご苦労様です。今日はもう帰宅しても構いません」

彩と紗枝が校長室を出て行ってから三十分ぐらい経った後に、彩を襲ったドール（？）の搜索をしていた仙道達が戻って来た。結果

は発見したが逃げられてしまったとの事だった。しかし、それも無理はない事だった、理性を失っていないドールを相手にするのは、中級魔封術師である教師達には数で勝っていても、実力不足だったのだから。

「……はあ」

しかし、逃がしてしまったのは痛かった。彩に利用価値があると言った以上再び彩を狙ってくるのは間違いないのだから。

取り敢えずシルヴィは、急ごしらえになってしまいが、彩達を鍛えるために上級魔封術師を一人手配した。次にドールが襲って来た時に、少しでも退けられる確率が上がるように。

「……でも、本当はもっと良い人に鍛えてもらわないといけないのだけれど」

シルヴィに心当たりがない訳ではなかった。だが、その人が今どこにいるのかシルヴィは知らなかったし、他にも知っている者は恐らくいないだろう。

シルヴィの心当たり、それはシルヴィの師であり、フルフルーフ魔封術学校の前校長で、創設者。その実力は特級魔術師でも敵わないかもしれないほどの実力であった。

しかし、シルヴィに校長の職を任せした後、誰にも何も言わずに忽然と姿を消したのである。

「はあ…… 本当にどこにいるのよ」

第十六話 転入生

「……………」

彩は無言で今の自分の状態を姿見を使って確認していた。そしてある物を再確認して彩は溜め息を吐いた。その理由は昨日の事件に関係する事だった。

前と同様に突然眠ってしまった彩だが、前と一つだけ違う事があった。前は眠ってしまった後猫耳——尻尾はもっと前に——が無くなっていたのだが、今回は猫耳も尻尾もしっかりと生えていたのである。

シルヴィに訊いてみたら、猫耳と尻尾が無くなったのは彩が魔力をファミリアーに一定量供給出来なくなってしまったからではないだろうか、という事だった。一定量とシルヴィが言ったのは、尻尾と猫耳が無くなった時期に差があったからである。

もしも、シルヴィの言った事が正しかったとしたのなら、今回の彩は魔力を一定量供給出来ているという事になる。しかし、ここで1つ疑問が浮かび上がってくる。それは何故突然眠ってしまったにも拘らず、猫耳と尻尾が健在なのかという事である。

彩が突然眠ってしまったという事は、魔力を使い果たしてしまったという事ではないのだろうかと考えられる。その結果シルヴィの話の通りに魔力を供給することが出来なくなり、前回同様に猫耳が無くなるはずなのに、今回は無くなっていない。

供給するだけの魔力が残っているのなら、突然眠ってしまう事は無いはずなのにおかしな話である。一体何がどうなっているのだろうか、彩は首を傾げた後また溜め息を吐いた。

『そう落ち込むな』

「あ、ベニート」

『耳も尻尾も隠せない事はないんだから』

「う、うん。まあ、そうなんだけ——」

コンコンコン

ドアを3回ノックする音が聞こえた。

「ん？」

「アヤ。着替えまだ終わらないのか？」

「あっ」

ココが洗面所で森を待たせている状態だったという事を、彩はすっかり忘れていた。

彩はさすがに森のいる所で着替える訳にはいかないと、洗面所で着替える事にしたのである。

「ごめん。もう出るよ」

彩はニット帽で猫耳を隠し、尻尾もしっかりと隠れている事を姿見て確認してから洗面所から出た。

すると森が我慢の限界だったのか、洗面所にすごい勢いで入って行った。それを見て彩は苦笑いをして、もう1度森に謝った。しかし、彩の謝罪は森には聞こえなかったらしく返事は返ってこなかった。

仕方なく彩は学校に行く支度を始めた。

朝食を森と食べ終え、彩達は教室に向かった。教室の前まで来ると、背後から声を掛けられた。

「アヤ、おはよ。ついでに矢光君もおはよ」

声を掛けてきたのはセレナだった。その隣にシャルロットが後ろには紗枝と由紀がいた。セレナに続きみんなも挨拶をしてきたので、彩も挨拶を返した。

「ついでかよっ」

「細かい事は気にしないの。細かい事を気にしすぎているとモテないわよ」

そう言っつてセレナは教室に入って行った。

「余計なお世話だっ」

セレナを追うように森も教室に入って行った。残ったメンバーに

挨拶をして彩も教室に入った。彩に続いて、シャルロット、紗枝、由紀の順に教室に入った。

「そういえば、フレイはどうしたの？　まだ来てないみたいだけど、一緒じゃなかったの？」

雑談をしていると、突然セレナが話題転換をした。ちなみに彩はセレナ言われるまでフレイがいない事に気付いていなかった。

「フレイ？　んー、分からないな。あいつ時々いなくなんだよ。どこで何してるんだか」

森が言い終わると同時に鐘が鳴り、仙道が入って来た。

「鐘はなつたぞ。席に着け」

仙道の言葉に席を立っていた者は、自分の席に着いた。森も彩達とは席が離れているので自分の席に戻って行った。仙道は全員が席に着いたのを確認してから、廊下の方を向いた。

「入ってくれ——今日はみんなに新しい仲間を紹介する」

教室が騒がしくなったが、教室のドアが開けられる音に静かになった。そして、清楚な感じの女子が入って来た。お嬢様という言葉がしっくりくるような女子だ。その女子は銀色の髪に琥珀色の瞳だった。身長は女子にしては高い170ぐらいはあるだろう。

「自己紹介をしてくれ」

「はい。マリア・ブノワです。よろしくお願い致します」

マリアは礼儀正しくお辞儀をした。そして、また教室が騒がしくなった。今度は男子を中心に。マリアは彩と紗枝の方を見て、ニッコリとした。

「静かにしろ！——ブノワ、トリシエの隣が空いているみたいだから、そこに座れ」

仙堂はセレナの隣——紗枝の前で、彩の右斜め前——を指し示した。

「はい」

やわらかく返事をして、マリアは彩達の方に向かって歩き出した。その時マリアは彩と紗枝を見て上品な笑みを浮かべた。指示された

席までくると、そのまま彩と紗枝に向かって

「よろしくお願い致しますね」

と言ってからお辞儀をした。それにつられるようにして、彩と紗枝もお辞儀をしながら『こちらこそ。よろしく、お願いします』と言った。

彩と紗枝の返事に満足したのか、マリアはまた上品な笑みを浮かべた。そして周りの人達にも同じ様に挨拶をした。一通り挨拶が終わると、マリアは静かに席に着いた。

「ほら、いい加減に静かにしろ！」

仙堂の言葉に1人の男子生徒——たしか名前は和田——が立ち上がった。

「先生。今、この時間を使ってブノワさんにいろいろと質問させてください」

「何かと思えばそんな事か。却下だ。質問なんて休み時間にしろっ」途端に男子を中心に教室のいたるところからブーイングの声が上がった。ブーイングをしていない者もいるが、少し不満そうな顔をしているのが殆どだった。特に関心がなさそうなのは、シャルロットと由紀だけだった。仙道はそれに呆れた感じで溜め息を吐いた。

「しょうがないな。今質問する事を許可する」

仙道の言葉に教室中が再び騒がしくなった。

「だが、条件がある。質問は3つまで、後騒がしくするな。他のクラスは迷惑になる」

再びブーイングの声が上がった。

「嫌ならいいんだぞ。今質問するのは無しだ」

一斉にブーイングが止まり、教室が一気に静かになった。その中沈黙を破り一人の男子生徒が立ち上がった。

「ずばり！ スリーサイズは？」

そして、1つ目の質問をマリアにした。

（っフレイ?! いつの間に教室に入って来たんだろう）

『俺も気付かなかったぞ』

(え、ベニートなもの?)

『ああ。あいつはいつたい何者なんだ?』

(さ、さあ——それにしてもベタな質問だねえ。これって絶対答えたくないと思うよ)

全員がフレイの突然のベタな質問に啞然としている中、マリアはやわらかく微笑んだ。

「上から85、56、86です」

(えっ、答えるの?!)

まさかのマリアの回答に教室にいる全員がまたもや啞然とした。フレイも答えてくれると思っていなかったのか、吃驚して固まっている。それを見てマリアは愉しそうに微笑んだ。

「もちろん、嘘ですよ」

「え、あ、ああ。そうだよなあ。まさか冗談で言った質問に答えてくれると思わなかったか、さすがの俺も吃驚しちまったぜ。ブノワさんって意外とお茶目さんなんだな」

「ふふふ。そうですか。私はお茶目さんだったのですね」

(なんか、底の見えない子だ)

『面白いやつが、来たな』

(まあ、そうだね)

そして、ようやく驚きから回復したクラスメイト達からマリアに無難な質問が2つされ、質問の時間は終了となった。

朝の質問の時以外特に問題無く、放課後になった。そして、彩はシルヴィに放課後を空けておくように言われたのを思い出し、彩と同じく忘れている様子の紗枝にその事を教えてあげて、彩と紗枝は校長室に向かった

校長室に着くとそこには何故かマリアがいて、シルヴィと話をしていた。

「あ、呼ぶ前に来てしまったわね。今から放送で呼び出そうかと思

つていたところだったのよ」

「じゃあ、丁度良かったですね——ところでなんでブノワさんがココにいるんですか？」

そう言いながら彩がマリアを見ると、視線が合った。マリアはすぐに微笑んだが、彩は何故か気恥ずかしくなり顔を背けた。

「それは今から説明するわ。じゃあ、紹介するわね。今あなた達の目の前にいるマリア・ブノワさんが、あなた達に魔封術戦闘のイロハを教えてくれる講師よ」

「「えっ？」」

「だから、このマリアさんがあなた達2人の講師なの」

「「え、ええええええええええ」」

第十七話 戦闘能力

『あなた達ふたりには今日からみっちり、ワタクシが指導させてもらいます』

とマリアが笑顔で彩と紗枝に宣言した後、彩と紗枝とマリアの3人は場所を校長室から彩が初めて解印をした場所である第4演習場に移動した。そして第4演習場に着くとマリアはすぐに彩と紗枝に指示をした。

「それでは、ふたりとも解印をしてください」

紗枝はそれを聞いてすぐにウエストポーチから本を取り出した。彩はすでに解印をした状態なので、そのまま何もなかった。しかしその事を知らなかったマリアは、ずっと笑顔だった顔を少ししかめた。

「アヤさん。ワタクシは解印をしてください、と言ったのですが。聞こえませんでしたか？」

「あ、ごめん。言い忘れてたよ。私はもう解印してあるよ」

「そうなのですか？ 確かあなた達は特殊で、解印をするとファミリアーと融合して尻尾が生えたり、翼が生えたりすると聞いていたのですが……特にアヤさんには変化がみられないのですが……」

「ああ、それはただ単に人に見られると厄介な事になるし、個人的にもそれを人に見られるのはヤだから隠しているだけだよ」

彩はそう言いながら、ニット帽を取った。そしてニット帽に隠されていた猫耳がピクツと動いた。それを見たマリアは少し驚いた顔をした。

「……疑っていた、という訳ではないんですけど、本当だったのですね」

彩とマリアが話している内に、紗枝も解印をし終えた。マリアは紗枝の背中から生えている漆黒の翼を見て、再び驚いた顔をした。

「……………」

「ブノワさん？」

彩に声を掛けられ、マリアは驚きから回復したのか、彩達に笑顔を向けた。

「それでは、ふたりともワタクシを敵だと思って攻撃してください。魔術でも体術でも良いですから、とにかく本気で攻撃してくださいね。あ、それとワタクシの事はブノワではなくマリアと呼んでください」

「「は?!」」

彩と紗枝はマリアの言葉に、思わず驚きの声をあげてしまった。

マリアは驚いている二人を見て、微笑んだ。

「いきなりこのような事言ったら驚くのは無理ありませんね。何故このような事を言ったのかと言うとですね。ふたりの戦闘能力がどの程度あるのかを知るためです」

「戦闘能力……?」

「はい、そうです。魔封術戦闘を教える前にまず、ふたりの戦闘能力がどの程度あるのかを知っておきたいのです。ワタクシから攻撃する事は無いので安心してください」

「それでもあたしは自信ないなあ。戦闘とかした事ないし」

弱気な紗枝にマリアは、優しく微笑んだ。

「それならそれでいいのです。例えば今戦闘能力が皆無だったとしても、これからワタクシ

が最低中級魔封術師の平均戦闘能力まで、鍛え上げて差し上げますので」

マリアの言葉を聞いて、紗枝はホツとしたような笑みを浮かべた。「それなら、安心だね。よろしくね。マリアさん」

「はい、分かりました。でも紗枝さん、さんは付けなくてもいいですよ。では説明も終わったので、攻撃をしてください。ワタクシの準備はもう出来ていますので」

彩と紗枝は顔を見合わせ、お互いに頷いた。そして紗枝がその場に留まり、魔術で野球ボールぐらいの氷の塊を作り出してマリアに

向けて放ち、彩がそれに当たらないようにマリアに向けて突進をした。

マリアは紗枝が放った氷塊を最小限の動作でかわし、すごい勢いで突進して来た彩を横に移動してかわした。

「さすがにこれで、やられてくれたりはしないんだね」

「当たり前です。紗枝さんの氷塊は悪くありませんでしたけど、アヤさんの速さはすごいですが直線的すぎます。そのような攻撃でやられる者は殆どいませんよ」

彩は少しムツとして、再びマリアに向かって突進をした。

「ですから、それは直線的すぎると――」

突進して来た彩は、再び横に移動したマリアに対し、突進の勢いを殺さずに回し蹴りをしてから、回し蹴りで回転している最中に作り出した、炎の玉をマリアに向けて放った。

マリアは回し蹴りまでは予想出来ていたが、炎の玉までは予想していなかったので、少し驚きはしたが事も無げにそれをかわした。

紗枝がマリアがかわしたところを狙って、大きな氷塊をマリアの頭上に作り出し、そのままマリアに落としたが、マリアはそれさえもかわしてみせた。

再びマリアに攻撃を仕掛けようと動こうとした彩と紗枝を、マリアが手で制した。

「攻撃をやめてください。もう充分ですので」

彩と紗枝は攻撃をするのをやめ、マリアに歩み寄った。

「で、どうだったの？ 私達の戦闘能力は」

「割と高めだと思います。ただ、あくまでそれは1年生のこの時期にしてはという事ですけどね。ふたりの今の戦闘能力は、大体1年生の過程を終えた頃の平均レベルと言ったところです」

「そっかぁ…… もっといつてると思ったんだけどなぁ」

彩は地面に座り込んだ。

「仕方のない事ですよ。ふたりは今まで戦闘など縁のない暮らしをして来たのですから。それに落ち込む事はないと思うのですが。む

しろ喜ぶべき事なのですよ。この時期にこれほどの戦闘能力を持っている人は殆どいないのですから」

「そうなんだあ。じゃあ、あたしちょっとは自信持ってもいいのかなあ」

大人しく話を聞いていた紗枝が、ポツリと呟いた。マリアがそれを聞いて紗枝の方を向いて微笑んだ。

「そうですね。自信を持っても良いと思いますよ。ただ、それで満足されたら困ります。後、慢心は禁物ですよ」

「うん。分かったよお」

「ねえ。マリアさん」

彩はひとつ訊きたい事があつたので、立ち上がってマリアに声を掛けた。

「なんですか、アヤさん。さん付けしなくていいですってさっき言いましたよね」

「あ、うん。ごめん……マリア。ってそうじゃなくて、私達ほどの戦闘能力を持っている人は殆どいないってさっき言ったけど、今の1年の中で私達以外で他にもいるの？」

マリアは彩の質問に少し、考え込んだ。

「……ワタクシはココに来たのは今日なのであまり詳しくないのですけど、ワタクシが知っている範囲で言いますと……真白由紀さんとフレイ・フォーレさんのふたりです」

彩と紗枝はふたりとも驚きで目を丸くした。由紀の方は新入生代表だったので少々の驚きはあるが、予想出来なくは無かったのだが、まさかここでフレイの名前が出てくるとは彩も紗枝も全く思ってもいなかったのである。

「由紀さんはあなた達ふたりよりも、戦闘能力はとても高いです。由紀さんは中級魔術師の平均レベルです。フレイさんも由紀さんよりは高くないですけど、それでも中級魔封術師レベルなのですよ」
彩と紗枝は再び驚きで目を丸くした。まさかそこまで高いとはふたりとも思っていなかったのである。

「ふたりともどうしたのですか？」

目を丸くしてる彩と紗枝を見て、マリアは不思議そうな顔をした。

「あー、えっと。今マリアが言ったふたり、私達の友達なんだ」

「あ、そうなんですか。では、今度紹介してくださいね」

「うん、分かった。それでね。由紀の方も多少は驚いたんだけど、新入生代表だし予想出来なかったんだけど、フレイの方がすごく意外で、しかもふたりとも中級魔封術師レベルだって言うから吃驚してたんだよ」

彩の説明に紗枝が、うんうんと頷いた。

「でも、フレイさんは校長の弟さんですよ。それほど意外ではないと思うんですけど。もしかして知りませんでしたか？」

「あー、そういえばそんな事言ってたね。すっかり忘れてた。紗枝は覚えてた」

彩が紗枝の方を向いて訊ねた。

「ううん。あたしも忘れてた」

紗枝は、満面の笑顔で答えた。

（これってそんな笑顔で答える事か？）

「フレイさんが可哀想ですね。まあ今はその話は置いておきますが、あなた達ふたりの戦闘能力は分かったので、取り敢えず今日はここまでとします。もう寮に帰ってもいいですよ」

「そっか、じゃあ帰ろっか、紗枝」

「うん」

「ワタクシは仲間はずれなのですか？　ワタクシも寮なのですが」

マリアが少し拗ねたように言った。

「そ、そんな事ないよ。マリアも一緒に帰ろう」

「いえ。実は今から校長室に戻って報告しないといけないので、ふたりに帰ってください」

マリアは愉快そうに微笑んだ。

「ちよっ、ならなんで仲間はずれとか言うんだよ」

「だって、アヤさんワタクシには声を掛けてくださらなかったの、

少し寂しくなってしまうてつい」

「ついつて……はあ、まあいいや。私が悪かったよ。ごめん、マリア」

「いいえ。気にしないでください。では、ワタクシは校長室に戻りますね。さよなら」

マリアはそう言つて、足早に第4演習場から出て行った。

「……じゃあ、私達は帰ろっか」

「うん」

彩と紗枝もマリアの後を追う様に、第4演習場を後にした。

第十八話 ケルベロス

お昼休みとなり、彩と紗枝は生徒会室を訪れていた。何故生徒会室に訪れたかというと、以前に副会長の蓮見琳から生徒会に入つて欲しいと、お願いされていたのを断るためである。

本当は彩は生徒会に入つてもいいかなと思つていたのだが、そういう訳にはいなくなつてしまったのである。彩達をお願いされていた仕事の内容は、風紀であつたからである。風紀は休み時間や放課後の際に校内の見回りをする、というのが主な仕事である。

しかし、休み時間はともかく放課後となると、マリアの訓練（？）と重なつてしまつてしまうのである。当然優先度を考えると訓練の方が高いので、生徒会に入るといふ話は断るしかなかったのである。

お昼休みに訪れたのも、放課後はすぐに訓練へ行かないといけなく、訓練が終わつてからでは、生徒会の人達は帰つてしまつていゝるだろうと彩が判断したからである。

彩達が生徒会室に入ると、昼食を食べに行つてゐるのか琳や他の役員の姿は無く、生徒会室にゐるのは生徒会長のユーリ・ベクマン・シチエルビナだけであつた。

いたのが生徒会長で良かった、と彩は思った。ユーリに生徒会に入るのは断ると言つて、断る理由を——知られたらまずそんな事は話さず——説明した。

「——という事なので、私達は生徒会に入るといふのはお断りします」

「そうですか。そういう事なら仕方がないですね。ですがもし、今後放課後に時間が取れるようになったら、その時にまた検討してもらえると生徒会としても有難いです。生徒会はいつでも君達ふたりを歓迎しますので」

「はい。分かりました。——では、これで失礼します」

彩はユーリから視線を外し、紗枝と一緒に生徒会室を後にした。生徒会室を出ると、彩達の進行方向からひとりの女子生徒がこちらに向かって歩いて来るのが見えた。恐らく生徒会室に何か用があるのだろう。

近付くにつれて、段々と歩いて来る女子生徒の顔が見えてきた。

彩達はその顔に見覚えがあった。それは、琳であった。

「アヤちゃんと紗枝ちゃん。こんな所で会うなんて奇遇だね。どうしたの？ あ、もしかして生徒会に入るかどうか返事をしに来てくれたの？」

琳は彩達を見つけると、すぐに声を掛けてきた。

「はい。申し訳ないですが、お断りしました」

「えー、そうなの？ 残念だなあ」

琳は本当に残念そうな表情をした。

「え、と。すみません。しばらく放課後に外せない用事が出来てしまつて……で、でもその用事が終わったら生徒会に入らせてもらうので——ね、紗枝」

「う、うん」

突然話を振られて少し困惑した表情を紗枝は見せたが、琳の残念そうな表情を見て良心が傷んだのか、まだ迷った様子だったが同意した。

「そうなの！？ やつたー」

飛び上がって琳は喜びを表した。それを見て彩達は訓練が終わったら生徒会に入る事になつてしまつたが言つて良かった、と心から思っていたら、琳が突然険しい顔をした。

「ど、どうしたんですか？」

「えっとね。もしかしたらなんだけど、アヤちゃん達生徒会の誘いを断つたのにしばらくしてからやっぱり入るっていうのは周りから反感を買っちゃうかも」

「え？ どうしてですか？」

「アヤちゃん達はまだ入学したばかりだから知らないかもしれない

けど、生徒会に入る事はこの学校ではすごく栄誉な事って生徒達や先生達の間では思われているの。それを断るってだけでも反感を買ってしまうかもしれないけど、それだけならまだ大丈夫だと思うの。でも、一度断ったのにやっぱり入るっていうのは『一度断ったくせに調子に乗りやがって』とか考えちゃう人が出てくる可能性が高いと思うの。あくまで私の推測にすぎないんだけどね」

「……そうですか」

彩達は顔を見合わせ、お互いにどうしようか、と考え込んだ。琳も腕を組んで考え込んでいる。

「……んー、本当に入ってくれる気があるのなら、今生徒会に入ってその外せないっていう用事の間は別の仕事を任せてある、みたいな事にした方がいいのかもしれないね」

腕組みをしたまま琳が独り言のように呟いた。

「そうですね。生徒会に入る事がどれくらい栄誉な事なのかはまだ私達には分からないですけど、ホントに入るとしたら、一度断つて後から入るといふより今の内から入っておくというのが良いかもしれませんね。……と言っても、今生徒会長に断ってきたばかりなんですけど」

彩は思わず苦笑いをこぼしてしまった。

「それは、ユリちゃんしか知らない事？」

ユリちゃんと言う名前に彩は一瞬誰の事を言っているのか分からなかったが、すぐに先日琳がユーリの事をそう呼んでいたという事を思い出した。

「はい、そうです。生徒会室には生徒会長しかいなかったんで」

「それなら、大丈夫！ 他の役員がいたらちよつと危なかったかもしれないけど、ユリちゃんだけなら情報がもれるなんて事もないだろうから。——じゃあ、さっそくユリちゃんにこの話をしに——」

生徒会室のドアが急に開いた事で、琳の言葉は遮られた。

「その必要はないですよ。全部聞こえていましたから」

苦笑いをしながら、ユーリが生徒会室から出て来た。

「あ、ユリちゃん。聞こえてたんだ。それなら、丁度良かったね」

「丁度良かった、ではないですよ。聞かれると良くない話なので、から、もう少し声の音量を下げて話してください。それにあまり廊下でしていい話でもないですよ」

「あはは。ちよつと迂闊だったよね。ごめんね」

「まあ、取り敢えず中に入ってください」

そう言つてユーリは先導するように生徒会室の中に入り、それに続いて彩達も生徒会室に入った。ユーリは生徒会長用の椅子に座り、彩と紗枝を見た。

「――橘さん、八柳さん。ふたりは今から生徒会に入る、という事いいですか？」

「あ、はい。それでお願いします」

ユーリは彩が答えると、すぐに紗枝の方を見た。紗枝は体を少しビクツとさせた。

「八柳さんはどうですか？」

「は、はい。そ、それでいいです」

「では、今からふたりは生徒会役員となります。そこでふたりには話しておかなければいけない事があります」

少し険しい表情でユーリは言った。何を言おうとしているか分かつているのか琳の表情も少し険しくなっている。それを見て彩達はこれから何が話されるのか、と緊張した。

「実は反生徒会みたいな組織がこの学校にはあるんです。その組織は『ケルベロス』と名乗っています。しかしケルベロスはリーダー格が3人いる、という事だけしか詳しい事は分かっていません。そのリーダー格の3人が誰なのかもまったく掴めていないです」

「そ、そのケルベロスっていうのは、危険、なんですか？」

恐る恐るといった感じで、紗枝が質問した。

「はい、危険です。まあ、一般生徒に危害を加える事は今のところありませんが。生徒会役員には容赦がありません。過去ケルベロスに何人かの役員が怪我をさせられています」

『怪我』という言葉に紗枝が身をかたくした。

「あの、一般生徒に危害を加える事があまり無いと言いましたが、それは少しはある、という事ですか？」

今度は彩が恐る恐るといった感じで質問した。

「はい。と言つても、これは一般生徒がケルベロスの邪魔をしようとする、という条件付きですが。だから何もしなければケルベロスから危害を加えるという事はないです。今のところは、ですけど」

彩はこの答えを聞いて心底ホッとした。彩が紗枝の方を見ると、紗枝も少しホッとした様子だ。

「そ、そうですか。それは良かった」

「ただ、ふたりが生徒会の勧誘を受けた、というのはケルベロス側も知っていると思います。そして既に要注意人物とされているのではないかと、僕は考えています。ホントに生徒会役員には容赦が無いので気を付けてくださいね」

「「は、はい」」

「ふたりが、役員になった事は明日号外として生徒会便りで全校に発表します」

「分かりました」

「では、話はこれで終わりなので、もう教室に戻ってください。そろそろ授業が始まってしまうので」

「は、はい。失礼しました」

彩達は少し、不安な気持ちになりながら生徒会室を後にし、教室に向かった。

「大丈夫かな。あのふたり」

彩達が出て行った後、琳が呟いた。それを聞いたユーリは柔らかく笑った。

「大丈夫ですよ。きっと」

しっかりとした根拠はなかったが、何故だかユーリは大丈夫だと感じていた。

第十八話 ケルベロス（後書き）

遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

後、申し訳ないのですが、今スランプ状態になってしまっているの
で、これからも更新が遅くなるかもしれません

出来る限り更新したいと思いますが、もしかしたらしばらく休
載となってしまうかもしれません。本当に申し訳ありません。

第十九話 初めての訓練 前編

再び放課後が訪れ、彩達（彩と紗枝とマリア）は第4演習場に訓練のために来ていた。

昨日、彩と紗枝の戦闘能力を把握する事が出来たので、『これは既に授業で習っている事と思いますけど、復習という事で一応説明します』と、前置きをしてから魔封術の基本中の基本魔封術とは何たるかをマリアは説明し始めた。

——魔封術とは何なのか。魔封術は魔封と言っても魔を封じるというだけではない。魔封術は封印された魔族の封印を解き、その魔族が行使用する術、つまり魔術を制御し不必要な時は再封印をする術の事である。よって正確に言くと魔封術は『魔封術』ではなく、『魔制術』となるのではないか、という声もある。この事から魔封術に関わっている人の中には魔封術の事を、『魔封術』とは言わず『魔制術』と言う人も少なくないのである。

では何故、『魔封術』と名付けられたのか。それは魔封術が暴走してしまった魔族に操られてしまった人間^{ドール}を、助けるために編み出された術だからである。操られてしまった人間は、そのまま操られたままではいると当然魔術を行使用する事になる。そうすると生命^{いのち}を消費してしまう。それを防ぐには魔族から人間に一方的に交わされた契約を破棄しなければならぬ。しかし外部から無理矢理契約を破棄させるには魔族を封印するしか方法がない。そして、封印するにはある程度のダメージを人間か魔族の方に与えなければならない。その手段として用いられたのが魔術なのである。

本来、魔術は封印するためにあらゆる選択肢から選ばれただけの手段であって、目的ではない。だから目的である封印の封を取って『魔封術』となったのだが、近年手段が目的になってしまった者が出て来て『魔制術』ではないか、と言い始めたのである。今現在、その者達のように目的と手段をはき違えないよう、教師陣はその事

を強調して教えている。実はその教師陣の中にも魔制術派が何人かいるのだが……それは黙認されてしまっているのである。

一気に一通りの説明をしたマリアはふうと一息吐いた。彩と紗枝は説明が終わっても口を開かずにマリアが次に何かを言うのを待った。

「この説明から分かると思いますが、魔封術戦闘の軸は魔術です。よって如何に魔術を自分の物にするかが、魔封術師には問われるのです。まあこのせいで目的と手段をはき違える人が出て来るのですが……アヤさんと紗枝さんはココのところをはき違えないようにしてくださいね。あくまで、魔封術師の目的はドールとなってしまうた人を助ける事にあるのですから！」

マリアの一瞬思いつめたような顔をしたが、すぐに元に戻り突然彩達に詰め寄って言った。そのあまりの剣幕に、彩達は思わず何回も首を縦に振ってしまった。それを見てマリア満足そうな顔をした。「では、ふたりにはこれからやってもらう事を説明します。本来ならは人体解印から始めるのですが……ふたりはその必要がありませんから、魔術の練習から始めたいと思います」

「……… 具体的にはどんな事を？」

「まずはアヤさんなのですが、アヤさんは力を制御出来ていないみたいなので、力を制御する事から始めましょう。アヤさんのファミリアーの魔術は炎の魔術なので炎で球体を作って、それを維持してください。1つを5分ぐらいそのまま保てるようになりましたら、次は2つ、3つ、4つ……と増やしていくってください。それを10程保てるようになりましたら、次の訓練に入ります。それでは、アヤさんはもう始めてください」

「う、うん。分かった」

彩は少し紗枝達から離れた所に移動して、早速言われた通りに炎の球体を1つ手の平の上に作り出した。しかし、それはすぐに消えてしまった。

「むむむむむ………」

想像以上にこれは難しい。彩はふと紗枝はどんな訓練をしているのだろう、と思い紗枝達のいる方を見てみると紗枝は何やらいくつか氷で奇妙な物体を作り出していた。彩は何を作っているのかと、近付いてその氷でできた奇妙な物体を見た。

「……………」

それは近付いて見てもとても奇妙な物としか言えなかった。RPGで出て来るようなスライムを少し細長くし、そのスライムから翼と妙に細い足が生えていた。しかもその全く同じ物が3、4個紗枝の足もとに落ちてている。そして、また新しい物が出来上がった。やはりそれも全く同じ物であった。マリアの方を見ると、何とかポーカーフェイスをしようと頑張っではいたが、顔が少し引きつってしまっていた。もちろん彩自身も顔を引きつらせていた。しかし、当の本人はまた新たな奇妙な物体を作り出そうとしている。

「あの……紗枝さん」

思わず、敬称を付けてしまった。彩の呼び掛けにそれまで奇妙な物体を作り出そうとしていたのを中断し、彩の方に向いた。

「なあに？ どうしたの？」

「いや、あの……何ていうか……その奇妙な氷の物体は何？」

「え？ 何って……見て分からない？ カラスだよ」

カラス。カラスというのはあの街のいたる所において、ゴミを漁る黒い鳥の事だろうか。彩は再び奇妙な氷の物体を見る。

（違うよ。これは絶対カラスなんかじゃないよ。カラスに失礼だよ）
まあ、色は仕方ない。氷なのだから。だがなんだこの体は、どうみても引き伸ばされたスライムだ。足もこんなに細かったら、体を支える事など出来ないだろう。これでは翼があるところしか合っていないではないか。

「……………紗枝」

「ん？」

「これはね。絶対にカラスなんかじゃないと思うよ」

「そんな事ないよ。確かに少し上手く出来ていないけど」

（少し！？　これは少しなんてレベルじゃないよ！）

彩は大きく息を吸って、ゆっくり吐き出してからマリアの方を見た。マリアの顔は先程よりも引きつっていた。

「マリア。カラスのお手本を見せてあげてよ。これじゃあ、奇妙な生物の氷の像がいくつも作り出されてしまうよ」

紗枝が『奇妙な生物じゃないよ。カラスだよ』と抗議してきたが、彩とマリアはスルーした。

「そうする事はやぶさかではないのですが。ワタクシのファミリアの魔術は空気を操る魔術なのでそういう類いの物は作れないのです」

「そつかあ。んー、じゃあ俺がやってみるか。――紗枝、ちゃんと見ていてね。私がカラスという生き物がどのような物なのかを見せてあげるから」

彩の言葉に紗枝は『ちゃんとカラスなのになあ』とぼやきながらも彩の方を見た。紗枝がしっかりと見ている事を確認した彩は、手の平に意識を集中させ炎がカラスの形になる様にイメージした。

第二十話 初めての訓練 後編

彩は紗枝にお手本（？）としてカラスを炎で作ろうとした。

そしてその結果はどうなったのかと言うと、一応成功と言えなくもなかったが、どちらかと言うと失敗なのだろう。何故なら――

「はわわわわ。アヤ、これはデカすぎるよお。――てか、暑いー。はやくそれどころかしてー」

彩が作り出した炎のカラスは、見た目は良く出来ていたが如何せん大きすぎた。その高さは優に5メートルは超えているのではないだろうか。横の方は翼を広げた状態ではなかったが、それでも2メートルは超えているだろう。球体を作り出すときと同じくらいの大きさで作ろうとした筈が、何故だかこんな大きさになってしまった。ただ大きいだけならまだ良かった。しかし、紗枝の反応で分かるように炎のカラスが作り出された途端にその周囲の温度が一気に上がったしまったのである。今は5月。つまり春である。にもかかわらず、カラスの周囲の温度は37度ぐらいにはなっているのではないだろうか。しかも、今も現在進行形でどんどん上がっていると思われる。

「わ、分かってる、けど……消すことが出来ない」

「ええ!？」

紗枝の額からは汗が噴き出していて、その汗がつーつと顔を伝って第4演習所の床に落ちた。このままこの場所にいたら数分でそれは水たまりとなり、紗枝は脱水症状を引き起こし倒れてしまうだろう。それは彩にも言えることだが。

しかし、ひとりだけ何故か涼しい顔をしている人間がいた。それが無理して作った顔でないということは、全く汗を掻いていないことから分かる。そしてカラスを見ていたその者――マリアは彩に視線を移し口を開いた。

「――アヤさん」

「な、何？」

「どうやら、力が軽く暴走しているみたいですね。やはり自分で消すことは出来そうにありませんか？」

「う、うん。む、無理みたい」

マリアは「そうですか」と返し、手をカラスの方に向けた。すると、手を向けられたカラスは一瞬で跡形も無く消え去った。第4演習場の温度は依然として高いままだが、これ以上上がる危険性は無くなった。

それを見て彩と紗枝は、今何が起こったのか理解出来ずポカンとした表情になった。

「え、えっと。何をしたの？」

先に立ち直った彩がマリアに訊いた。彩の質問を聞いて紗枝もようやく立ち直り、急いで聞く姿勢をとった。その様子に、マリアが口元を抑え上品にうふふと笑った。

「大したことはしてませんよ。ただ、アヤさんが作り出した炎のカラスの場所から酸素を無くしただけです」

「酸素を無くした……？」

種明かしをされても彩の頭はまだしつかりと動いていないのか、理解出来なかった。

「ええ、そうです。魔術によって作り出された炎と言っても、炎は炎に違いはありません。酸素が無くなれば燃え続けることは出来ないのです」

こんなのは小学生レベルの理科で習うことである。もちろん彩も紗枝も「へえーそうなんだ」とは思わず「そういうことか」と思ったのだが、ひとつだけふたりに共通して疑問があった。

マリアは「カラスの場所から酸素を無くした」と言った。では、それはどうやって無くしたのか。普通に考えるならばそれは有り得ないだが、魔術の存在を知った今ならそれが魔術を使ったのではないだろうか、と想像出来る。だがマリアの周囲にファミリアは見当たらない。魔術ではないのだろうか、だとしたらどうやって、と

彩と紗枝は考えたのである。

「どうしたのですか？ ふたりとも変な顔をして」

「へ、変な顔じゃないよお。ただ、マリアはどうやって酸素を無くしたのかなって考えていただけで」

紗枝の言葉に彩も頷いた。

マリアは紗枝と彩の反応にキョトンとした表情になった。

「……普通に魔術で、ですけど。先ほどワタクシ言いましたよね。ワタクシのファミリアーの魔術は空気を操る魔術だということを」
確かに言っていた。彩が紗枝にお手本としてカラスを作ってくれないか、と訊ねた時に。

しかし、彩と紗枝が疑問に思っていることはそれではないのである。

「え、やっぱり魔術だったの？ でも、それおかしくない？ マリアのファミリアーらしきものは見当たらないけど」

彩のこの言葉を聞いて、マリアが何か納得した表情をした。

「人体解印です。既に授業で習っていると思うのですが……もしかして、ふたりとも授業をちゃんと聞いていなかったのですか？」

じとつとした目でマリアが彩と紗枝を見たが、ふたりともわざとらしくマリアから視線をずらした。

そのふたりの反応にマリアは思わず溜め息を吐いてしまった。

「ふたりが授業をちゃんと聞いていなかったのは分かりました。仕方なく人体解印についてワタクシが説明します。ですが、これだけは忘れないでくださいね。これは今回だけです。次回同様な事があつたとしても、ワタクシは知っているのを前提で訓練を続けますから」

「う、うん。分かった」

「はい」

ふたりの返事にマリアは「授業はちゃんと聞いてください」という意を込めたのだが、それをふたりが理解したとしてもそれをちゃんと実行してくれるかが、とても不安になったが気を取り直してマリ

アは人体解印の説明を始めた。

「人体解印というのはですね、本来ファミリアの体と精神とその能力を解印するところを、ファミリアの精神と魔術の能力だけを解印し、それを自らの体に移す、という解印方法のひとつの事です」

マリアの説明に、彩と紗枝のふたりは理解できないのか、首を傾げている。

「――ふたりの耳も尻尾も翼も無い状態と考えてくれてもいいです。ただ違うのが身体能力です。ふたりは解印することで人間を上回った身体能力を得ますが、人体解印は何も変わりません。ちなみに言うとですね。ふたりに会う際にはワタクシはずっとこの人体解印をした状態なのですよ」

「えっ？ 何で？」

解印をしていて疲れるということはない。それは人体解印においても同じだろう。しかし、彩達に会う度にわざわざ人体解印をする必要はないのだろうか。

いくら疲れることは無いと言っても、それは単純にとっても面倒くさい事なのではないだろうか。

「それは、今回のような事態になった時に迅速に対応するためです。その場で解印をしていたらその間に取り返しつかない事になってしまうかもしれないですから」

「なるほど、そういうことだったのか。納得した。ありがと、マリア」

「いえいえ。これが仕事ですから」

「あ、そういえば。何でマリア汗掻いてないの？ あんなに暑かったのに」

紗枝もそれは非常に気になっていたのか、うんうんと頷いた。

「あれはただ単にワタクシの周囲に空気の壁を作って、暑さを遮断しただけですよ」

「……………ずるい」

紗枝がポツリと呟いた。

「えっ？」

「ずるいよ、マリア。アヤはまあ自分であんなの出したんだから、自業自得だけど。あたしすごく暑かったんだよ。汗だつてすごい出て来て、もう死んじゃうかと思つたよ」

さり気無く酷いことを言う紗枝に、彩は力チンときた。

「自業自得う？　そもそも、あれは紗枝のためにやったことじゃないか。それを自業自得つて、それは酷いんじゃないかな」

「そんなこと頼んでないもん。アヤが勝手にやったことでしょ」

紗枝のためを思つてやったことをこんな風に言われ、彩の中で何かがプツンと切れた。

「ああ、そう。そんなこと言つんだ。折角わざわざ紗枝のためを思つて、やってあげたことなのに、そんなこと言つんだ。まさか紗枝がそんなこという奴だと思つてなかつたよ」

彩は「もう紗枝の事なんか知らないからっ」と怒鳴つて、第4演習場をものすごいスピードで出て行つた。

彩が出て行くのを見送つたマリアは、紗枝の方を向いた。

「さすがに謝つた方が良いと思いますよ。本人も言つてましたが、紗枝さんの事を思つてアヤさんはやったのですから」

「う、うん。言いすぎちゃったかも」

しょんぼりとしている紗枝に、マリアは近寄つて頭を撫でた。

「きつとお互いに暑さにやられてしまつて、冷静じゃなかっただけです。」

アヤさんも今頃は冷静になつて、ああ言つたことを後悔していると思いますよ」

「うん………分かつた。謝ってくる」

紗枝はアヤの後追い急いで第4演習場を出て行つた。

ひとり第4演習場に取り残されたマリアは、溜め息を吐いた。

「思つていたよりも、大変な仕事ですね。これは」

マリアはこの事を報告するために校長室に向かつた。

第二十一話 忠告、そして仲直り

「はあ、はあ、はあ、はあ……はあ、はあ……」

第4演習場からずっと走り続けていた彩は、解印状態でも持久力
はあまり向上していないのか、かなり息を切らしていた。彩はまず
呼吸を整え、落ち着いたところで辺りを見回す。

「……どこだろう、ここは……」

辺りはすでに暗くなっていた。しかし真っ暗という訳ではなく、
まだ薄暗いという感じだ。

取り敢えず、第4演習場から離れたい、とずっと無我夢中で走っ
ていたので、彩は辺りが薄暗くなっていた事にも自分がどこを走っ
ていたのかも分からなかった。

『取り敢えず、来た道を引き返したらどうだ？』

どうしようか、と悩んでいると突然ベニートが話し掛けてきた。

（あ…ベニート……）

彩の反応にベニートは苦笑いをした。

『なんだ、その反応は。いくらずっと声を掛けていなかったからっ
て、俺の事をすっかり忘れていたような反応をするな。さすがの俺
も傷つくぞ』

「ご、ごめん」

思わず声を出したうえに、彩は頭まで少し下げてしまった。傍か
ら見たら、突然頭を下げて謝罪するのだから、かなり変な人だ。

『別に謝って欲しかった訳ではないんだがな。まあいい。それより、
取り敢えず引き返せ。このままここにいても仕方がないからな』

（うん、それもそうだね）

「——っわっ」

引き返そうと体を反転させ、歩き出そうとしたら誰かにぶつかっ
てしまい、彩は尻もちをついてしまった。

「すまない、大丈夫か？ まさかいきなり振り返って歩き出そうと

するとは思わなかった」

そう言いながら彩とぶつかった人は、尻もちをついてしまった彩に手を差し伸べた。彩はその手を取って立ち上がり、その人の顔を見た。その顔は見知った顔だった。

「孔先生……」

「おや、誰かと思つたら橘くん、君でしたか。——ほう、これは面白い。実に面白いな。これは実際に見てみたいものだ」

突然子雷が愉快そうに顔を弛ませながら、意味の分からない事を言う。何の前触れもなかったので、彩はキョトンとしてしまう。

「ああ、すまない、気にしないでくれ。いや、それにしても、君は災難だな」

子雷がまたもや、意味の分からない事を言う。

「は？」

「きつと明日、私の言つた意味が理解できるだろう。でも、もしその災難から逃れたいのなら、明日は寝坊をしないように気を付けるといい、もしくは明日は学校をサボタージュすれば、災難から逃れられるだろう」

何を言っているのか彩にはさっぱり理解不能だったが、取り敢えず思つた事を口に出した。

「……教師が生徒にサボりを推奨しないでください」

彩の言つた事が意外だったのか、子雷は少し驚いた顔をしたが、すぐに愉快そうに笑つた。

「いや、君は本当に面白いな」

「はあ……そうですか」

ますます、理解不能だと彩は思つた。

「ああ、そうなのだよ。——そういえば、君はここで何をしているのだね」

「えつと、その、別に何かをしていた、という訳ではないんです。ただ無我夢中で走っていたら、気が付いたらここにいたというだけです。——実は今ここがどこなのかも分からない状態です。だから

走つて来た方向に戻ろうかな、と思つて歩き出そうとしたら孔先生とぶつかってしまった、と言う訳です」

「そうか。歸寮するところだったのだね。それは悪い事をしてしまったね。それでは私はこれで失礼する事にするよ」

彩の返事も聞かずに、子雷は歩き出した。しかし、何故かすぐに振り返った。

「——言い忘れていたのだが、もし寮に帰るのならこっちの方から行つた方が速く着くよ」

子雷は彩が行こうとしていた方向とは違う方向を指差した。

「あと、ひとつ言つて置くが、別に私はサボタージュを推奨した訳ではないよ。ただ、そうすれば災難は避けられると言つただけだよ」
弁解をした子雷はまた歩き出した、と思つたらまた振り返った。

「——ああ、すまない。もうひとつ。もし、私の言う事が理解不能だと思ふのならそれでも良い。だがそれだと君はすぐに忘れてしまつたろう。だから明日の事ではなく、これからすぐに起きる事に関して忠告してあげよう」

そう言つて子雷は彩の肩に何の前触れもなく触つた。彩は少し吃驚してほんの少し後ずさつた。

「なんですか？ いきなり」

疑惑の目を向けながらの彩の質問を、子雷はスルーした。

「ふむ……橘くん」

「……なんですか？」

スルーされた事に、少々苛立ちつつ一応彩は返事をした。

「素直に謝る事が吉だよ」

「え？」

「では私はこれで失礼する」

言われた事の意味を彩が問ひただす前に子雷はその場から立ち去つた。

（謝るつて……もしかして、紗枝との事……？）

「……………ん？」

彩がそれを呆然としながら眺め、子雷が見えなくなったところで、空から翼を羽ばたかせているような音が聞こえてきて、それが徐々に彩のいる所に近づいて来ているのと、同時に誰かを呼んでいるような女の子の声も聞こえるのに彩は気が付いた。

「……ア……アヤ……ヤ……」

近づくにつれて、その声が誰の事を呼んでいるのかが分かってきた。

「……俺？ それにこの声って、紗枝？」

『みたいだな』

そのまま、その場に立ち尽くしていると。音と声の主がその姿を彩の前に現した。その主の正体は彩とベニート思った通り、解印をして漆黒の翼を背中から生やした紗枝だった。

「アヤっ！」

紗枝は彩の姿を確認すると、すぐに彩の近くに降りてきた。

「……………」

「……………」

彩と紗枝のふたりとも謝ろうと思っているのだが何だか謝り難いので、ふたりの間に気まずい沈黙が訪れた。それがさらにふたりに謝り難くさせ、数分間気まずい沈黙が続く。

『おい。さっきあの孔とか言う先生に言われただろ。素直に謝れっ
て』

その沈黙を破ったのはベニートだった。もっとも、紗枝にとって
は未だ気まずい沈黙が続いているのだが。

（あれは、孔先生は素直に謝るのが吉って言ったんだよ。別に謝れ
なんて言っていないよ）

『同じことだろ』

（で、でも——）

『御託はいいから、さっさと謝れ』

うじうじと言いつつ謝り続けようとする彩の言葉をベニートは自分の言葉で遮った。

(うう……分かったよ……)

彩は1回深呼吸をしてから、紗枝の方に視線を向けた。

すると、彩と同じ様に彩の方に視線を向けた紗枝と視線が合ってしまった、思わずふたりして視線を外した。

『おい』

すかさずベニートが反応する。

(わ、分かってるよ)

『ならいいんだがな』

意を決してもう一度紗枝の方に視線を向けると、また視線が合ってしまうが今度はふたりとも視線を外すことはなかった。

「アヤ！」

「さ、紗枝！」

そして彩と紗枝は同時にお互いの名前を呼んだ。

「ごめんねっ」

「ごめんっ」

またもや同時に頭を下げ、謝った。

ふたりとも1度目を丸くした後、行動が被った事がなんだかおかしくなり、ふたりは思わず笑ってしまった。

ひとしきり笑い落ち着くとまた沈黙が訪れたが、今度の沈黙はさつきみたいに気まずい沈黙ではなく、とても心地の良い沈黙だ。

「アヤ」

紗枝が沈黙を破り彩の事を呼んだ。

「ん？」

「ごめんね、アヤはあたしの事を思ってたやってくれた事だったのにあんな事言っちゃって」

「別にいいよ。私の方こそ恩を押しつけるみたいに言っちゃってごめん」

「それは——」

このままだと永遠と続きそうなので、彩は手で紗枝の言葉を止めた。

「それ以上は、もういいよ」

「そうだよな」

「そろそろ寮に戻るっか」

「じゃあ、空から行く？」

紗枝がそう言つて、漆黒の翼を軽く羽ばたかせた。

「……遠慮しとくよ」

「もしかして、怖いの？ アヤ」

紗枝が彩の顔を覗き込みながら、少しからかい混じりの声色で訊いてきた。

「そんな訳ないじゃん」

言葉では否定してはいるが、目が泳いできてしまっているので説得力は皆無だった。

「じゃあ、問題ないね」

そう言つて紗枝は普段からは想像も出来ないスピードでアヤの背後に回り、しっかりと彩を捕まえ翼を羽ばたかせ飛んだ。

「うわああああ」

彩はまだ高度が低い内に逃れようとしたが、力が上手く入らなくて逃れる事は出来なかった。

「アヤ、暴れないでよ。落としちゃうよあ」

紗枝の言葉を聞いて、地面を見下ろした途端にアヤは大人しくなった。すでに30メートルぐらゐも地面から離れていたからだ。

『情けないな』

「うっ」

容赦のないベニートの言葉にアヤは思わず声を漏らした。

「どうしたの？ アヤ」

「なんでもない」

「そっかあ」

何故か紗枝はスピードを上げた。

「ちょ、ちよつと！ なんでスピード上げてるの！？」

彩の言葉はスルーし、紗枝はさらにスピードを上げた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

彩の叫びは教職員居住エリアから学生寮エリアまで響き渡った。
この時彩はすっかり子雷に言われた事を忘れていた。

第二十二話 災難な朝

「……………」

時刻は8時55分。

朝礼が始まる時間は9時。つまり遅刻まで後5分。

しかし、女子寮から彩が向かうべきC組の教室までは徒歩20分はかかる。

『ボーっとしてる暇はないんじゃないか？』

「そうだった！」

ベニートに声を掛けられて、彩はベットから飛び起きて急いで制服に着替え始めた。

着替え終わり、鞆を持ち寮を出る頃には1分経過していた。つまり残り4分でC組の教室まで行かないといけないという事になる。誰がどう考えても間に合う筈がないが、彩はまだ諦めていなかった。

その理由は、朝礼が始まるのが9時だといっても実際に仙道が教室に来るのはその2、3分後くらいだし、今は解印状態なので脚力は常人のそれを軽く超えている、だから本気で走れば3分くらいで付けるかな、と予想したからだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

全力疾走の結果、3分で校門に到着した。彩はさすがに疲れてしまい、少しの間その場で休憩した。

彩の予想よりも少し遅くなってしまったが、まだ間に合う時間だ。彩は自分が普通でない事を神様に感謝しながら、教室に向かった。

「——間に合ったあ」

校門から教室のドアまで1分——1分もかかってしまったのは校内という事で速度を落としたからだ——で到着し、ホッとしながらドアを開けて急いで教室の中に入った。

「っ！」

彩は教室に入った途端、丁度ドアの前にいた誰かにぶつかってしまい、そのままその誰かを押し倒してしまった。

思わず目を瞑ってしまった彩は、唇になんだか柔らかい物が当たっている事に気が付いて、恐る恐る目を開けてみると、目を見開いた森の顔が彩の視界を占領し、彩から森の唇に自らの唇を押し付けるような感じになっていた。傍からは、彩が森を押し倒し無理矢理キスをしているように見える。擬音を入れるなら『ぶちゅうつつ』が適当だろう。

何が起こったのかを理解できず（もしくは理解したくない？）に、そのままの状態で固まっていると、何事かと彩と森の方に視線を向けたクラスメイト達が色めき出した。

男子達は絶望に打ちひしがれたり、今起きた事を認められずにブツブツと呟きだしたりしている。女子達は彩の大胆（？）とも取れる行動について楽しそうに話し合っている。いつものメンバー達も最初は皆一様に驚いていたが、セレナは彩と森の方を見たままニヤニヤし、シャルロットは何か悟ったような顔をし、紗枝は驚いた顔のまま、まばたきを繰り返し、由紀は顔を引きつらせ、マリアとフレイは生暖かい視線を彩と森に送っていた。

「おい、お前ら騒がしいぞ！ 静かに、し……ろ」

廊下までクラスメイト達の声が聞こえていたのか、ドアを開けて早々に仙道が注意したが、目の前の彩と森を見て勢いを失い、仙道は固まってしまった。しかし、すぐに笑顔を浮かべ彩と森に近付いた。

「橘、矢光、朝からお盛んなのは結構だが、もう朝礼の時間だ。それにココは教室だ。ＴＰＯを考えろ」

仙堂の言葉に彩はようやく、森から唇を離しブーツとしながらふらふらと立ち上がると、教室が静かになり教室にいる全員―森を除いた―の視線が彩に集まったが、彩は気にした様子もなく自分の席にふらふらと向かい、席の前まで来ると１度自嘲気味に軽く笑い座

った。森は今起こった事を理解し、顔を真っ赤にしながら立ち上がり急いで席に着いた。

「……あー、それでは朝礼を始める」

この事は後に男子の間では『橘アヤの錯乱』、女子の間では『橘アヤの悲劇』として語り継がれる事になる。

「……………はっ！」

昼休みとなり、いつものメンバーで学食に行き、席に座ると彩はようやく正気を取り戻した。そしてすぐに辺りを見回した。

そこには、食事をしながらお喋りをしている生徒達や、黙々と食べ物を口に運んでいる生徒などがいた。

「学食？　なんで学食にいるんだろっ」

「あ、アヤが生き返ったわ」

彩が正気を取り戻した事に最初に気付いたのはセレナだった。

「『生き返ったわ』って何だよ。別に死んでないよっ」

「いや、午前中のアヤは生きてるとは言えない状態だったから」

「……………」

セレナの言葉に彩は黙り込んだ。

「？　どうしたのよ？」

「えっと、私、教室のドアを開けてからの記憶がないんだけど……もしかして何かあったの？」

あまりのショックに、彩は防衛本能が働き、無意識に朝の出来事を記憶から消去したのだ。

その事をすぐに悟ったセレナは、彩を憐れむような眼差しで見た。「何！？　その憐れむような眼差しは。一体私に何があったの！？」

訳が分からず焦る彩に、セレナは彩の肩に手を置いた。

「ごめんね、アヤ。私、最初勘違いしていたわ。まさか記憶を失うほどアレがショックだったなんて思わなかったわよ」

「『アレ』って何!？」

すぐさまセレナに詰め寄るが、教えてくれる気はなさそうなので紗枝の方を向いた。

「ねえ、紗枝。アレって何なの？」

「……………」

突然話を振られた紗枝は言い難そうな顔をして教えようとしてくれない。それでも、なお彩が紗枝を見つめ続けると、ようやく紗枝が口を開いた。

「アヤ、あたしね、世の中には知らない方がいい事もあるって思うんだ」

しかし、それは彩の求めている回答ではなかった。

仕方なく紗枝から教えて貰うのも諦め、今度はシャルロットの方に視線を向けるとシャルロットはあからさまに目を逸らし、気まずそうな顔をした。

何故シャルロットが気まずそうな顔をしたかというと、彩が森を押し倒しているのを見た時に、シャルロットが彩は女ではなく男が好きなのだ勘違いしてしまい、それが勘違いだったと後から分かって1度そう思ってしまったらそうとは思えなくなってしまうからだ。彩のどこからどう見ても女にしか見えない外見もひとつの要因となっている。

「もうみんなしてなんで教えてくれないんだよ……………」

残りのメンバーもひとりずつ視線を向けてみると、由紀は何故か拗ねたような顔をしていて、森は何故か目が合った途端に真っ赤になりすぐに目を逸らし、フレイは苦笑いをし、マリアは微笑んだ。

「アヤ、森とは視線を合わせない方がいいわよ」

セレナが森をケダモノでも見るかのような目で見た。

「なんでだよ!」

「なんで?」

侵害だと言わんばかりに森が立ち上がり、彩の方は不思議そうな顔をした。

「押し倒されちゃうかもしれないからよ」

「押し倒されたのは俺の方だ！」

「朝の事でアヤを意識ちゃって、それで気が付いたらアヤの事が好きに、なんて事になって気持ちを抑え切れなくなり今度はあんたが押し倒す、って事になるかもしれないわ……いえ、ほぼ間違いなくそうなるわね」

セレナは腕を組み自らの言葉にうんうんと頷いた。

「そ、そんな訳ないだろ！」

「焦るところがあやしいわね」

愉しそうにセレナが笑った。

「くっ……今は何を言っても墓穴を掘る気がしてきたぞ」

彩は何が何だか分からなかったが、セレナの言葉にゾワゾワッと全身に鳥肌が立ち、怖くて森の事を見ることが出来なくなった。

学食で騒がしくしている彩達を、隅っこの方から見ている男子生徒のふたり組がいた。

「……あれが橘アヤと八柳紗枝か」

男子生徒のひとりが彩と紗枝に視線を向けたまま呟いた。

「ああ。見ていると別段警戒する事もないような気がしてくるが、それでも奴らの能力は未知数だからな」

もうひとりの男子生徒も彩と紗枝に視線を向けたまま答えた。

「まあ、なんにしても俺達ケルベロスの障害となる物は排除するだけだ」

「そうだな」

そう言うのと、ふたりの男子生徒はその場から立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2118s/>

Familiar Spirit

2011年9月28日03時14分発行